之候よし、皆々其理、的然之御器量を奉賞翫者也、助命爲致座は一旦之情ニ而、其當座社名をも譽らるれ、行末は夫々江有付、家を立れば、何れも同じ武士道の人にして、末代迄に秀名は殘るべからず、かゝる忠臣の武士四拾六人、一同に死失ぬるにより、天下に万代不易の佳名には至りける、既に切腹被仰付候を承、內藏助初、何樣之科にも可被行を、切腹被仰付候段難有旨領御請申上けると也、

〔一話一言二十一〕義士切腹被仰付候事

一右同日〇元祿十六年二月四日淺野內匠頭家來共、去年十二月十五日之朝七時、本所二ッ目吉良上野介屋敷へ押込、上野介を討捕、即日芝泉岳寺へ立退候ニ付、彼者共、四ヶ所へ、御預ヶ之處、不殘切腹被仰付候由、細川越中守方へ御預十六人之撿使御目付荒木十右衞門、御使番久永內記、毛利甲斐守方へ御預ヶ十人、撿使御目付久留十左衞門、御使番齋藤次左衞門、松平隱岐守方へ御預ヶ十人、撿使御目付杉田五左衞門、御使番駒木根長三郎、水野監物方へ御預ヶ十人、撿使御目付鈴木次郎左衞門、御使番赤井平右衞門、右之通承り候間、爲覺書記置申候、〇中略

右件々ハ、南町奉行所古文書より抄出せし由、烏亭焉馬ニ得て寫置、己巳六月廿四日

〔久松家〕赤穗御預人始末〕一未刻過〇元祿十六年二月四日御撿使之御衆中御中屋敷御越有之、〇中略大守樣〇定直御出座御挨拶有之、即刻御引退、御番頭奥平次郎大夫、佃九兵衞、御目付列座ニ而、御預之拾人江、御目付衆御越被成被仰渡旨之由ニ候、麻上下着用座敷江可被罷出旨申達、奉畏候旨御請有之、兼而拵置候麻上下幷小袖一重充、足袋等與之、何茂早速着替、御玄關溜座敷迄駕ニ而遣之、相揃置、大書院江番頭同道ニ而、何茂一同罷出、御家老御用人御目付相詰ル、于時一同ニ被呼出、五左衞門樣御書出之趣、左之通口上ニ而被申渡之、

淺野內匠儀、勅使御馳走之御用被仰付置、其上時節柄殿中を茂不憚、不屆之仕形、付而、切腹被仰付、吉良上野介儀無御構被差置候處、主人之仇を報候と申立、內匠家來四十六人致徒黨、上野介宅江押込、飛道具迄持參、上野を討候始末、不恐公儀候段、重々不屆ニ被思召候、因茲切腹申付者也、

右之通被申渡候處、切腹被仰付候段、難有奉存候、由及御請、相濟而、大守樣於小座敷御會釋有之、

一申刻過支度相整候ハヾ差出候樣、御撿使衆ゟ被申聞候得共、大法故、少々ヅヽ時刻延候、然共再三被申聞候故、申中刻支度相整、〇中略

一於大書院庭切腹可爲仕旨撿使衆依御差圖、花色無地幕ニ而庭を圍、御玄關ゟ右場所迄筵薄緣敷之、切腹場所御書院南築山前、幕張リ、筵敷之上ニ、疊二枚、淺黃木綿ニ入蒲團敷之、脇之方江血隱砂桶ニ入隱置、切腹人之後、持筒壹人、足輕壹人ヅヽ、白衣ニ而蹲居ス、幕之圍之後江人可來哉之ため、又ハ死骸取込候之砌、蒲團ニ而包候節手傳之、

一御預之面々、御玄關ゟ壹人ヅヽ庭江罷出案內、御留守居御目付交々同道、座敷江並居、番頭兩人ニ而順々呼出案內、致切腹順、介錯如左、

大石主稅、十六歲　朱書圓寂刃上樹劍信士　右介錯　波賀清大夫

堀部安兵衞三十四歲　朱書圓寂刃雲趣劍信士　右介錯　荒川十大夫〇中略

右之通、一番ニ主稅罷出、三方ニ小脇差居出之、主稅蒲團之上ニ着と否、御撿使衆之方江謹而御禮仕、諸肌ぬぎ、介錯人江致時宜、小脇差取上候所、首ヲ打、介錯淸大夫、左之手ニ而主稅タブサヲ取上、左之足ヲ敷右ヲ跪而、御撿使衆江入實見引退、其儘中間四人出、首體共ニ三方一所ニ蒲團ニ引包、勝手江引之、

但血少々庭江見へ申候ニ付、桶ニ入置候砂を以て早速かくし、疊筵共血付不申候得バ、其儘用之、蒲團計敷替ル、〇下略

〔續視聽草三集八〕

赤穗義士切腹圖

元祿十六年二月四日
御預り被成候十七人
之者何モ切腹被仰
付四ツ過ヨリ七半過
ニスキト仕廻申候

大書院

御家來
御側衆

勝手口詰人

座敷圖

十七人ノ者

廊下介錯人何レモ是ニ詰

御作事奉行
野々村藤太夫
宇野源右衛門

右田
堀田
相賀

御留守居

御小性頭

白幕

小性組右

小性組跡介錯人

小性組左

御舞臺

御目付
檢使
上使

步目付
板椽
左右
步目付

御家來御側衆

御人目付十五人

白紙屏風

上ニ白風呂敷疊三疊

步御使番三方持出ル事

物頭
關忠右衛門

此圖は元祿十六年二月四日、赤穗の義士賜劒の時、右田才助（御奉行所物書）竊に其場の全體を視上、撿使より下卒徒の吏に至るまで、排列階級を混せず、審に警衛諸士の多少を辨別し、凡目に觸るゝ所の者は、悉く是を諳じ、事終るに及て惆悵嘆息して、終に慷慨の志を發し、直に眞を寫し、秘して以て家笈に藏め、永く子孫に傳ふる事爰に百年、然るに此畫圖は堀部氏眞（金丸六代藤馬）が請に因て、右田才助（當代の才助ハ七方上御番）前人摸する所の古圖を臨摹し、以て贈る所といふ、予曾て氏眞に相親む事年有り、疇昔の夜、雜話頃刻にして殆ど義士の事に及べり、氏眞禁錮して予に示すに此一小圖を以てす、愕然として覆を發ひて是を察るに、其態情意氣の全き事眞に感ずるに堪たり、嗟呼忠心義氣の摸する所に非んば、いかんぞ如此眞を得べけんや、反復往返して是を覽れば、涕泗更に止むべからず、一度是を見るに及や、忽然として所思ありといへども、深く氏眞が秘する所以を以て、輙く是を庶幾する事を得ず、心中頻に思慕し、言ふ事を肯せずといへ共、素より氏眞予が信心の切なるを知て寫を許諾す、於是心欣々として宛も珠玉を得るごとく、默して是を稽ふるに、如何なる天祥歟、かくのごとき幸に遇ふ、夫天の議るべからざる、今百年の後再拜して予が手裏に落る事、可怡して可恐、嗚呼天哉命哉、彼の右田氏の子、忠心貫日、義氣凌雲と、夫此謂歟、今我れ百年の後に生れて、かの右田子と同志、遠き事古今世を異にするといへども、其近き事比鄰のごとし、古より今に至る迄、其志を通徹する事、是其忠心義氣の傑然たる者に非ずや、此時右田子無んば、誰か敢て眞を遺さん、今亦才助頗る前人の志を續て、氏眞に傳ふと、予をして氏眞徵せば、惡んぞ亦得べけんや、卽其臨摹するに及ては、忠七毫を採り、信以て筆端に及ぼし、永く子孫に傳へて赤心報國の模範とせんと、顧ず卑言を綴て後世虛疑の誹謗を拒んと欲する者、また唯是のみ、

文化十三年丙子冬十一月十五日　　飯岡義章謹誌

〔營中刃傷記〕御法事之節其外刃傷記

寶永六年己丑二月十六日、於上野東叡山常憲院樣御法事之節、御用掛織田監物（一万石秀親）前田采女正（一万石利昌）監物を殺害す、石川主殿頭（江）采女正御預ヶ、同十九日主殿頭於宅采女切腹被仰付、介錯御徒目付野田甚五兵衞、

〔翁草十一〕板倉修理細川越中守を刃傷之事

延享四卯年八月十五日、殿中大廣間、四之間北緣に手負有之由詈る、仍之詰合の御徒士目附數輩、早速彼處へ馳行見之、揔身朱に染て、誰とも見分難ニ付、姓名を問へば、細川越中守と被答、相手を尋るに、不見知者成が、上ミ下モ着し居候由を被申、因茲方々搜し求るに、大廣間小便所の廊下に、拔身の脇差捨有之故、其邊無隈尋る處に、小便所之奧、雪隱に人陰見えける儘、御徒士目附、御小人目付立蒐て捉之、姓名を問へバ、御旗本板倉修理（五千石）と答、其意趣を尋るに、先刻誰とハ不知、小便處へ參候者、脇差を拔候樣ニ見請候故、拔合せ切申候、其後の事ハ一向覺え不申候、乍去人を切候へバ遁れ難く存じ、懷中の鑷にて髮を切、脇差ハ捨候旨申之、仍て先ッ雪隱より引出し、蘇鐵の間之脇、小部屋へ入れ置、御徒目付附添罷在、大目付石河土佐守、水野對馬守、御目付中山五郎左衞門、神尾市左衞門、土屋長三郎、横田十郎兵衞、橋本阿波守、菅沼新三郎、八木十三郎、西之丸御目付神尾伊兵衞、中島彥右衞門、安藤喜右衞門等立會、吟味之處、右口上之通、全く亂心と相見え候付、卽水野監物へ御預ヶ、越中守ハ殿中御間の內より駕にて歸宅、早速御醫師武田叔安、外科西其哲を御附、上使永井伊賀守を以御尋、尙又爲上使堀田相模守被相越、御懇之上意ニて、板倉修理儀、亂心ニ而

如此、仍御預被仰付候、追而御仕置之御沙汰可有之候、上より御差圖之趣有之間、家中相騷申間敷之旨也、○中略同廿三日、水野監物方江爲撿使大目付水野對馬守、御目付橋本阿波守、八木十三郎、御徒目付、御小人目付差添罷越、板倉修理へ被仰渡趣、板倉修理義、去ル十五日、於殿中細川越中守へ手疵負セ候始末、雖亂心、越中守右手疵にて相果候上ハ、切腹被仰付者也、一說、修理事、相馬彈正ニ意趣有之、九耀之紋を見損し、人違ニ而如此と、不知實否、

〔營中刃傷記〕淳信院樣御代

延享四年丁卯八月十五日、細川越中守宗孝、從四位下侍從肥後國熊本城主五十四萬石寄合板倉修理、高六千石於殿中致亂心、大廣間小便所にて、越中守手疵爲負、小便所に隱居候を捕、水野監物忠之江御預ケ、右手疵に而越中守卒去、依之八月廿三日、於水野監物宅、修理切腹被仰付候一件、

寄合　板倉修理

右は於殿中致亂心、細川越中守江手負せ候に付、當時水野監物江御預ケ被仰付候、

上使永井伊賀守　細川越中守

右は於殿中手疵負候ニ付爲御尋被遣之、○中略

同廿三日

寄合　板倉修理

右修理儀、去十五日、於殿中致亂心、細川越中守江手疵負せ候に付、當時水野監物江御預ケ被仰付候、亂心とは乍申、越中守、右手疵養生不叶相果候ニ付、於監物宅切腹被仰付候、大目付水野對馬守罷越申渡ス、御目付橋本阿波守、八木十三郎爲撿使罷越ス、

〔刑罪書〕御證文寫

天明四年辰三月廿四日入

壹人　佐野善左衞門　歲廿八是者新御番蜷川相模守組

此者儀、田沼山城守殿江爲手負候ニ付、揚座敷ニ入、

右佐野善左衞門儀、去月廿四日、於殿中田沼山城守江手疵爲負候、亂心といへども、山城守右手疵ニ而依相果候、切腹被仰付旨、松平周防守殿依御差圖、於評定所大目付大屋遠江守、町奉行曲淵甲斐守、御目付山川下總守立合申渡候間、撿使江可相渡者也、

辰四月三日

右善左衞門死骸、古法之通、出役藤由介十郎、由比忠五郎ヲ以相伺候、尤帶刀組同心差添、評定所江差遣候處、左之通之紙面持來ル、

服部仁左衞門樣　藤田介十郎

佐野五郎左衞門樣　由比忠五郎

佐野善左衞門死骸之儀、貰人も有候はゞ可遣哉之旨、御頭江相伺候處、勝手次第可仕旨被仰渡候、依之御達申候、以上、

四月三日

〔憲教類典二ノ三國替所替〕年號月日不知

松平石見守領知被召上候時被仰渡覺○中略

一伊木伊織、家老之身として、國輩に對し遺恨を申、主人を輕しめ、家來之者大勢立退候樣、常々仕來候ニ付、父子共に切腹被仰付候事、

一大原久右衞門、田邊庄左衞門、宇津孫右衞門、山脇久左衞門、鈴木平右衞門、名倉喜左衞門、黑川恒左衞門、丸山忠兵衞、杉屋太左衞門、寺西忠左衞門、山本喜左衞門、小寺八郎兵衞、以上拾貳人之者共、物頭役人目付以下之身として、主人を輕しめ、日切いたし暇を申、其上大勢令徒黨立退候樣に仕候義、別而曲事被思召候、父子共切腹被仰付候事、

獄舍切腹例

年號月日不知

生駒壹岐守領國被召上候付被仰渡之覺○中略○

一石崎若狹前野治大夫事家老之身として主人之爲無沙法にいたし家中之者常々令一身立退候樣に仕成曲事ニ被思召候ニ付父子共切腹被仰付候事、

〔維新史料編纂會聞見錄〕安島帶刀

名は信立始め彌次郎と稱す爲人沈實慷慨氣節あり烈公に信用せられ東湖に繼で事に關り忠誠の士なり○中略○安政六未年四月二十六日終に評定所にて尋の上九鬼長門守へ預け同年八月二十七日牢屋敷にて切腹被申渡たり、

申渡

水戸殿家老　安島帶刀

其方儀御舘より一橋家御相續有之當刑部卿殿御養君に被仰出西丸へ御直り可被遊候哉との儀兼々及風聞等候處近年專右世評等有之此上自然天運に被爲叶右之通御治定相成候ならば無此上恐悅の儀と一藩難有儀に存居り右風聞の趣折に觸れ前中納言殿へ御聽入候處右樣の儀申唱候者有之候とも程能申消し猥りに口外等致間敷藩內の者へも心得違無之樣申聞可置旨無急度御沙汰有之處右申上候節御氣色御不興と申にも無之右は紀伊殿も被爲在候儀ニ付右樣御沙汰は有之なれども自然世評の通り成ならば御滿悅可思召と普通の人情を以御內意推量兼て口外をも致す間敷と被命候趣申立ながら假令外用向申遣候も文通端書に候へども同家來在京役鵜飼吉左衞門幷同人悴鵜飼幸吉へ右世評の趣大慶同意の旨書き加へ申遣同藩茅根伊豫之助より同樣の儀に付尙勘辨可致旨右吉左衞門父子へ申遣し候趣追々伊豫之助より噂聞及ぶとも其儘に致し置且去年七月中元家來來其頃松平薩摩守家來來日下部伊三治上京の砌市中酒店に於て及出合候て儀別迄の事と申立なれども既に同人上京の上吉左衞門父子申合不容易儀堂上方へ致入說傳奏衆より同人へ勅諚御渡に相成候次第に至る上は全儀別迄と申分紛敷其上去午年九月十八日附にて鵜飼父子へ此者宛の書狀二通幷日下部伊三治宛此者方迄差出す都合三通の文言にも是迄專彼者と同意相働の的證相見え御養君の儀は御大切之御儀と假令御主君御內命有之儀に有之候ば御諫言をも可申職掌の處却て御內意を推察致し右體鵜飼父子へ及文通猶右の者ども京地にて種々奸計を廻らし公武御確執にも可及場合に至り候段對公儀不輕儀右始末不屆ニ付切腹申付る、

未八月

斯切腹と申付られたるは名目にて實は牢屋敷にて非人の手にかけ打首にせし由なり此時帶刀四十八歲なり、

帶刀牢屋敷において切腹被申付候節幕府目付始檢使役人立合介錯の人等嚴重なり勿論中古以來自分に屠腹と申事は無之扇子を三寶に載せ夫を戴く相圖に首を落す例なり此日帶刀其席に臨み介錯人に向て曰く聊か申度儀有之候得ども二三日以來口中氣にて言舌通じ兼候間水を一盃飲度旨申に因て檢使より水を與候處帶刀一口二口呑み終り外の儀には無之今般御預相成候中殊の外丁寧に取扱吳千萬忝次第此段君侯え厚く禮を申述候旨其役人え御申通被下度且又介錯の御役御苦勞に存候宜敷相賴み申て首を延したり此時檢使の役人初め其從容死に就きたる樣子を見て暗涙を流さぬものなかりしとぞ、

此は牢屋同心より大山某なるもの承りたる話、

〔嘉永明治年間錄〕安政六年八月廿七日常州水戸ノ臣安島帶刀ヲ殺ス、

安島帶刀は水戸の臣去年戊午幕府に罪を得て京都に捕へられ尋て江戶の獄に下り今歲己

未八月廿七日を以て刑せらる、

古事類苑

法律部三十四

下編上

獄門

獄門方法　一九一
獄門制度　一九五
獄門例　同
外國人處刑　二〇二
犯罪地行刑　二〇三
死後處刑　二〇五
引廻之上獄門　二〇六
僧徒處刑　二一〇
婦人處刑　同

磔

倒磔・牛割
水磔併入

磔方法　二一二
磔制度　二一三
磔例　二一六

婦人處刑　二一八
犯罪地行刑　二二〇
死後鹽詰之上磔　二二三
死後不磔　二二八
晒之上磔　二二九
引廻之上磔　同
○
倒磔　牛割　二三一
水磔　同

鋸挽

鋸挽方法　二三三
鋸挽制度　二四〇
鋸挽例　同

火罪　投熱湯　坑殺併入　臥漬

火罪方法　二四二
火罪制度　二四九
火罪例　同
犯罪地行刑　二五五
○
投熱湯　二五七
臥漬　二五八
坑殺　二五九

古事類苑

法律部三十四

下編上

獄門

獄門ハ、卽チ梟首ナリ、德川氏ノ時ニハ、獄舍ノ門前ニ懸クルコトナクシテ、大抵淺草小塚原ト、品川鈴ケ森トノ刑場ニ於テ之ヲ行ヘリ、其法ハ、獄內ニテ斬首シ、其首ヲ水ニテ洗ヒ、苞ニ入レ、非人ハ科書ノ捨札ヲ將チテ前行シ、其場ニ送リテ之ヲ梟シ、又非人ヲ以テ番人トシ、二夜三日ノ間之ヲ徇シテ、然ル後ニ其首ヲ棄ツルナリ、而シテ其捨札ハ三十日間刑場ニ建テ置クモノトス、其罪ノ重キハ引廻等ノ屬刑アリテ、罪狀ヲ錄シタル紙幟ヲ前ニ建ツルナリ、又其犯罪地ニ於テ梟首スルコトモアリキ、

獄門方法

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

（從前々之例）

一獄門

於淺草品川ニ獄門ニ掛ル、在方ハ惡事致候所江差遣候儀モ有之、引廻捨札番人右同斷、（三日之內非人番附置）

但牢內ニおゐて首を刎、欠所右同斷、（C田畑家屋敷、家財共欠所、）

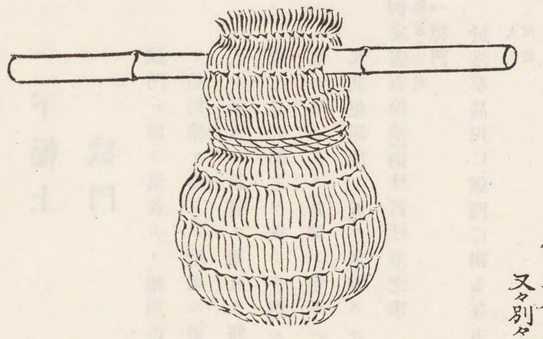
〔事蹟合考一〕梟首場之事

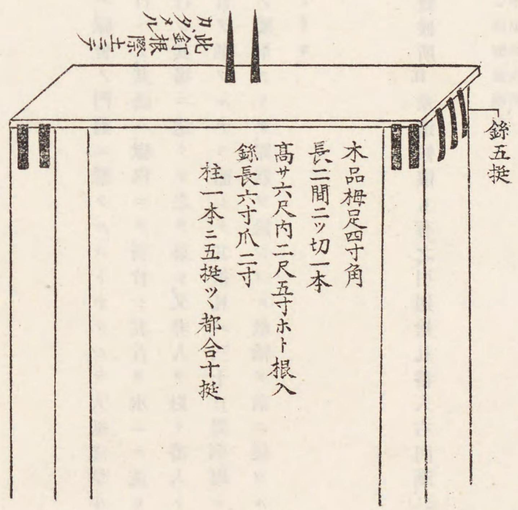
一御入國以前までは、本町四丁目梟首場にてありしよし、これによつて、山王明神の兩祭禮ともに、神輿ならびに練り物等まで、今にいたり渡らざるなりといふ、

〔刑罪大秘録〕

獄門臺木一人掛け一圖

但　二人掛ハ長六尺
　　三人カケハ長八尺
　　又々別々ニモ掛ル

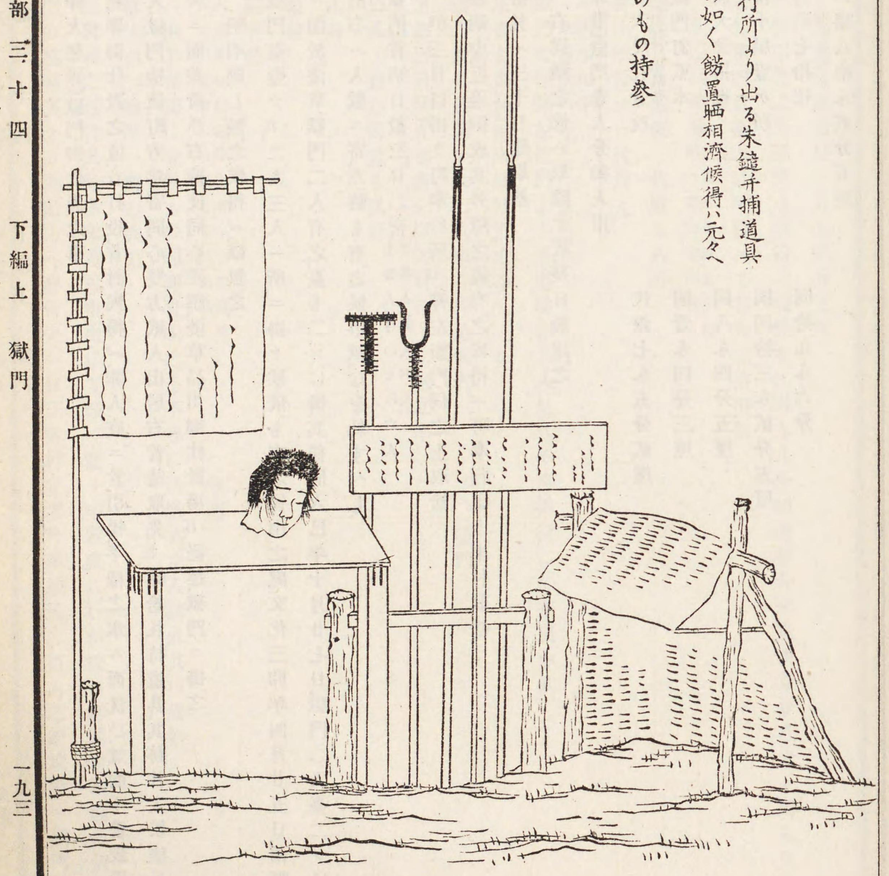




木品栂尺四寸角
長二間二ツ切一本
高サ六尺内二尺五寸ホト根入
錣長六寸爪二寸
柱一本ニ五挺ツヽ都合十挺

獄門圖

兩町奉行所より出る朱鎧并捕道具晒中圖の如く餘置晒相濟候得ハ元々へ納る
但谷のもの持參



〔刑罪大秘錄〕獄門御仕置之事

一死罪御仕置之通、首打役、首討候得バ、非人直ニ首引揚、手桶之水ニ而洗ひ、兼而手當致置候俵ニ入、獄門撿使、町方年寄同心雙方貳人出居、右首請取、先江幟捨札持道具、其跡首入候俵を非人兩人ニ而差荷ひ、右撿使同心差添、淺草品川御仕置場江罷越、獄門ニ掛之、

但引廻し無之候得バ、幟無之、

一獄門臺壹ツ江、二人三人一所ニ掛ケ候儀も有之候由之處、文化三卯年四月廿五日、兩町奉行懸ニ而、於淺草獄門二人有之、臺も二ツに掛、其後同六巳年十月廿七日、獄門二人臺二ツに掛ケ候由、右ハ人數ニ寄、差略も有之候事歟、なを糺すべし、

一獄門首晒日數三日二夜、上番人、谷のもの六人、下番人、非人六人、

但三日目掛リ町奉行所江彈左衞門伺之上取捨、

一右晒中、近邊御成、其外障之儀有之候得バ、町奉行より申付取捨、

一捨札ハ三十日建、取捨、

右同斷之節ハ取除ケ置、殘日數建之、

〔刑罪書〕獄門壹人分御入用

一椴六尺札壹枚　代銀七匁五分貳厘
但打釘添抗共

一獄門釘貳本　同壹匁四分三厘

一同大鉢拾挺　同八匁四分五厘

一番小屋壹ケ所　同四拾三匁貳分五厘

一箍薪七拾把　同拾九匁六分
但二夜分

〆銀八拾匁貳分五厘

此金壹兩壹分ト五匁貳分五厘

但引廻之上、獄門ニ候得バ、幟壹本、代六匁八分相增、都合金壹兩壹分貳朱ト四匁五分五厘、

右之外獄門首臺木は、御役ニて谷大工拵申候、

但右同斷候〇前文云、前日牢屋鋪江呼寄申附候

一蠟燭　拾貳挺　代壹匁八分

一醬油樽壹ツ　代壹匁

〆貳匁八分
是は彈左衞門自分入用にて差出申候

右獄門之節、彈左衞門より差出候非人人足は、不殘御役にて差出申候、

獄門制度

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從前々之例

一盜可致と徒黨いたし、人家江押込候者、　頭取　獄門

〔御定書百箇條〕人相書を以、御尋に可成者之事、

寛保二年極

一公儀江對し候重き謀計

同　一主殺

同　一親殺

同　一關所破

同　一人相書を以、御尋之者を乍存圍置、又は召仕等にいたし、不訴出者、　獄門

但乍存請に立候もの同罪、吟味之上不存に決候共、主人請人共に過料、

獄門例

〔翁草四十五〕嶋原一揆の次第

一三會村之百姓共、餘多味方可申由にて城江籠リ申候處に、いか樣ニ存候や、鐵炮長柄六十程取、樓門の脇塀裏より逃、敵方へ參候、夫ニ付三會村之者、吟味被致、二百人之餘、城中ニ獄門ニ掛られ

申候、

〔御仕置裁許帳 九〕寛文九年酉十一月廿四日

三人　孫右衛門　善太郎　三十郎　是ハ上總國青木村保科越前守知行所之百姓、此者共芝浦ニ而流し藻をいたし鴨を取候處を、所之名主八郎兵衛、小左衛門、幷獵師共見出し捕へ、御鳥見佐山角左衛門、山本市右衛門、岡田半左衛門、加藤伊兵衛右之四人を斷ニ而、穿鑿之內牢舍、右三人之者共、戌二月三日、牢屋ニ而首を刎、於佃島獄門、

〔御仕置裁許帳 九〕貞享五年辰正月廿八日

壹人　清兵衛　是ハ磐井町三丁目津輕宜春店之者、此者品川表ニ中川尻ニ而、鳥を取候由牢舍、作右衛門、八兵衛訴人申ニ付、今日召寄遂詮議候處、前方鳥取候由白狀申ニ付牢舍、右之者同辰五月廿九日、於牢屋首を刎、本所三ツ目横堀ニ而獄門、

〔御仕置裁許帳 九〕元祿二年巳四月十二日

壹人　安左衛門　是ハ櫻田鍛冶町源左衛門店之者〇中略

仁左衛門　是ハ木挽町七丁目清左衛門店之者

貳人

久兵衛　是ハ彌左衛門町與兵衛店之者

右兩人之者頭取ニ而、御堀之鯉鮒を取候者、

右之者共、中根主稅方江捕爲致牢舍候、加藤平八郎方ゟ相渡候ニ付、遂詮議候處、右之通ニ候故、同巳五月十一日、於牢屋死罪、品川獄門、

札文言

此安左衛門、仁左衛門、久兵衛四年以前十一月、大手之方之石垣出先ゟ平川口之方御堀江さしあみをはり、魚を取申候、其前夜仁左衛門、久兵衛つれ立參り、內櫻田御門きわ御堀御馬屋之方江、魚を取り可申とさしあみをはり候科によつて、三人之者共、ごくもんにおこなふ者也、

五月

〔瀨田問答〕一天一坊ガ事實說ニ御座候哉、

答、天一坊ガ事實說ニ御座候、

享保十四己酉年四月廿二〇二一日本作八日

右ハ僞之儀共ヲ申觸シ、浪人共ヲ集メ、公儀ヲ不憚、不屆ニ付、死罪之上、獄門ニ行者也、評定所一

右之通御日記ニ相見エ申候、

天一坊　改行　西三十一　於二右ハ評定所一

〔舊記拾要集 四〕元文五年申七月廿三日御用覺帳書拔

一元文五年申七月廿三日於評定所御詮議もの落著の覺

獄門　小普請組土屋平三郎支配　山田勝之助家來　穗高助之進　歳四拾七

右助之進、揚り屋ゟ落緣江被召出被仰渡候は、其方儀、山田主膳相果候以後家督豐之助を蔑ニいたし、苗字を山田と名乘り、其身主人之樣ニ仕なし、其上主人存生之內ゟ傍輩女りかと密通之上、致妻、出生之娘を山田直次郎と名付ケ、豐之助弟ニ仕、親類書ニ書載差出候、其後出生之次男を直次郎と付ケ置、剩豐之助儀、万一之儀有之節、跡式相續爲致候積リニ相巧候段、重々不屆ニ付、獄門ニ被行候旨被仰渡御徒目付室庄左衛門幷御小人目付、此方三好新助、土佐守殿方都筑重左衛門、牢屋敷江罷越、死罪申付首は年寄同心ニ相渡シ、品川江遣し獄門ニ爲懸候首は當番同心永澤彌七討申候、

〔憲教類典 四ノ二十一 御仕置〕明和四丁亥年八月廿一日

永澤町安兵衛店浪人山縣大貳方ニ居候、京都正親町三條中將家來之由申立候者、

藤井右門　亥四拾歳

其方儀、浪人山縣大貳多能之儀を、本町三町目町醫師宮澤準曹、神田小柳町三丁目、浪人桃井久馬江致吹聽候得共、申消シ候趣ニ付、大貳儀甲州之御城御要害等江引當テ、兵學致論談、道理相分リ候よし之儀相語仕候、且又四年以前熒惑星天之心宿江掛リ候よし、右ハ古書之通リ、兵亂之萌シニ候處、其後上州邊百姓騷立、少しハ其驗し有之、其外にても同樣之沙汰之よし取扱申聞候上、何方ニ兵亂之萌可有之哉難計由申、甲州ハ御要害宜敷候得共、武田勝頼破られ候節之通リニ攻候はゞ、甲州之御城落可申よし、都而火矢之儀ハ、風上より射懸ケ候ニ付、南風ニ候得バ品川邊より射懸ケ宜候由、或ハ甲府之繪圖ニ引當テ軍立論じ候はゞ可相分旨之儀共、當時之地利地方江引當雜談仕、江戸之御城西之方御手薄之よしニ付、譬バ其方を攻候ば東之かた御要害堅固成場所より攻可申事之由申之候、勿論其方儀、反逆等之儀ハ無之事に候得共、一體大貳を致信仰、兵學論談又ハ合戰之致かたを申募リ候より、致合戰者之所存ニ相成リ、自前と前書之通上も無之恐レ多き義を致雜談候段、不敬之儀不屆至極ニ付、獄門申付候、

八月廿一日

町奉行
小田切土佐守懸

〔撰述格例初篇ニノ九十二〕寛政五丑年十一月

戸田采女正殿御差圖

一新兩替町六右衞門似役井盜致候一件

右之もの儀致盜候依科、先達而敲御仕置に相成候後、又候惡心出、在所江出立致候途中、足痛歩行或兼、駕籠屋候得共高直に候迚、町人之身分にて致帶刀、其上重御役人之家來にて關六右衞門と申隱密役之旨偽、東海道筋宿々之問屋場にて駕籠相雇、剩伊勢參宮致候、若年之者共を欺、道連に相成、路銀を預リ、且腹懸之内に縫入置候金子、或者胴卷之内之金子等可盜取と、川越致候節、衣類

を爲脫又者濡候をほし遣透を見合盜取候分共、都合壹兩三步と錢貳貫貳百文之内、貳分壹貫百文は右之者共旅用幷調物代に遣拂、貳朱と七百文は差戻、相殘候金壹兩貳朱四百文は、店持候入用に遣捨候段、彼是巧成仕方重々不屆至極に付獄門、

右御仕置附

右巧成儀を申懸、度々金子等かたり取候もの、金高雜物之多少によらず獄門、重御役人之家來と偽かたり致候もの死罪と有之、兩樣之御定を見合、御仕置重き方へ引付獄門、

〔一話一言三十七〕長崎二人罪狀告示

長崎村船津浦源太郎子　伊之助　年二十一歳

此犯原有債錢、逼于窮苦、糾合福次郎、隨雇善次郎、丑之助、宇十等三名、爲作水手、卽時相約云、果得贓物、改日分配等語、于亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、不惟偸盜棕索磁器等許多各宗、甚至將赶來之唐人溺水〇水字原無、據下文補、身死、此等事端、全係此犯、造起意端、潛往偸盜、以至于此、罪惡難容、今奉部論、准此、押送各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月〇文化十三年、下同、

長崎村船津浦福次郎弟　善次郎　年三十二歳

此犯肯從伊之助及兄福次郎之言、約定改日得贓分配等語、仝丑之助宇十、一起受雇水手、于乙亥十二月十四日夜、潛往河下唐船、況恐有後患、將赶來之唐人投入海中等語、指點丑之助、以致唐人溺水身死、至于此狀、罪惡難容、今奉部論、准此、押送各街、卽刻梟首示衆、

丙子三月

〔幕府時代屆申渡抄錄〕仙石一件御仕置申渡〇天保六年

御請書

仙石道之助家老仙石左京、不屆之取計致し候一件、引合の者共一同被召出、再應御吟味之上、左之通被仰渡候、

一仙石左京儀、主人先代美濃守病氣差重、跡相續の男子無之、火急に出府の節、其砌纔十歳の小太郎を愛子の由にて召連、既に右故隱居播磨守、其外一家中在町迄の疑惑受候段、主家へ對し不願憚筋に有之、年寄生駒主計、勝手掛手餘り候由にて、相掛度々申聞を、同人壹人にて差支有、右掛り差免の儀相願候は格別、增人有之候ては區々可相成抔申答、其儘に承置ながら、差支候場に臨み、以後取締の由にて、年寄役取放の上、滅知申付有之候後、左京外三人にて勝手方取扱候段、隱居播磨守差圖に候共、幼年主人家政向、專取扱候身分、右次第不都合の儀にて、巧の存念に相聞、其上百姓共、小鳥作物を荒候趣を以、投餌相願候に付、置餌置、野合において投餌致し、又は悴繰女引移の次第等、超過の儀共、其外品々如何の取計有之候故、右主計外三人より、隱居播磨守へ上書致し、尋受候節、更に無跡形趣に相陳、却て宇野甚助へ相談の上、年寄共に申談、不束の上書致し候旨、播磨守へ申聞、滅高蟄居等爲申付、右體不屆有之候故、元同家來河野瀬兵衞儀、主人同姓へ左京等取計、品々申立候を讒訴の趣に申成し、御料所地内迄足輕差遣召捕、右に引合候旨を以、主計其外の者共咎の儀は、一旦事濟候を、病氣にて精神虛耗および候播磨守に陰聞爲致、再吟味において御吟味の上、左京申譯無之、恐入候旨申立候廉、多端に候處、讒訴の趣に吟味爲詰、其以前播磨守室常眞院等、瀨兵衞より承り傳、左京如何の取計と、播磨守より心添申遣候を、不行屆の由にて、佗の書付年寄杉原官兵衞より申談爲差出、右體事實反覆の儀を、却て瀨兵衞は死罪難逃由、抔物語、外年寄共より、右の趣を以了簡爲申立、瀨兵衞仕置相決、然而已ならず、主計外三人は同姓共より、瀨兵衞書付差出候に申合候儀無之旨申立候を倶々相巧み、讒訴致し候體に書綴、主人を欺、重役人樣の御内慮迄相伺、瀨兵衞は死罪、主計外二人切腹より一等輕き心得にて、剃髮の上、穢多町續明屋へ圍を敷入置候始末、主家へ對深望は無之由は申立候共、其身不忠の露顯をいとひ、主人爲筋等申立候ものを重科に陷入候に無紛、不屆至極に付、獄門被仰付候、

〔維新史料 鳴義聞見錄〕鵜飼幸吉

十二月十日 安政五年 父と倶に東行し、榊原式部大輔へ預けとなり、終に翌未八月二十七日夜、獄門の刑に處せられたり、年十九歲なり、

水戸殿家來 吉左衞門
悴 京都留主居役見習 鵜飼幸吉

其方儀、外夷御取扱の儀に付、前中納言殿思召の段、御認有之御直書等、度々同藩芳根伊豫之助より差越、右御直書は、烏丸下長者町上る町芳兵衞借家儒醫池内大學を以青蓮院宮、三條家へ差出候樣、前中納言殿御内命の由を以伊豫之助より申越、右は國家の御爲筋と相心得候共、御政事向に拘り重大の御儀に付、一概に宮堂上方へ書面差出候儀は對公儀御斟酌可有之筋に付、取計方も可有之處、其度々大學を以、右向々へ入内覽、殊ニ去午年正月頃、御養君の儀に付、世上區々の風聞有之、折柄、一橋刑部卿殿年長賢明の御方に付、御同人へ御治定に相成ならば、天下の御爲且水府の御爲にも可相成勘辨可致旨等猶伊豫之助より書狀を以申越、又は其比同藩側用人安島帶刀より刑部卿殿御養君に可被爲成候哉との儀、路傍の風聞も有之、難有旨等申越候も有之、右の御運びにも相成ならば、前中納言殿御滿足にも可被思召と存居候段は、一藩同意に付、密に御意内を推量、父吉左衞門申合、是又池内大學を以、青蓮院宮、三條家へ右書狀差出、又は前中納言殿御愼被仰付候に付、御愼解相成候樣、其外御同人御罪狀御所向より關東へ御尋有之度旨等、是又大學を以三條家へ致内願、或は松平薩摩守家來日下部伊三治同樣内願として致上京、同人儀は前

中納言殿御内命を受、御所向手入致候事の由申聞候儀も有之、一同彌決心、猶伊三治申合、頻に周旋いたし候故、水戸殿へ重き勅諚御差出、吉左衛門へ御渡相成候次第に至り、殊に右勅諚、伊三次一同守護致出府候節、小瀬傳左衛門と變名相名乘罷下り、其上重き御品柄に付、着の上は直樣御館へ可差出處、小石川春日町旅人宿長左衛門方へ一旦着、追て安島帶刀宅へ密に推參、同人へ相渡候段、御品柄に對し不敬の至り、剩へ水戸殿に於て、勅定諸家へ御達は勿論、遵奉にも無之由を以、御所向より右御催促有之樣、又は綸旨御差下相成樣、周旋方之儀、伊三治より申越、或は紀伊殿用達世古恪太郎よりの書狀の趣も、先達て御差出有之、勅諚は僞書に有之抔申越、右書面を持ち、鷹司殿家來小林民部權大輔方へ罷越、綸旨御差下方の儀、頻りに相望候節、只管願意を可遂ため、世上の浮說等取交、重き御役人の身分等の儀不輕たとへを以、同人と品々論談いたし、至て恐多き事ども、民部權大輔へ申聞相願、剩右體不容易綸旨の儀相望むは、主命歟、自己の周旋に有之歟との旨、同人より尋請候節、主命に有之旨、取繕及答段、假令綸旨の儀は事を不遂共、不恐公儀致方、右始末不屆至極ニ付、獄門申付る、

未八月

外國人處刑

〔憲教類典二ノ二十二長崎〕日本國欽差使井上筑後守政重告諭大明國諸舟主狀

一頃年阿媽港蠻舶、託于商買來於長崎、竊張耶蘇道、勾引蚩々之民、我大君聰明英武、早察之、制禁嚴肅、而闔國畏服、若有信彼邪法者、發覺則罪夷三族、然彼船中、匿載號伴天連者來、誣民撩人、故去年降欽命、絕阿媽港、曰無再趣于本朝、若有重到、則破其舶、誅其人無噍類、今茲彼蠻賊、不順嚴旨、佯爲乞和者來款、大君震怒、遣使節到長崎、縛其徒七十人、悉皆梟首、燒其舶幷器財、沈于海、是汝曹之所親見也、自今以往守我法、賈船往來多交易、則彼此利也、○中略

寛永十七年仲秋日

犯罪地行刑

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣、出買、幷船荷物致押領候者御仕置之事、

寛保三年追加

一逢雜風打荷致、殘荷物を盜取候船頭と馴合、浦證文差出、配分取候名主、於其所獄門

〔公事方類例集〕御證文先觸寫○中略

一首桶　壹ツ

右者奥州信夫郡本内村迄、明十一日朝五ツ時御差立、御代官寺西藏太樣御手附渡邊領右衛門樣御差添、江戸御出立ニ付如是、

水野出羽守樣宿繼御證文御寫、御先觸綴合壹通箱ニ入、外ニ右渡邊領右衛門樣ゟ御先觸壹通、別箱ニ入被遣候間、則差越申候、先々無滯相觸、人馬急度令用意相待可被申候、以上、

子八月十一日　御傳馬役　馬込勘ヶ由印

從千住奥州桑折迄

問屋名主中○中略

男首壹ツ、桶ニ入、從江戸奥州信夫郡本内村迄、房川渡、中田關所無相違可被通候、同州伊達郡長倉村無宿和藏と申もの、御地にて不屆之儀有之、於江戸表死罪申付、右之首、本内村ニて獄門に掛候由、堀大和守殿斷付如此候、以上、

文政十一子年七月廿三日

堀大和守殿斷

男首手形壹枚

佐渡印
信濃印
日向印
主膳印
甲斐印

房川渡中田

人改中○中略

一札之事
牢屋敷にて差出
一獄門首壹ツ

右者奥州本内村ニおゐて獄門ニ罷成候付、右首私共江被成御渡慥請取、其所迄爲持罷越申候、依如件、

文政十一子年八月十一日

奥州長倉村無宿　和藏　子三十一歳
寺西藏太手代　横山勝五郎
渡邊領右衞門

〔公事方類例集〕無宿和藏所獄門被仰付晒相濟候御屆書

子八月（文政十一年）十八日ゟ同月廿日迄

一獄門首

右者奥州長倉村無宿和藏不屆之儀有之、江戸表にて死罪、奥州本内村ニおゐて獄門被仰付候間、斃馬捨場等見計、獄門ニ掛三日之内、晝夜貳三人宛穢多番申付、三日過候はゞ番人爲引取可申旨、先達而被仰渡、當八月十一日、宇屋敷にて首御渡有之候間、直ニ手附番人差添、彼地江差立、兼て本内村領主木下宮内少輔家來江爲掛合、同村地内、往還端芝間江場所取建置候付、當八月十八日ゟ同廿日迄三日晒相濟番人爲引取申候、且又右和藏幷無宿倉次御科之次第、當半田村地内江も捨札可建置旨、堀大和守殿ゟ御達有之、捨札案御渡御座候ニ付捨札爲建置申候、依之此段御屆申上候、以上、

子八月

長倉村無宿　和藏
寺西藏太印
異名日本左衞門無宿十左衞門事
濱島庄兵衞掛、
寺西藏太
濱島庄兵衞
二十九才

〔舊幕府時代屆申渡抄錄〕一延享四卯年三月十一日、堀田相模守殿御差圖德山五兵衞掛、

其方儀同類大勢申合、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、近江、伊勢、右八ヶ國にて、押込金銀多く強盜致し候段、重々不屆に付、町中引廻し之上、遠州於見付宿獄門、

其方儀、身持惡敷、親勘當を受無宿にて濱島庄兵衞弟分に成、同類申合、押込強盜致し、其上巧成繪符を拵、道中往來致し候段、重々不屆至極に付、町中引廻し之上、遠州於見付宿獄門、

〔的例黃紙之寫〕獄門

安永八亥十月主殿頭殿御下知

一常州浮島村百姓共、地頭申付致混雜候吟味一件之內、

猪子左大夫知行常州信太郡浮島村百姓平左衞門悴　喜兵衞

手限　桑原伊豫守掛り

此喜兵衞儀、御代官之節權威を以、村役人江可引渡諸書付帳面取上、深く取隱置、或ハ庄大夫年貢未進引負有之を見込、地頭江取立候由申僞、庄大夫ゟ金子三兩差出させ、不足之分ハ庄大夫所持之地所爲書入、弟源八方ニ而金十兩才覺いたし、是又地頭江ハ不差出橫取いたし、其後庄大夫江金子催促ニおよび、返濟不致故、右地所取放し、其上吟味筋有之地頭ゟ度々差紙を以呼出候得共、難澁ニおよび、剩地頭家來捕方ニ罷越候節手疵爲負、其身之惡事を可遁ため、盜賊押込候故、疵付候旨相違を申立奉行所江欠込訴いたし候段、旁不屆ニ付、所ニおゐて獄門可被仰付哉、

〔翁草四十六〕由井正雪事

一正雪座敷ニ立歸り、由井三左衞門、熊谷六郎左衞門、糟谷九郎左衞門、同吉兵衞、同清兵衞、同作右衞門、僧廓然、其外下人迄、車座に並て、最後の酒宴を始、其中にて、一通の書捨を認、是を硯の蓋に差置、扨某が介錯は廓然に賴む也、各には是を手本に跡より追付れよと、押肌脫、短刀を腹へ突立引廻し、聲をかくれば、廓然透さず是を口く、殘る者共、追々に自滅の音洩聞へて、すは搦捕れとて、四

方より踏込けれども戸口々々には跡付物の道具を積上げ其上千筋の繩を張たれば急に入事を不得刀を抜て切拂ひ〳〵して亂入る其間に徒黨の者共は心靜に自殺しけるが廓然は介錯に時移りけるや又は後れしにや敢なく搦とらる○中略

一駿府阿部川河原ニ於由井正雪同三左衞門熊谷六郎左衞門佐原十兵衞長山兵左衞門此兩人は五人の大將分の中なれば磔罪たるべきに梟首に被處は是も自殺しける歟粕野九郎右衞門同吉兵衞同作右衞門等梟首せらる

引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從二前々一之例

一人を殺盜いたし候者　引廻之上獄門

寛保二年極追加

一片輸者を殺候て所持之品を盜取候もの　引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕毒藥幷似セ藥種賣御仕置之事

寛保七年極

一毒藥賣候もの　引廻之上獄門

〔御定書百箇條〕似秤似升似朱墨拵候もの御仕置之事

寛保二年極

一似秤拵候もの　引廻之上獄門

但掛目違無之においては中追放

一同似升拵候もの　引廻之上獄門

但入目違無之においては中追放

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

寛保二年極

一地主を殺候家守　引廻之上獄門

寛保元年極

一主人之親類を殺候もの　引廻之上獄門

寛保元年極延享元年極

一舅伯父伯母兄姉を殺候もの　引廻之上獄門

寛保二年極

一支配を請候名主を殺候もの　引廻之上獄門

但可殺所存にて手疵爲負候もの死罪

〔梵舜日記〕慶長五年十月一日豐國越次今度謀叛衆三人石田治部少輔安國寺小西津守洛中之大路ニ趣於六條河原首刎三條橋ニ被梟了次大藏頭梟

〔武德大成記十八〕慶長五年十月朔日神君奧平美作守信昌ニ命ジテ石田治部少輔三成安國寺惠瓊長老小西攝津守行長ヲ車ニ乘セ一條ヨリ三條室町ニ至テ引渡シ四條河原ニ於テ悉ク其首ヲ斬リ三條河原ニ梟シ傍ニ札ヲ立テ各其姓名ヲ書ス且長束兄弟三人福原左馬助原隱岐守等ガ首ヲ斬ル

〔關原合戰誌記二十二〕內府公御上京幷大坂御和睦附逆徒等被囚事

其后福島池田井伊本多ニ命ジテ三人ヲ大坂中引渡シテ又京都へ被遣十月朔日車ニノセ紙旗ヲサヽセテ洛中ヲ引廻シ於六條河原各首ヲ被刎則獄門ノ木ニゾ被掛ケル

〔撰述格例初篇二ノ九十二〕寛政四子年六月

町奉行

戶田采女正殿御差圖

小田切土佐守縣

一田安小性當見新次郎中間六助所々御門之銅物盜取候一件

田安小性頭取見習當見新次郎中間　六助

同家來中小性　荒井金藏

同中間　與助

右之者共儀困窮ニ付與風惡心發り六助發言にて外兩人も致同意六助金藏申合田安御門外三ケ所御門幷御橋銅物其外武士方門銅物盜取候節者金藏儀人見致し罷在六助與助申合半藏御門銅物盜取候節與助儀人見致し罷在又は六助壹人にて牛込御門御橋銅物盜取右追々に盜取

候銅物、品々賣拂、代金錢、六助は壹歩と三百文、金藏は貳朱と三百文餘、與助は八百文配分致し、酒食雜用に遣候始末、御場所柄をも不恐致方、別而不屆至極に付、三人共、引廻し之上獄門、

右御仕置附

右寶暦九卯年十一月、土屋越前守伺之上、御仕置申付候、神田關口町吉左衞門店、大工七兵衞弟子勘四郎儀、同所永留町武右衞門店大工權右衞門弟子甚九郎申合、去々丑年四月十七日夜、御作事方定小屋にて、檜木五本、同木切七ッ、盜取候由候得ども、御作事方にては、檜木紛失之儀無之由に候上者、此もの甚九郎兩人共、親方之もの小普請方定小屋懸りに付、主人之難儀を察、兩人申合、御作事方定小屋にて盜候段被拵申聞候儀に可有之旨、數度嚴敷遂吟味候處、御作事小屋にて盜取候儀無相違旨申之、御場所柄をも不恐、不屆至極に付、町中引廻し之上、於淺草獄門申付候例に見合、右同樣三人共、引廻之上獄門、

〔一話一言三十五〕南市令罪案抄

文化六巳年

大岡久之丞御代官所攝州西成郡曾根崎村播磨屋次兵衞借家住吉屋もと代判　南豐事　永助　巳四十九歲

右之もの儀、兼て身分之世話致し遣候秀弘より、講釋之手續にも致し候樣差越候書面は、近來異國人渡來之異說を認有之、講釋等には致がたく候得共、珍說に付讀本に綴候はゞ、品に寄、俵屋五兵衞方にて貸本に可致旨申聞候迚、利欲に泥み、兼て承りおよび候風說、又は住所不知ものより借受、寫取候書面へ作意を加へ、秀弘より差越候書面之趣をも、實事と聞候樣增補致し、剩至て恐多儀、又は重き御役人之名前を顯し、別而右之內には無跡形儀を以、對公儀恐入候儀共、實事之樣書顯し、合卷拾冊に綴立、北海異談と表題を記、五兵衞へ賣渡、其上大坂町奉行吟味之節、右體讀本に綴候儀は押隱し、秀弘より差越候書本之儘、五兵衞へ賣渡候旨申僞候始末、不恐公儀仕方、不屆至極に付、引廻し之上獄門、

〔御仕置例類集一ノ二十九〕文政三辰年御渡

御勘定奉行石川主水正伺

一武州淸戸下宿當山修驗常福院女房まつ密通之上、夫逢殺害候を押隱し候一件、

大岡源右衞門御代官所武州多摩郡淸戸下宿當山修驗常福院女房　まつ

右之もの義、夫常福院法類之由ニ而罷越候道仙と致密通、同人儀、常福院を可及殺害由申聞候節は、差留同意不致候共、同人を道仙打殺候砌、右始末不押隱候而ハ俱々重キ御仕置難遁由道仙申含候迚、常福院頓死致し候趣ニ申僞、葬式等執行其後も尙道仙と密通致居候始末、不屆至極ニ付、引廻之上獄門、

此儀、吟味書之趣ニ而ハ、道仙と致密通居、同人義、甲州邊江可逃去旨度々申勸候得共、同意不致打過候內、竊ニ夫常福院を可及殺害由道仙申聞、驚入差留候處、相止候心底ニ相成、安心致居り候內、同人儀、棒を以、常福院を打殺候物音ニ而目覺、打驚致介抱候得共、卽時ニ息絕、右始末、他江洩候而は、俱々重キ御仕置難遁間、頓死之趣可申成と道仙申含候に隨、右之趣ニ申僞、死骸取片付候者ニ而、致密夫、實之夫を殺候女之御定ニ見合、品輕候間、猶先例相糺候處、寬政十午年評議ニ御下被成候堺奉行相伺候泉州磯上村年寄仁右衞門御仕置之儀評議之趣、追々申上候處、同人義、淨心女房けんと致密通候上、風聞有之、夫淨心憤候由及承、淨心夫婦、幷きんを呼寄、覺無之義を申掛候由申爭、且又けん淨心を殺候ニ、最初ゟ馴合候事とハ不相聞候得共、淨心首縊候由、けんゟ乍承、任賴內證ニ而取片付させ候始末、馴合ニも相當、不屆ニ付、獄門と御差圖相濟候例有之、密夫道仙ニ同意は不致候共、夫常福院を打殺候後も、猶道仙と致密通候ものニ付、爲見懲

ニも御座候間、御仕置附ニ、主水正申上候例をも見合、伺之通、引廻之上獄門、

朱書　評議之通濟

僧徒處刑

〔御仕置例類集三ノ十四〕天明八申年九月

牧野備後守殿御差圖

一武州品川宿ニ而流言いたし候無宿知龍一件

御勘定奉行　根岸肥前守掛

伊奈攝津守支配所武州橘樹郡市場村眞言宗金剛寺　圓淨

右之もの儀、二子塚村寶生寺住職之節、同村元吉女房と、くと密通いたし候上、と、くを〆殺、椽之下之穴江隱し置、右風聞有之候故、欠落いたし、右始末は押隱し、金剛寺ニ住職いたし罷在候始末、重重不届至極ニ付、引廻之上獄門、

右御仕置附

右御定書ニ、密夫之僧、寺持所化僧之無差別、獄門、同宿體之僧、人を殺、或疵付候科、俗人ニ替リ無之、但寺持ハ一等重く可相伺旨有之、右兩樣之御定を見合、引廻之上獄門、

婦人處刑

〔的例黃紙之寫〕獄門

手限　太田播磨守掛

安永六酉七月佐渡守殿御下知

一酒井左衞門尉御預所役人申聞候、羽州木川村七左衞門女房かねを、同國門田村嘉兵衞女房きん及殺害候、吟味一件、

酒井左衞門尉御預所羽州田川郡門田村百姓嘉兵衞女房　きん

此きん儀、盜可致と七左衞門方江罷越、同人女房江口論仕懸ケ、鎌ニ而切付、倒候を〆殺候段、不届至極ニ付、引廻之上獄門可申付哉、

但懷妊ニ而罷在候間、出產後御仕置申渡候樣可仕候哉、

右御仕置附

右盜可致と存罷越、人を殺候ものニ御座候、人を殺盜致候もの引廻之上獄門之御定ニ准じ、引廻之上獄門と御仕置付仕候、然ル處きん者懷妊九月ニ而、最早人體ニ相成候間、右懷妊之內、御仕置申付候而ハ、助命可仕、其子迄助命不仕候間、出產後御仕置可申渡哉と申上候、

磔方法

磔　倒磔　牛割　水磔〔併入〕

磔ハ、德川氏ノ時ニハ、大抵淺草小塚原ト、品川鈴ケ森トニ於テ之ヲ行ヒ、又犯罪地ニ於テモ之ヲ行フコトアリ、其法ハ、罪人刑場ニ至レバ、非人數人ニテ馬上ヨリ下シ、直ニ罪木ノ上ニ仰臥セシメテ、手足ヲ結ヒ付ケ、罪人ノ衣服ヲ左右ノ脇ヨリ腰間ニ至ルマデ裂キ破リテ、之ヲ左右ヨリ胸間ニ卷キテ、イボ結ビニ爲スコト三ケ所、胴繩、襷繩ヲ掛ケテ罪木ニ縛シ、手傳非人數人ニテ罪木ヲ起シテ地上ニ建ツ、撿使乃チ同心ニ命ジテ罪人ノ名籍ヲ撿査シ、彈左衞門ノ手代ニ指揮ス、彈左衞門卽チ突手非人ニ指揮スレバ、非人數人、槍ヲ執リテ左右ニ分レ、其中ノ一人大ニ叫ビ、槍鉾ヲ罪人ノ面前ニ突キ出ス、之ヲ見セ槍ト云フ、其槍ヲ引キ了テ右側ノ一人、罪人ノ脇腹ヨリ肩ヲ貫キ、其鋒ノ出ヅルコト尺餘ニ及ビ、其槍ヲ捻リテ引拔キ、其後ハ左右ヨリ代ル代ル突キテ、二十度ヨリ三十度ニ至リ、然ル後ニ止槍トテ、左右ヨリ刺スト云フ、此刑ニモ、其罪ノ重キハ、晒幷ニ鋸挽及ビ引廻等ノ屬刑アリ、

倒磔、牛割等ハ中編ニ言ヘルト大差ナシ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一磔

於淺草品川に磔に申付、在方ハ惡事いたし候所江差遣候義も有之、尤科書之捨札建之、三日之內、非人番附置、

但引廻し、又ハ科により不及引廻に、欠所右同斷、○田畑、家屋敷、家財共欠所、

〔刑罪書〕磔御仕置仕法

一御仕置ニ相成候囚人、場所江引來候得者、場所之內江引込、下働非人人足六人ニて、馬より下シ、

磔制度

罪木之上江乘せ置、足首を横木江結付、其上兩人ヅヽ、左右江廻り、高腕をも腰木江結付候、着類ヲ左之之脇之下之所ヲ、腰之程迄切破り、胸板之所江、左右より卷き、三所程繩にていぼ結ニ仕、其上たすき繩を懸、胴繩と申、腰之所ニて繩二重にて、聢と結付候上ニて、手傳人足、共ニ拾人餘ニて罪木を起し、罪木之根ヲ、穴之內江三尺餘埋込み、土にて隨分と堅メ候上ニて、御撿使樣江御伺申上、下働非人、鑓を持、左右へ分れ候內、壹人囚人之面より貳尺程向之方江見せ鎗と申候て、聲を掛、空鑓ニ突出し候と、殘り壹人脇腹より肩先江、鑓穗先壹尺余突出し、一ツ捻り候上、鑓を引拔、其後は左右より代ル〳〵突申候、鑓數は大數三拾筋程突申候上にて、御撿使樣江、御伺申上、御下知有之候上、囚人之咽喉肮ヲ、左右より止メ鑓仕候儀ニ御座候、

〔享保由緒書上〕長吏彈左衞門由緒書

覺

一御仕置者御役は、磔、火罪、獄門、鋸挽、文字彫、耳鼻割、切支丹釣し問等に御座候、六拾五年以前、石谷將監樣、神尾備前守樣御代、武州鴻巢村江磔三人被遣候ニ付、御評定所ニ而被仰付候、御奉書被下置候御撿使共、私先祖江被爲仰付候間、御傳馬申請、長道具爲持相勤申候、此外在々支配之內、代々相廻り改候節も、長道具爲持相廻り申候、

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

從前々之例

延享元年極

一主人親、重き惡事有之由僞を申懸、訴人に出候もの、　磔

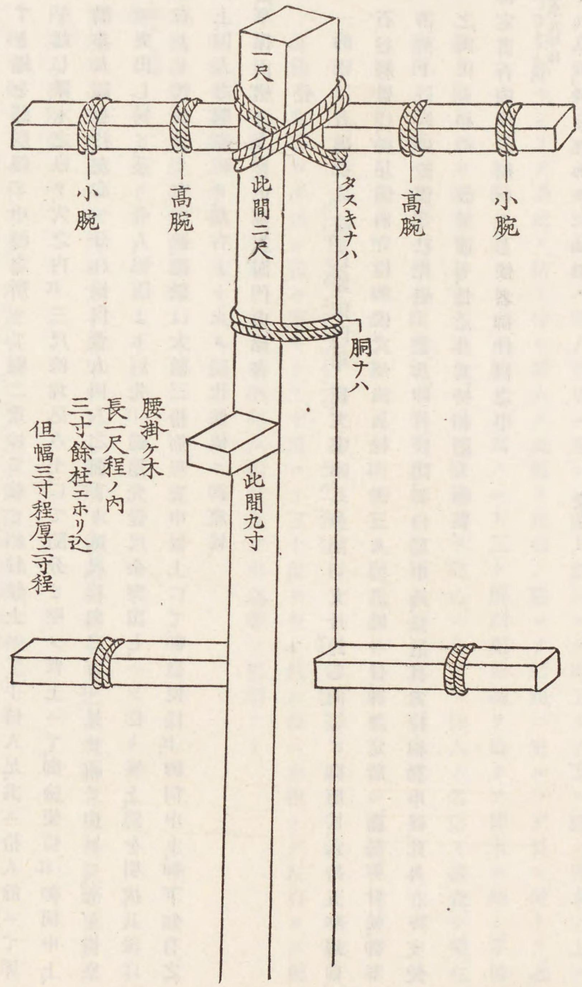
〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例

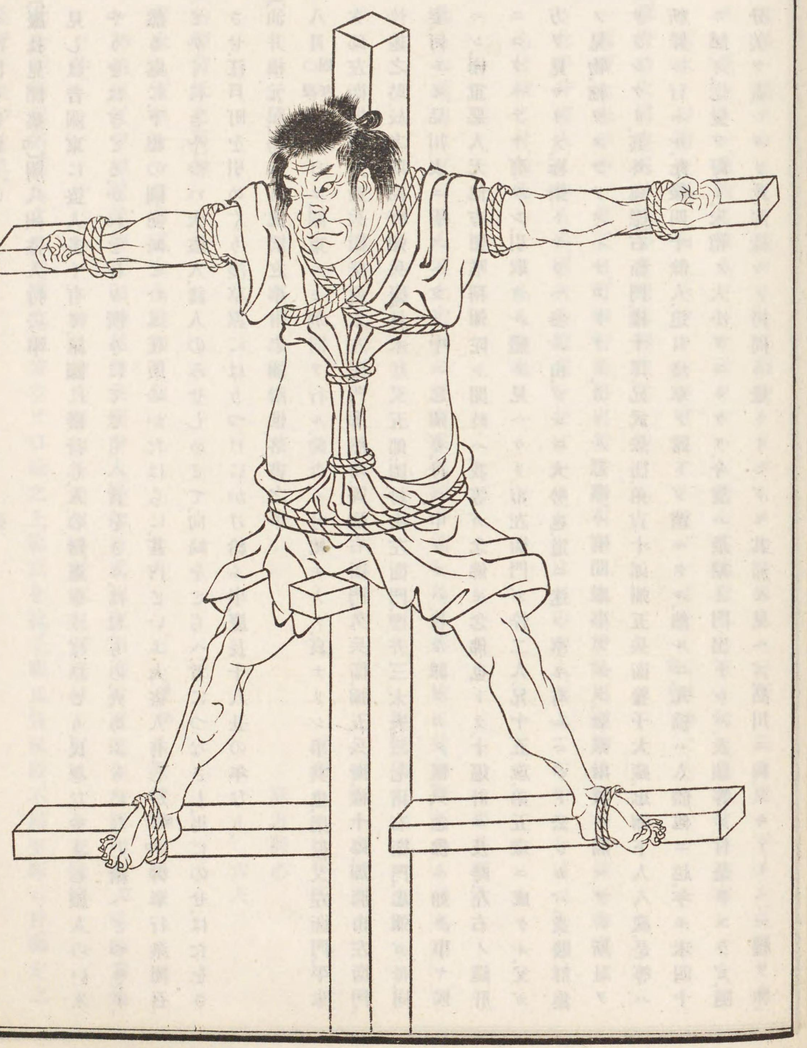
一親殺　引廻之上　磔

一同爲手負候者幷打擲いたし候者　磔

〔刑罪大秘録〕磔柱圖


一尺
小腕
高腕
此間二尺
タスキナハ
高腕
小腕
胴ナハ
腰掛ケ木
長一尺程ノ内
三寸餘柱エホリ込
但幅三寸程厚二寸程
此間九寸

磔圖



磔例

（從二前々一之例）

一師匠を殺候もの

〔慶長見聞集七〕關八州盜人狩の事

見しは昔關東に盜人多く有て、諸國に横行し、人の財産をうばひとり、民をなやまし、旅人のいきやうをはぎとる、かれを在々所々にてとらへ、首をきり、はたもの、火あぶりになし給へどつきず、然る處に、下總の國向崎といふ在所のかたはらに、甚内といふ大盜人有しが、〇中略御奉行衆聞召、とかくにきやつ一大盜人、諸人のみせしめとて、向崎をとらへ首につなさし、馬にのせ、はたをささせ、江戸町を引めぐり、淺草原にはりつけにかけ給ふ事、慶長十八丑の年なり、

〔油井根元記〕鈴森御成罰之事附忠彌辭世落書之事

八月〇慶安四年十日ニ關東ニモ刑罰ヲ行ル、鈴森ハ寸地モナク、哀ナリシ事共也、柴原又左衞門、平味次郎左衞門、櫻井彦兵衞、柴原太左衞門、廓然坊、岡彌右衞門、久兵衞、彌五兵衞、權十郎、加藤市左衞門、悴龜之助、辰之助、岡野彌兵衞、材木屋又五郎、岡村次左衞門、櫻井三太夫、三七猪右衞門、忠彌ガ母、同妻、何レモ品川表ニ引スヘタリ、中ニ忠彌妻、母ニ申ケルハ、皆々罪フカク候、只念佛ニ如ク事ヤ候ハン、極重惡人无他方便唯稱彌陀ト聞時ハ、我等ガ念佛モ念佛也トテ、十遍計ニ及時、左右ノ鑓肝ニコタヘテヤ有ケン、引取タル體ノ見ヘケリ、市左衞門ガ悴二人、兄十五歳、弟五歳ニ成ケル、父ガ方ヲ見ヤリテ、極樂トヤラヘ參ル由、ツレモ大勢也、道ニ迷フ事モ有ルマジト云シカバ、貴賤群集ノ見物、袖ヲヌラサヌハナカリケリ、カヽル惡事ハ有間敷事ナガラ、金銀財寶ニ闇マサレ斯恥ヲサラシケリ、其外與惣右衞門、權十郎、兄武兵衞、弟吉十郎、彌五兵衞養子大藏、忠彌下人八藏、是等ハ斬罪ニ行ハル、此後四十餘人、追日淺草ノ露トゾ消ニケル、然ルニ、丸橋ハ人體他ニ越、年モ未四十ニ越ズ、摠髪ヲ好ミ、朱鞘ノ大小ヲスキケリ、今度ハ最期ノ門出ナレバ、衣類等ニ付是ヲエラビ、隨分美ヲ盡シタリ、此間樣々ノ拷問ニ逢トイヘドモ其痛モ見ヘズ、品川ニ向ツキ〳〵ヘ一禮ヲ伸、其後ハ物ヲモイワデ居タリシガ、辭世トヲボシクシテ、雲水ノ行衞ト云言葉ノ下ヨリ、血煙ヲ立テヽ見ヘケル、見物ノ諸人、アハヤ云ツルハト云テ、其後雲水ノ下ノ句ヲ、色々付テ流布シケリ、

雲水ノ行衞モ西ノ山ナレバタノム甲斐アル道シルベセヨ〇又見ニ翁草一

〔幕府時代屆申渡抄錄〕平井權八御仕置一件

一延寶七未年十一月三日町奉行島田出雲守掛引廻し之上、於品川磔御仕置相成候科書寫、

此平井權八と申もの、宿次の證文をたばかり、おいはぎの本人、其上てぢやうをはづし、かけおち仕候に付、如此おこなふもの也、

此もの義、追はぎの本人、其上宿次の證文謀判、剩手鎖を外、欠落仕候に付、如斯行ふもの也、

平井權八

檢使與力

安藤小右衞門

備田作兵衞

双方同心

六人

〔的例黃紙之寫〕磔

手限　桑原伊豫守掛り

安永八亥年十一月右京大夫殿御下知

一加納遠江守相渡候、御徒頭神尾伊兵衞申上候、知行武州東別府村百姓金左衞門、親江手疵爲負

一件、

神尾伊兵衞知行武州幡羅郡東別府村　百姓　金左衞門

此金左衞門儀、酒狂之由者難立、親芳空と口論之上、脇差を拔、手疵爲負候段、不屆至極ニ付、御定之通磔可被仰付哉、

婦人處刑

〔御定書例書〕懷胎女礫に不被行事

寛保二戌年十二月御仕置の例

此なつ儀前方同國中土狩村伴七方勤居候節、伴七悴七郎兵衞と密通の上、懷胎いたし候處、其後暇被出候以後懷胎の儀、七郎兵衞可申聞と存詰、伴七方へ參同人甥仁平次へ右の趣咄候得共、壹人相果候はゞ犬死に候間、七郎兵衞を一太刀恨、相果候樣、仁平次申教に任せ、七郎兵衞へ疵付候儀、元主人の儀に御座候處、重々不屆に付、引廻の上、其所において礫に可申付哉と相伺、御差圖

重罪の者に候得共懷胎の事に候間、其所において獄門、

寛政二戌年四月五日三奉行へ の御書付

懷胎の女、死罪御仕置申付候儀、只今迄の例區々に候、死刑に相成候ものゝ子にても、依父母の科に、死刑には不及候、懷胎の女を殺候ては、胎内の子科なくして命を絕に當り候間、以來出產後、死罪に可被申付候、

右之通被仰出、出產後死刑に申付候上は、礫に當候女も、出產後本罪礫たるべき事、

是は寛政八辰年正月伺の上、同四月廿九日伺の通御差圖相濟認入、

〔御仕置例類集一ノ一〕文政元寅年御渡

町奉行永田備後守伺

一緣組願無之御家人之妻、御仕置引廻之儀ニ付評議、

當月九日御渡被成候、永田備後守相伺候、西丸切手御門番同心加嶋平吉變死いたし候一件之內、右平吉妻之由申立候、ゑん儀、御家人之妻と心得候ものの之儀ニ付引廻之儀、評議仕可申上旨被仰聞候、

駿州竹原村七右衞門妹　なつ

此儀、ゑんは勿論加嶋平吉親類共も、一同ゑんヲ平吉妻と心得罷在、平吉ゟ緣組願は不致候得共、事實は妻に付、右體之もの引廻し可附程之惡事いたし候先例相糺候處、相當之例相見不申、享和元酉年評議に御下ゲ被成候、根岸肥前守町奉行勤役之節相伺候、御數寄屋坊主齋藤良安儀、養父を及殺害候ものニ候處、御家人之故を以斬罪と相伺、一座評議一決不仕、引廻し之上礫、御家人之故を以不及引廻し礫と、兩端に評議之趣申上、礫と御差圖有之候例に見合候得ば、今般之ゑんも不及引廻段勿論之儀ニ御座候得共、良安は全之御家人ニ有之、ゑんは平吉と之間柄夫婦之事情に相當り、夫を殺候、不屆之趣意は難遁候得ば、名目ニおゐて妻とは難唱儀ニ付、御家人御仕置之例ニ不拘、永田備後守相伺候儀ニて、寛政八辰年評議に御下ゲ被成候、小田切土佐守町奉行勤役之節相伺候、百人組渡邊平十郎組同心竹內七右衞門甥にて、出奔いたし候竹內政右衞門儀、伯父七右衞門方ニ罷在、酒を好み困窮に相成、風と欲心差發、錫ニ而贋南鐐銀、追々七拾片程拵、所々商人家ニ而夜分込合候紛、贋銀を以調物いたし、釣錢共に凡金八兩程請取、雜用に遣捨、其上致出奔候段、不屆至極ニ付、獄門と相伺、評議之上、伯父竹內七右衞門厄介に成罷在候迄ニ而、浪人之身分ニ付、贋金銀拵候もの御定之通、引廻し之上礫と申上、其通相濟候例ニ有之、ゑん儀、緣組願無之ものに候上は、厄介人も同樣之身分に可有之哉、全く御家人同樣に相成候も不容易儀ニ付、再應勘辨評議仕候處、罪狀と違ひ、身分之差別は專緣組願有無ニ可拘とは乍申平吉を殺候科、夫を殺し候ニ相當り候ニ付而は、妻之唱無之ものニ候迚、引廻附候茂如何ニ付、前書良安ニ見合、不及引廻方可然哉ニ奉存候、

寅十二月〇中略

卯五月

朱書　評議之通濟

犯罪地行刑

〔御定書百箇條〕關所を除、山越致候者幷關所を忍通候もの御仕置之事、

（從二前々一之例一關所難レ通類、山越等致候者、於二其所一磔

但男に被レ誘引山越致候女は奴

同一同致二案内一候者　於二其所一磔

〔御仕置裁許帳 九〕金銀錢之爲レ似仕者之類

万治元年戊閏十二月廿四日

五郎左衞門　是ハ水戸御領分青柳村之者

貳人　權三　郎　是ハ右之五郎左衞門忰

右之者似セ錢仕候同類之由訴人有之旨、中納言殿ゟ捕來ルニ付籠舍、

右兩人之者、（五郎左衞門儀ハ、亥七月廿五日所レ江遣レ磔、權三郎儀ハ、亥十月朔日堀丹後守方ゟ渡リ死罪、

〔新張紙留〕書面長井五右衞門申上候趣寛政元酉年九月被仰渡候通、都而五右衞門方ニ而取計、御代官手代ハ、牢屋敷江罷出、囚人請取、持送人足幷於二場所一掛候、罪木番小屋ハ、御代官ニ而取計候樣被仰渡、奉承知候、

曾我豐後守

申十月六日

長井五右衞門

武州江古田村孫右衞門作地内ニ罷在候非人勝五郎、御代官江相渡候儀申上候書付、

朱書　此一件、文政七申閏八月、江古田村評議留ニ委しく有之、

武州多摩郡江古田村　百姓孫右衞門作地内ニ罷在候非人小屋頭　勝五郎

代々木非人頭久兵衞手下

右之もの養祖母を〆殺、入口際江持出着居候衣類之裾を火鉢之中江入、火移候樣入置、燒死之體ニいたし成、貯置候金錢取出候ニ付引廻之上於二其所一磔可二申付一旨、御下知御座候間、町奉行江相渡、右之方ゟ支配御代官中村八大夫江相渡、御仕置申付候間、御勘定奉行江被仰渡御座候樣仕度、此段申上候、以上、

申十月

武州江古田村非人小屋頭勝五郎、於二在方一磔、御仕置之節、檢使之儀ニ付申上候書付、

書面伺之通、於二在方一御仕置申付候節、檢使之儀掛長井五右衞門方ニ而相心得取計候樣可レ及二挨拶一旨、被仰渡、奉承知候、

曾我豐後守

申十月十一日

長井五右衞門

當月六日、承付候樣被仰渡、御渡被成候、長井五右衞門申上候、武州江古田村非人小屋頭勝五郎儀、於二在方一磔、御仕置之儀、牢屋敷ニ而町奉行組之もの江引渡、同人ゟ御代官手代江引渡候由ニ付、五右衞門方ニ而ハ、爲見届右場所江組同心兩人差遣候心得之由、且文化六巳年、根岸肥前守町奉行勤役之節、大坂北堀江御池通二丁目久兵衞外壹人於二在方一御仕置申付候節之振合、當井伊賀守江五右衞門ゟ問合候處、私共先役江引渡候ニ付、檢使ハ不レ差遣、御仕置爲見届組之もの差遣候段、伊賀守ゟ及二挨拶一候付、右文化六巳年之取計心得方等致二承知一、度段、五右衞門ゟ懸合申越候、依之取調候處、文化六巳年之儀ハ、肥前守申上候書付御下ケ有之、其節之支配御代官伊奈助右衞門方江引渡、檢使等之儀も、同人方ニテ取計候趣ニ御座候得共、右ハ町奉行掛之儀ニ而、火附盜賊改掛之儀ハ、寛政元酉年、長谷川平藏火附盜賊改勤役之節、無宿眞刀德次郎義、武州於二大宮宿一御仕置ニ相成候後、先役共ゟ伺濟之趣を以、今般五右衞門申上候書面ニも、同樣承付仕申立候通、手代牢屋敷江差出、囚人受取、持送人足幷於二場所一掛候、罪木番小屋之儀ハ、御代官ニ而取計、尤五右衞門組同心兩人爲見届場所江差遣候旨申聞候間、檢使之儀も、同人方ニ被二取計一可レ然筋ニ可レ有二御座一、御代官手

代ニ而、撿使相勤候樣ニ而ハ、一體之伺濟ニも振候哉ニ付、旁撿使之儀、五右衞門方ニ而相心得可取計旨可及挨拶と奉存候、依之此段申上候、

申十月

〔科條類典下五〕親を可殺所存ニて致打擲候者

元文二年巳十一月、御仕置之儀、御預所牧野民部少輔方江申渡、

一越後國古志郡種苧原村半左衞門、父兄を致打擲候、御仕置一件、

半左衞門儀、兼而不宜者に付、致勘當度旨、親半兵衞、庄屋と同道にて、御領地役所江願書出候旨、半左衞門承之、親宅江踏込及狼藉、剩致勘當候譯承屆、親半兵衞を打殺、自分も相果可申旨申候由、半兵衞を致打擲に付、兄德左衞門飛掛リ組付候得共、强勢成者にて、父兄共に組伏候處、德左衞門忰手太郎、荷繩を半左衞門首江懸、引起候に付、德左衞門、庄屋方江參可知旨、手太郎に申付爲知候故、早速庄屋組頭始、村中之者翔集り捕置、御預地役所江訴之、兼て不行跡至極之者にて、庄屋組頭申聞を少も不用、他所之者に對し、度々理不盡之仕形有之、役人も及迷惑旨、吟味之上申上、御仕置左之通申付、

於其所磔　越後國古志郡種苧原村半兵衞次男　半左衞門

〔記事條例十一〕磔御仕置者之儀ニ付取計方伺書

川崎平右衞門

松平右近將監殿掛、無宿加兵衞事、五兵衞、越後國高田寺町妙照寺祖海儀、上州碓氷、越後國關川、兩御關所ヲ除、女を連致山越候ニ付、此度碓氷御關所於近邊磔被仰付候間、五兵衞は鹽詰之死骸、祖海一同私方江受取、右御仕置可申付旨被仰渡、右近將監殿ゟも心得方御達御座候ニ付、取計方之儀、左ニ奉伺候、

死後鹽詰之上磔

一御仕置場所之儀は、松平右近將監殿ゟ、領主板倉百助家來案內可致旨被仰渡候由、御達御座候間、爲撿使差遣候手代二人之內、壹人は二三日以前差立遣、領主役人江及掛合、場所見分、仕置幷御仕置當日之手都合、夫々爲取計、殘壹人は、囚人受取直に出立、道中附添罷越、御仕置行ひ候節は、兩人立合撿使仕、相濟候はゞ卽日場所爲引拂、右御仕置相濟候御屆之儀は、歸着之上差出候樣可仕候哉、

書面伺之通可被相心得候

〔御定書百箇條〕重科人死骸鹽詰之事

享保二年極
一主殺
同
一親殺
寬保二年極
一關所破
同
一重謀計
享保六年極
右之分、死骸鹽詰之上御仕置、此外ハ不及鹽詰ニ事、

〔記事條例十一〕磔御仕置被仰付候もの、御牢屋敷にて病死いたし、死骸鹽詰に相成、同日溜江御預に相成、御仕置ニ出候始末就御尋、奉申上候、

一前日歸牢被仰付、引廻し有之候者は、存命之通リ當にて、瓶之儘御仕置場所江持送り、存命之通取扱申候、尤鎗數拾本程突申候、

一日本橋より三日晒之間、穴晒被仰付候節は、瓶之儘、右穴江入、首計爲出晒置、三日目歸牢被仰付、同日御仕置通手當いたし、罪木江手足を結付、左右より鎗數拾本程突、御撿使樣江御伺之上、止メ指、右死體二夜三日晒置、御掛御番所樣江御伺之上、番人共引拂申候、以上、

但陸晒之節は、瓶より首を爲出差置申候、

右之趣就御尋乍恐以書付奉申上候以上、

丑九月十三日　　淺草　彈左衛門代　文八印

〔的例黃紙之寫〕磔

安永五申年五月右京大夫殿御下知

一甲州眞木村枝郷間明野百姓文藏親休心を打殺其身も自滅仕候吟味一件、

久保平三郎御代官所甲州都留郡眞木村枝郷間明野

　　百姓　文藏

　　手限　太田播磨守掛リ

舌を喰自滅仕候

此文藏儀親休心を手杵ニ而打殺候段不屆至極ニ御座候處自滅仕候間御定之通死骸鹽詰之上、磔可申付哉、

〔公案比事三十七〕天明五巳年三月廿五日町奉行手限申渡　　曲淵甲斐守掛

牧野越中守殿御下知　　横山町壹丁目清兵衞店藤兵衞召仕　文藏

右之者儀主人妻きそ江執心ニ付不義申懸候得共有無之答も不致候間猶又翌日不義可申懸と、きそを呼懸候節もきそ二階より逃下り逃も得心不致樣子ニ付心外ニ相成其上右始末藤兵衞江可申聞體故左候ては身分難相立存きそを致殺害憤を晴逃去可申と庖丁を以きそ顏江貳ケ所疵付候段不屆至極ニ付存命ニ候得バ晒之上磔可申付處分病死ニ付鹽詰之死骸於淺草磔、

〔御仕置例類集二ノ二十九〕享和三亥年御渡

御勘定奉行松平兵庫頭伺

一甲州八澤村用左衞門繼母そめを及殺害候一件、

川崎平右衞門御代官所甲州都留郡八澤村　百姓　用左衞門

右之もの儀居宅臺所口より盜賊逃去候樣ニ相見候迚眞木と心得鉈を以打殺候ハ繼母そめニ而全亂心いたし候由申之候得共其後本心ニ而不揃之儀も無之上ハ亂心と之申分難立繼母を及殺害候段重々不屆至極ニ付鹽詰之死骸引廻之上磔、

此儀御定書ニ親殺引廻之上磔且亂心ニ而人を殺候ともケ條之內亂心ニ而人殺之事と有之可爲下手人歟然共亂心之證據慥ニ有之上被殺候もの之主人幷親類等下手人御免之願申ニおゐては遂詮議可相伺事但主殺親殺たりといふとも亂氣無紛におゐては死罪自滅いたし候はゞ死骸取捨ニ可申付事と有之此もの繼母そめ弟幷娘其外親類組合村役人等朱書ニ申上候趣ニ而ハ亂心いたし候儀ニも可有之哉之段申口符合いたし候次第ハ右但書ニ引當可然哉に候得共臺所口ゟ逃候ものを追駈村內新左衞門宅江逃入候を附入及打擲漸打臥候と覺候節同人母りよ親殺と申聲ニ而氣分慥ニ成候と吟味書ニ有之右之通始終之儀辨罷在勿論逃去候もの之儀ハ不相分そめハ其以前より新左衞門方江罷越居候處逃入候ものと心得一旦取昇そめを打殺候迄之違ニ而卽時ニ本心ニ成其以前不揃之儀も無之上ハ亂心と申ハ難申母と稱候ものを殺候ニ至り候而ハ差別有御座間敷いづれ重科人難遁ものニ御座候間親殺幷重科人死骸鹽詰之事と有之兩樣之御定ニ見合伺之通鹽詰之死骸引廻之上磔、

朱書
評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政三辰年御渡

町奉行榊原主計頭伺

一岡崎町忠兵衞店文藏召仕万藏主人之妹を及殺害候一件、

岡崎町忠兵衞店文藏召仕　万藏

右之もの儀當主人文藏妹ニ候とも親病死文藏代より被召仕候身分ニ而同人娘きんを及殺害此ものも自殺いたし得と子細ハ不相分候得共兼而きん江不義申懸候儀も有之同人を及殺害

候段重々不届至極ニ付鹽詰之死骸晒之上磔、
此儀きんを及殺害其身も自害致し候ゆへ、得と子細ハ難相分候得共、文藏幷いね吟味書之趣ニ而ハ、きん儀奥之二階ニ而召仕いねに灸治爲致居候處同人を文藏母ます呼候旨、此もの申僞表二階江遣し候跡ニ而、きんを殺害おゐ及び候始末素ゟ亂心之所業とハ相聞不申、主人を殺し、直ニ相果、子細不相分候ものニ候而も、亂心ニ無之分ハ死骸御仕置申付候段、度々之先例有之且きん儀、先文藏之娘ニ而當文藏之ため二ハ妹ニ有之候間、主殺之御定ゟ輕晒之上磔と榊原主計頭相伺候儀ニ御座候得共、得と勘辨評議仕候處、此ものハ、先文藏存生中、年季奉公ニ被抱、引續當文藏方ニ相勤居候ものにて、古主之趣意ニハ無之、きんハ全く主人之娘ニ付、寶暦四戌年之御書付ニ向後主人妻或ハ主人悴江爲手負候もの有之候ハヾ、主人江爲手負候もの御仕置之御定同樣可申付と有之候ニ准じ、今般之儀ハ、主殺之御定ニ引當鹽詰之死骸二日晒、一日引廻し鋸引之上磔、

朱書　評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政六未年御渡

松平伯耆守伺

一備中國矢掛村安兵衞人を殺銀子奪取候一件、

板倉越中守領分備中國小田郡矢掛村　百姓　安兵衞

右之もの儀同國矢掛村仁兵衞江被雇供いたし藝州廣島江罷越、立歸候途中、食物其外之手當不宜、其上竹原船宿大勢之中にて、面皮難立樣及惡口候を不快ニ存、同國七日市宿重助方江立寄右體仁兵衞手當不宜心外ニ付、同人を打殺、所持之銀子可奪取旨申聞候處、重助も仁兵衞江鑄懸錢滯有之、度々催促致し候得共不相拂、平日仁兵衞仕方不快由に而重助方ニ居合候無宿小太郎一同申合、重助宅を出立、同所河原ニ而仁兵衞追付、此もの頭取三人一同掛ニ而仁兵衞打倒候上、此もの小太郎兩人ニ而所持之手拭を以〆殺懷中之丁銀九枚奪取、配分いたし候始末不届至極ニ付、死骸鹽詰之上磔、

此儀松平伯耆守より先達而相談申聞候節、御仕置附にも申上候通、安兵衞儀は仁兵衞老年に付、旅中介抱旁被雇供致し罷越候ものに付、雇馬士船乘車引町駕籠舁抔とは譯違ひ、主從之筋に候得共、請狀等取極候にも無之候間、主殺之御定は難引當、鹽詰之死骸磔相當之ものに可有御座哉と見込、其通伯耆守より相伺候儀に候得共、猶又再應評議仕候處、前書之通事實おゐて主從之筋は難通、請狀等不取極迄之儀に候得共、主人に等敷仁兵衞を殺候ものに有之、古主を殺候ものより只輕とも難申候間、猶先例相糺候處、寬政七卯年小田切土佐守町奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候靈岸島長崎町貳丁目家主平七方に、月雇ひに差置候仁兵衞儀、被雇主平七妻ゆり幷平七弟子福松を殺害いたし候上、此ものも自害仕損じ候處、無間も相果候に付、子細は不相分候得共、兼而ゆり江不義申懸候儀も有之、主人同樣之平七妻ゆり幷福松を殺害おゐ及び候段、重々不届至極に付、鹽詰之死骸晒之上磔申付候例も有之候間、古主を殺候ものの御定幷右例に見合、鹽詰之死骸晒之上磔、

朱書　評議之通濟

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政九戌年御渡

火附盜賊改齋藤越中守伺

一遠州無宿清右衞門儀元主人宇八祖母ほのを〆殺、衣類反物金銀等奪取候一件、

遠州無宿　清右衞門

右之もの儀、奉公先欠落致し、其後非人甚藏と馴合、元主人宇八祖母ほの隱宅入口建寄有之戸を

明ヶ這入、金子等相尋候砌、ほの儀、目覺し候ニ付、此もの被見知居候間、可〆殺旨甚藏江、申聞候處、同意致し、着し居候蒲團を同人引退ヶ、胸ゟ腹江掛ヶ強ク踏、此ものハ咽を〆候得バ、ほの口より血出相果候ニ付、息不吹返樣、手元ニ有之紙を口江突込置、〆り無之押入之内ニ長持錠おろし有之、寐床脇に有之鍵ニ而、甚藏明ヶ、衣類反物金銀等奪取、右之内衣類金子配分取、衣類ハ着いたし、切損候ニ付取捨、金子ハ不殘遣ひ捨候段、重々不屆至極ニ付、晒之上磔、

此儀寶暦四戌年、向後主人之妻、或ハ主人之悴江爲手負候もの有之候はゞ、主人江爲手負候もの御仕置之御定同樣、晒之上磔可申付と有之御書付ニ見合、此ものハ古主之祖母を殺候ものニ付、古主を殺候もの之御仕置と差別ハ有之間敷候間、古主を殺候もの之御定ニ而、伺之通晒之上磔可申付處、病死いたし候間、死骸鹽詰ニいたし置候段、追而申上候ニ付、鹽詰之死骸、晒之上磔、

死後不磔

〔公案比事三十七〕安永七戌年七月

太田播磨守掛

一武州上谷本村平右衞門方ニてあばれ候、無宿清太郎一件、

松平右京大夫殿御下知　武州上谷本村平六元養子　無宿　清太郎

右之者儀、親平六病中、聢と看病も不致、醫師方に持參り候療治代金壹分、途中ニ而遣捨、欠落致候段、親之生死ニ不拘、所存不孝之至、既平六致病死、祖母井親類村役人相談之上、地頭江申立、舊離帳外ニ致、平右衞門を聟養子ニ貰、妹なよに娶合相續爲致候處、平右衞門方江踏込、押而相續可致旨不法ヲ申、佛具等投散、なよをも打擲致、あばれ候始末、重々不屆至極ニ付、引廻し之上、磔可申付處、致病死候ニ付、死骸磔ニ不及、例は相見不申候得共、下賤のもの相辨候ため、上谷本村江、科書捨札爲建可申哉と申上、其通御下知濟、

晒之上磔

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例

一主人に爲手負候もの　晒之上磔

寛保元年極

一古主を殺候もの　晒之上磔

〔御仕置例類集二ノ二十九〕文化三寅年御渡

日光奉行伺

一日光一坊觀德坊下人金次郎、主人之隱居江疵附、盜いたし候一件、

日光一坊

觀德坊召仕

金次郎

右之もの儀、主人隱居本秀を殺害致し候存念ニハ無之候とも、金子可盜取と存、不聲立樣、小刀を以同人襟元江突込候處、可起上といたし候を取押、左之耳際より口中江突込、齒莖を割、猶又耳之後江突立候處、氣絶いたし候樣子ニ付、蒲團を懸置、納戸江立入、長持之錠前を有合候釘拔を以捻切、鼻紙袋ニ入有之候、金貳拾七兩貳分盜取、右之内金四兩ハ拂方、其外酒食ニ遣捨、殘貳拾三兩、貳分ハ、幸七宅江隱し置候始末、重々不屆至極ニ付、晒之上磔、

此儀當主江疵爲負候ニハ無之候得ども、本秀儀、古主と申筋ニハ無之、全主人同樣之儀ニ付、主人江爲手負候もの、晒之上磔、盜ニ入、刃物ニ而人ニ疵付候もの、盜物持主江取返候とも獄門之御定をも見合、重キ方江附、伺之通晒之上磔、

朱書　評議之通濟

引廻之上磔

〔御定書百箇條〕捨子之儀ニ付御仕置之事

從前々之例

一金子を添、捨子を貰、其子を捨候もの、　引廻之上獄門

但切殺〻殺候におゐてハ引廻し之上磔、

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事　寛保元年極

一古主を殺候もの　晒之上磔

同　引廻之上磔○中略

一同爲手負候もの　引廻之上磔

從二前々一之例

一親殺

〔科條類典上三〕享保十年巳十月申渡　大岡越前守掛リ

右之もの當月廿三日、聖堂前堀際に、六拾歳餘之女倒居候故、近所辻番請負人方ゟ、御目付松波甚兵衛方江訴、水野壹岐守差圖にて右請負人共召連來ニ付、召出樣子相尋候處、右行倒ものハ、護國寺門前清兵衛店八兵衛養母いぬと申ものにて候處、養子八兵衛當月廿日晩召連參、御茶之水御堀江突落し候由申ニ付、いぬをば溜江遣し置、右八兵衛家主清兵衛幷八兵衛店請人、同町權左衛門地借リ金兵衛幷元大坂町長三郎召仕いぬ妹聟小兵衛呼出し、令吟味候處、八兵衛儀、右小兵衛方江參り、いぬ病死致し候由申ニ付、右三人之もの共江、八兵衛を十日切に尋出申候樣申付候處、見當候由ニ而、今日連來候ニ付、召出し令吟味候處、八兵衛申候者、其節いぬ儀、右小兵衛方江可參由申ニ付連參候迚、御堀端ニ而取外し落候由申候得共、仕形不屆ニ付、水野和泉守依差圖町中引廻し磔、

〔玉露叢五〕慶長二十年○元和元年閏六月廿九日、今晩古田織部正家來宗喜事、生磔ニシテ車ノ上ニ載セ、大道ヲ渡シ、其後久ク籠ニ入、是ハ今度大御所御出馬ニ於テハ、其夜島津ガ從者ト共ニ大坂へ一味シテ一揆ヲナシ、亦京中ヲ燒ベキ企ヲ致ス所ニ、去四月廿八日ノ御出馬延引有テ、五月五日ニ相定ル、其間ニ件ノ宗喜ガ企共露顯セシメ候テ、板倉伊賀守生捕ル數度拷問ニ及ビ白狀ニ付

テ右ノ通リト云々、

○

〔切支丹宗門來朝實記〕切支丹宗門ハ、永祿十一年より天正十三年迄、十八年の間繁昌しけるが、秀吉の天下と成り、終に此宗旨を破滅し給ふ、○略中其後寛永三年の比近江丹波などにて、六十六部のやうに出立て、鏡を見せ物をあたへなどして、此宗旨を勸め歩行もの有り、依之又此宗旨の者多く成けり、其比京都にて、板倉伊賀守勝重吟味を懸らるゝといへども、命を捨ておもひ入たる愚人共多し、然に關東より大久保相模守切支丹吟味役として上洛有、彼宗門の者共を悉く捕へ、俵に入れ繩にて結び、首計り出し、四條五條の河原に出し、改宗するものは助くる也と役人共申聞せよと申付らる、○略中其後改宗のものは御助被成、かやうにしても轉ばぬ者三人有、內一人は富田にて飾屋七兵衛、逆はりつけ、八右衛門同罪、○略中京都にて轉ばぬ者四人、內二人はりつけ、二人は火あぶり、泉州堺にて轉ばぬもの三人、內一人は磔、二人は半ざき、○略下

〔南蠻寺興廢記〕寛永三年、○略中大坂ニテコロバヌ者三人、內一人ハ飾屋七兵衛逆磔、百姓八右衛門同罪、青物屋總吉ハ水責ニテ死ス、京都ニテコロバヌ者三人、內二人ハ磔罪、一人ハ半割、此時宗門不殘斷絕ス、

〔南蠻寺興廢記〕兩破天連曰ク、汝達纔ニ七日眞言ヲ唱ルト雖ドモ、心既ニ改テ、天帝ヲ尊敬スルガ故ニ、其精誠今世ニテ天上ニ通達シテ、天帝ノ惠ヲ得タリ、○略中縱令今世ハ火水磔罪、半割車割ノ苦ヲ受ルトモ、ソレヲ以テ未來永劫ノ苦ニ替ヘ、今拜シ奉ル所ノ天上ニ至ラント思フベシ、

〔耶蘇天誅記下〕一寛永年中、吉利支丹宗門ノ男女ヲ國々ヨリ搦メ捕テ、江戸へ引來リ品川表鈴ケ森ノ浪打際へ、活ナガラ逆サマニ釣リ置テ、潮ノ滿來ル時ハ、首ラ頭ヲ波ニ浸シテ暫時息絕ヘ、又汐ノ干去ル時ハ、自ラ甦ルガゴトクス、是佛經ニ所謂救倒懸ニ均シ、

〔武門諸說拾遺〕寛永十七年、品川ニ於テ、商人其外諸浪人共、切支丹宗門ノ族七十餘人召トリ、品川沖ニテサカサマニツルシテ、水磔ニカケヽル、汐ノ滿ル時ハ首ヨリ下肩ヲ越シ、汐水ニヒタシ、息モツキ得ズ苦シミ、又汐引トキハ顔ハレテ人相替リ、此世ノ人トモ思ハレズ、八日間ニ死ニテケリ、

鋸挽

鋸挽ノ事ハ、既ニ中編ニ於テ之ヲ云ヘリ、徳川氏ニ至リテハ、先ヅ罪人ヲ引廻スコト一日ノ後、方三尺、深二尺五寸ノ箱ヲ作リ、之ヲ地中ニ埋ミ、罪人ヲ其中ニ納レ、箱ノ裏ナル杭ニ繋ギ、物ヲ其首ニ加ヘ、僅ニ其首ノミヲ露シテ、衆ニ示ス、而シテ罪人ノ兩肩ニ刀ニテ傷ケ、其血ヲ竹鋸ニ塗リテ之ヲ其側ニ置キ、若シ之ヲ挽カント望ム者アレバ、之ヲ聽ス、故ニ又之ヲ鋸挽晒トモ云フ、此ノ如クシテ晒スコト三日、而シテ後刑場ニ將キテ之ヲ磔セリ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

一鋸挽（従二前々一之例　享保六年極）

一日引廻、兩之肩に刀目を入、竹鋸に血を附、側に立置、二日晒、挽可レ申と申もの有レ之時ハ、爲二挽候一事（従二前々一之例）

但田畑家屋敷家財共欠所、

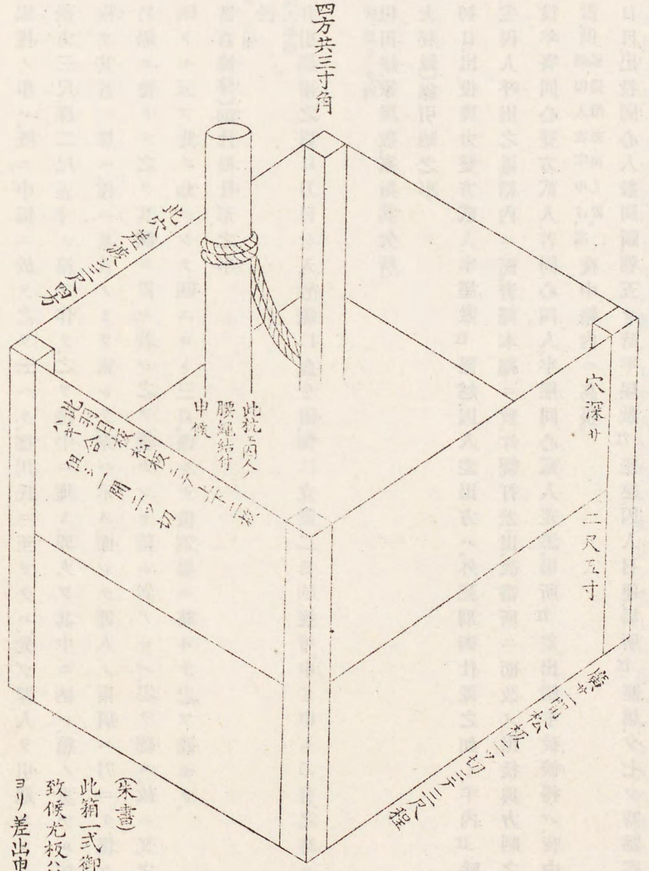
〔刑罪大秘錄〕鋸引晒之事

一晒初日出役與力雙方貳人、牢屋敷（江罷越、）囚人差出方ハ、外死刑御仕置之如く、牢内（江）呼込無レ之、平生囚人呼出之通、鞘内ニ而青繩本繩ニ致、片鋸打差出、改番所ニ而改メ、出役與力晒之儀申渡、出役年寄同心雙方貳人、若同心四人、牢屋同心貳人差添、場所（江）差出歸牢致候得バ、夜中手鎖懸ケ置、但晒四人在牢中は、高張提燈差出し置、夜中鞘内ニ高張、

一二日目出役同心人數同斷、朝五ツ時牢屋敷（江罷越、）囚人召連、場所（江罷越、）夕七ツ時歸牢、

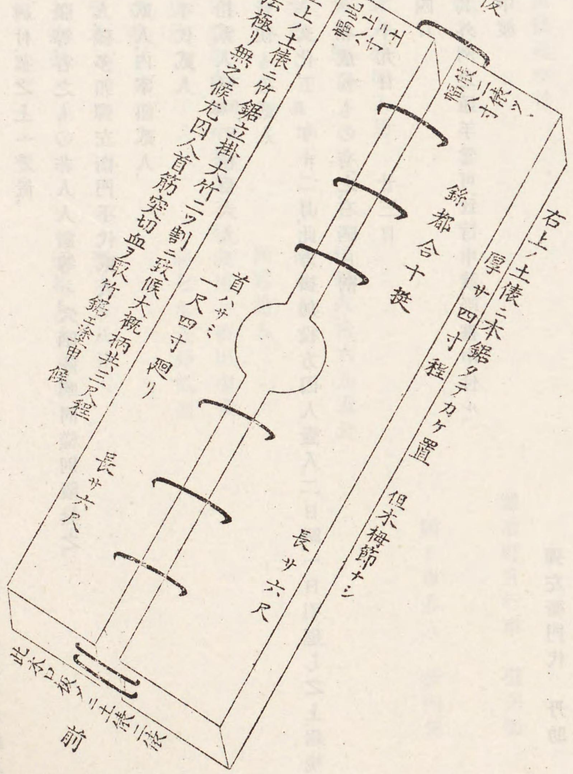
一三日目出役同斷、明六ツ時晒場（江）差出、四ツ時引返し、鞘内（江）入荒繩懸替候而、改番所（江）差出名前肩書歳付入日等鑰役相改、檢使與力晒之上、磔之儀申渡、夫より前ケ條引廻し、幷磔御仕置之、

〔刑罪書〕穴晒



（朱書）
此箱一式御役ニテ
致候尤板ハ材木町
ヨリ差出申候

（朱書）
穴晒ノ節竹鋸ニ相用候竹ハ京橋竹町ヨリ差出非人頭善七手下ノ者鋸ノ形ニ拵
囚人ノ脇エ建置申候仕來ニ御座候



通別儀無之、

一一通之晒ハ、囚人青縄本縄ニ懸ケ、持籠ニ乗セ候而、牢屋敷より晒場所江召連、右本縄之儘ニ手を免し、柱江縛付、莚之上ニ差置、

一小屋懸ケ縄張等、谷之もの非人人數等ハ、穴晒陸晒同様別儀無之、

一晒場内外番人、穢多頭彈左衞門手代貳人、

一谷之もの拾貳人、内宰領貳人、

一非人頭善七手代貳人

一非人人足四拾貳人、〇貳一本作五横目六人、

一四人を始末致候もの貳人

〔記事條例十一〕一文化五辰年十二月、此方掛加役方四人壹人、二日晒、一日引廻し之上、鋸挽之上、於淺草礫御仕置ニ相成候もの有之、右晒日割、

十八日　十九日　廿三日

十二月十四日

一番小屋取建、其外例之通手當可致旨申渡、受書申付ル、

但穴晒之旨申渡

一札串　壹本

是は御番所江差出候様

一首挾候莚料

一穴之内江入候拔

一三寸角

是は日本橋江差出候様申付

一莚料打候大錄

是は場所江差出候様申付

一捨札壹枚申付

〔刑罪書〕穴晒礫壹人分御入用

一晒番小屋（日本橋御入用）　壹ヶ所　代銀八拾六匁五分

一大鋸（同斷）　壹枚　同八匁

一莚料錄（同斷）　同貳拾匁

是は定直段無御座、鐵中行燈之類、流用ニ書出申候、

一樅六尺札　壹枚　同七匁五分貳厘

但打釘添杭共

一幟　壹本　同六匁八分

一箒薪　七拾把　同拾九匁六分

但二夜分

一番小屋　壹ヶ所　同四拾三匁二分五厘

〆銀百九拾壹匁六分七厘

本材木町月行事　與兵衞

鍛冶町月行事　摠兵衞

四ヶ市非人　新四郎

彈左衞門代　丹助

此金三兩貳朱ト四匁壹分七厘

右之外、磔柱は御役所ニて谷大工拵申候

但右同斷〇前文云、前日牢屋鋪江呼寄申付候、

一右穴晒之節、幷磔之節、彈左衞門方より差出候非人人足共、不殘御役ニて差出申候、

一蠟燭　拾貳挺　代銀壹匁八分

是者彈左衞門自分入用ニて差出申候

晒無之磔壹人分御入用

一幟　壹本　代銀六匁八分

一椴六尺札　壹枚　同七匁五分貳厘

但打釘添杭共

一番小屋　壹ヶ所　同四拾三匁貳分五厘

一箍薪　七拾把　同拾九匁六分

但二夜分

〆銀七拾七匁壹分二厘

此金壹兩壹分ト貳匁壹分貳厘

右之外、磔柱者御役にて谷大工拵申候

但右同斷〇前文云、前日牢屋鋪江呼寄申付候、

一蠟燭　拾貳挺　代銀壹匁八分

是者彈左衞門自分入用ニて差出申候

一右磔之節、彈左衞門方より差出候非人人足共、不殘御役ニて差出申候、

〔科條類典下五〕(九)逆罪之者行ひ樣書上之事

一逆罪之者行之品、古來は主人殺候者、二日晝夜さらし、囚人其場所江埋、首梏をいたし、左右に鋸を差置、往來之もの、右鋸にて首挽候眞似爲仕候、然處慶安年中、石谷將監懸りにて、妙仙と申者、日本橋にてさらし候節、往來の者、鋸にて實に挽申候間、向後は其儀止メ、少宛襟へ疵付、其血を取、鋸に付さらし申候、其以後北條安房守勤役之時分より、襟江疵付候義も相止、鋸計側に差置申候、尤竹鋸も古來より今以差置申候、以上、

享保六年丑七月

右者丑七月十日上ル

右者御香具屋田中近江召仕權兵衞儀、近江父子を致殺害候、權兵衞御仕置之儀に付御尋有之、書上候權兵衞御仕置、左之通に有之候事、

但爲見合記置

鋸引磔　田中近江召仕　權兵衞

右一日引廻し、二日さらし、兩之肩、刀目を入、鋸血を付、たて置可申候、引可申旨申者有之候はゞ、引せ可被申候、翌日はりつけに可被行候、

右書面之通、戸田山城守御下知有之、札文言之內江、諸人勝手次第、鋸引可致との儀、認申候、

一日本橋にさらし候內、役人差出候儀無之候得共、右權兵衞御仕置以來、都てさらし候者有之時は、立合にて爲見廻、同心附置候事、

〔律令纂要三〕鋸挽磔者之事

寛政二戌年十二月　長谷川平藏

武州兒玉郡中村新里百姓勝之丞、晒之上鋸挽磔御下知相濟申候、右ニ付、晒之趣例之場所ニ而申

渡、牢屋敷ゟ出入之節牢屋同心付添候もの、拙者方ゟも組同心可差出哉、引廻し候節、當日是又御仕置之趣、例之場所ニ而爲申渡可申哉、右之通取計可申哉、御問合申候、以上、

戌十二月十四日

書面勝之丞、引廻し之上鋸挽磔御下知相濟候ニ付、右之段牢屋敷例之場所ニ而、御申渡相濟候得バ、直ニ拙者方江請取可申候間、御引渡有之候樣存候、尤別紙振合之趣、出牢御證文被爲遣候儀有之候、右請取相濟、直ニ引廻し候而歸牢申付候、翌日ゟ於日本橋二日晒、三日目、牢屋敷ゟ直ニ御仕置場江差遣候儀ニ有之候、引廻し幷御仕置之節も、見屆之者御差出有之儀ハ、御勝手次第之儀ニ存候、引廻し當日、御仕置之趣、例之場所ニ而御申渡、別紙之通ニ而相濟、引廻し之節ゟ拙者方へ請取後ハ、最早御仕置迄、拙者方之囚人ニ相成候儀ニ有之候、

戌十二月　初鹿野河内守

鋸挽制度

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事

從前々之例

一主殺　二日晒、一日引廻、鋸挽之上磔

鋸挽例

〔東武實錄十〕元和九年十月十日、夜ニ入テ、大原源次郎昔年三州ニ於テ忠義アル大原左近右衛門ガ孫ナリガ家ニ盜賊忍ビ入テ、源次郎時ニ拾四才弟三十郎、十二才母妹四人共ニ殺害シ、家人等ヲモ悉ク殺シ、家財ヲ盜ミ取テ出奔ス、○中略盜賊忽ニ露顯ス、凡ソ同類十人ニ及ブ、殘ラズ是ヲ捕ヘテ路頭ニサラシ、竹鋸ヲ以テ首ヲ引ク事七日ニシテ是ヲ殺ス、

〔耶蘇天誅記下〕一寛永五戊辰年、肥前ノ國高來郡有家村ノ百姓、二百七人一黨シテ、領主松倉豐後守重政ガ城下ヘ來リ、宗門奉行ガ宅地ニ往テ申スヤウ、以前御制止强ユヘ、是非ナク宗門ヲ故路(コロ)備(ビ)判形仕リタルコト、後悔千萬ニ候、彼判形我々ノ分ハ御戻シ下サレ候ヘト申ケル、宗門奉行恍惚ケルガ、少時ノ間賺シ置キテ、其隙ニ捕手ノ者ヲ呼寄セテ、悉ク召捕ヘ糺明シケレバ、大形ハ故路備テ本宗ニ立復ル、其内ニ權左衛門、作右衛門、又右衛門、吉兵衛、休意、休意ガ女房監物ガ娘、以上七人、其頭領タリ、此故ニ一往二往ノ譴責ニテハ改宗セズ、島原城外堀内田面ノ地名也ニ其身ヲ埋メ、竹鋸ヲ以テ頭ヲ挽落サント爲ケレバ、各堪兼テ故路備タリ、然レドモ吉兵衛ト云者一人ハ、終ニ竹鋸ニテ頭ヲ挽落サレタリ、殘ル六人ノ内、四人ハ助命アリ、權左衛門、作右衛門ハ死罪ニセラル、是ハ頭領ノ隨一ナル故ナリ、

〔御仕置裁許帳一〕主人之子を殺者之類

延寶二年寅三月十一日

壹人五兵衛　是ハ神田佐久間町新町藤兵衛召仕之者、此者之主人悴次郎吉儀、當月八日之夜、佐久間町三町目裏ニ而被切殺候出入ニ付、穿鑿之内、揚リ屋ニ入、

右之者、穿鑿之上、次郎吉を切殺候儀無紛付、江戸中引廻シ、竹鋸ニ而首挽、同四月四日、於淺草磔ニ行、

〔百一錄〕延寶九年○天和元年十一月十五日、甲子也、高倉大納言殿、家來瀧勘左衛門ト申者ニ被弑、幷侍一人被斬殺、　二年正月九日、高倉亞相弑却之惡人、被引渡大路被修竹鋸刑、

〔御仕置裁許帳一〕主人弑者幷從類

元祿七年戌十二月五日

壹人六平　是ハ湯島六丁目次左衛門店牢人木村仁左衛門下人、此者儀、昨晩主人使ニ遣シ罷歸候而、又々外江罷出候付、其儀を主人仁左衛門しかり候へば、主人仁左衛門を切殺候處、傍輩ひさと申女、幷勘右衛門と申下人組留候付、町人訴來、撿使遣召寄遂僉議候處、右之段無紛由申候、主人を切殺、重々仕形不屆ニ付牢舍、

右之者、主人切殺、重科之者故日本橋ニ而三日晒、鋸挽之上、亥三月廿七日、於淺草磔ニ行、

火罪

投熱湯・臥漬・坑殺併入

火罪ハ卽チ火焙(ヒアブリ)ナリ、徳川氏ノ時ハ大抵放火犯ニノミ此刑ヲ科セリ、是亦淺草及ビ品川ノ刑場ニ於テ施行ス、其法ハ、大抵先ヅ罪人ヲ馬ニ乘セテ、道路ヲ引廻シ、已ニ刑場ニ至レバ、非人數人ニテ、馬ヨリ下シ、縛ヲ解カズシテ、罪木ノ輪竹ノ內ニ入レ、兩臂ヲ輪竹ニ縛シ、腰及ビ兩足モ亦罪木ニ縛シ、束子タル茅及ビ薪ヲ四面ニ積ミ上ゲ、其上ニ束子ザル茅ヲ散ズ、用意全ク畢リテ、彈左衞門ノ手代ニ命ジテ火ヲ點ゼシム、非人卽チ茅二三把ヲ調ベ、茅薪ヲ以テ出入口ヲ塞ギ、彈左衞門手代ニ命ジテ火ヲ點ゼシム、非人卽チ茅二三把ヅヽヲ持チ來リテ、風上ヨリ火ヲ點ジ、席ニテ煽リテ之ヲ焚ク、或ハ所々ヨリ點火スルコトモアリ、罪人既ニ焚死スト認ムル時ハ、燃殘リノ茅薪ヲ引去リ、更ニ茅四五把ヅヽニ火ヲ點ジテ持チ來リ、罪人ノ左右ニ分レテ、一方ハ鼻ヲ焚キ、一方ハ陰囊ヲ焚ク、但シ女ハ乳ヲ焚ク、焚骸ハ其マヽニシテ、三日二夜晒シ置ク、罪人若シ牢死セシ時ハ、科書捨札ノミヲ建テ置クナリ、

徳川氏ノ時、罪人ヲ熱湯ニ投ジ、或ハ水ニ投ジ、或ハ坑殺スル等ノ事ハ、稀ニ行ヒシ所ニシテ、多クハ一時耶蘇教徒等ノ處刑ニ用キタル臨時ノ刑ニ外ナラザルモノヽ如シ、姑ク火罪ノ下ニ附載シテ之ヲ示ス、

火罪方法

【御定書百箇條】(同從二前々一之例)火罪

引廻之上、於二淺草品川一火罪申付、在方ハ火を附候所(江)差遣候儀も有之、捨札番人右同斷、(○三日之內非人番附置)

但物取にて無之分ハ不及捨札に、欠所右同斷、(○田畑、家屋敷、家財共欠所、)

【御定書百箇條】(享保八年極)火附御仕置之事

(享保八年極)一物取にて火附候者引廻之義、

日本橋　兩國橋　四ッ谷御門外　赤坂御門外　昌平橋外

右之分引廻し通候節人數不依多少科書之捨札建置可申候、尤火を附候所居所町中引廻之上、火罪可申付事、

但、捨札ハ三十日建置可申候

(享保五年極)一物取にて無之火附は不及捨札、火を附候所居所町中引廻し之上、

(享保八年極)右火罪御仕置、都て不及晒に事、

【憲教類典】(四ノ五評定)享保八癸卯年三月廿八日

和泉寺殿江上ル

此度之火罪之もの御仕置之儀御尋ニ付、如此書上候、

一此度之火罪之者七人一同ニ江戸町中三日率廻し、日本橋に一日、兩國橋に一日、四ッ谷御門外に一日、

右之通三日さらし、其上にて火罪可申付哉奉伺候、以上、

卯四月朔日

評定所一座
安部式部
山川安左衞門

右之通ヲ書付候所、御好有、如此書上ル、

火罪之もの、儀、さらし所之儀、先達而三ケ所と申上候得ども、外貳ケ所相增、五ケ所にいたし、

壹ヶ所に一日宛さらし、引廻し候には不及、右所々に科書之札を、さらし候以後までも建置可申候、火罪場所之儀、品川に而も淺草に而も、七人一同に壹ヶ所にて御仕置可申付候、
右之通被仰聞、何も相談仕候所晒所相増候て引廻し候よりは、猶又人に多存可然、御尤奉存候、
一相増候場所は、昌平橋外、赤坂御門外可然、奉存候、
一火罪之もの御仕置場まで牢屋より指越節者、前々之通、道筋に旗をもたせ、差遣可申候、以上、

四月

右之通書上候處、四月三日伺之通可仕旨和泉守殿被仰渡候、

〔刑罪大秘錄〕火罪御仕置之事

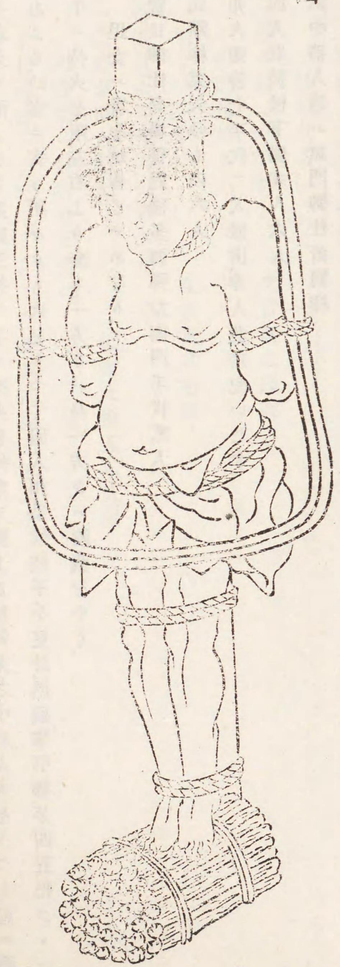
一五ヶ所捨札は日本橋　私造橋　兩國橋　四ツ谷御門　赤坂御門　御仕置場

都合捨札六枚

一五ヶ所には無之分は御仕置場計壹枚、
一右牢屋敷ゟ差出候節は、前ヶ條同斷引廻し御仕置之手續にて別儀無之、
一四人場所江引來候得ば、下働非人六人に而馬ゟ下し、繩の儘に而罪木に有之輪竹の中江入て、兩高腕を釣竹に結付、高股を同結付、足首を一足に寄同結付、いづれも太繩二重に掛ケ、碇と結付、土に而塗込、其上を小繩に而猶又卷、所々塗仕舞、下地に懸有之首繩を切り、其跡を太繩に而二重に致し、隨分ゆる〳〵柱に結ひ付、是又結目土に而塗、
一茅薪仕懸ケ方之儀は、竈と唱ひ候て、竹に而輪を拵へ、下江竹を打込、一廻り大きく丸く繩を張、薪三把ヅヽ、結右繩張之内江立並べ、其外薪を四人に爲踏、小男は猶又高く薪を仕懸ケ踏セ、夫ゟ茅壹把ヅヽ、結候儘二重又は三重に も積上ケ、猶又中程ゟ上江茅をちらし懸ケ、撿使町方與力に、支度宜敷旨彈左衞門手代申立下役同心江致差圖同心罷越、四人之名前相調候上、出入口

〔刑罪大秘錄〕火罪木

首繩の上ゟかけて塗り小結ひて
卷又土まで塗り高繩右同斷
胴繩太繩二重廻り土ぬりまで
高股右同斷足首右同斷



火罪之圖

を薪茅ニ而ふさぐ茅貳三把一手ニ持火を付參リ風上ゟ積候茅之中程ゟ火をうつし遖ニ而あふる時宜ニ寄り所々ゟも火をうつす囚人相果候樣子を見計燃殘等引拂茅四五把ヅヽ一手ニ持火を附左右より參り一方ゟハ鼻一方ゟハ陰嚢をやく、

但女ハ乳を燒皆とゞめなり、

一當日御仕置場警固穢多頭彈左衞門手代貳人、

一同斷棒突矢のもの六人

一非人頭善七手代二人罷出非人共差配いたす、

一囚人取扱候下働非人六人

一晒中番人等ハ獄門御仕置同樣、

一五ヶ所引廻火罪御仕置ニ決し候もの致牢死科書捨札計五ヶ所江相達候節ハ出役町方年寄同心若同心代雙方ゟ貳人ヅヽ牢屋敷江罷越牢屋見廻ゟ捨札請取附添場所江罷越爲建候事、

一矢之者貳人

一非人人足八人

○矢之者ノコトハ死罪篇引廻之上死罪條下ニ解セリ、

〔政談秘書三〕天保六未年十一月廿二日寺社奉行間部下總守樣江左之通伺書差出候處十二月十六日御呼出御付札を以御差圖有之○略中

火罪仕形

一六七寸廻リ之大竹貳ツ割ニシテひしき五寸廻リ之輪ニ致同四ツ割竹長サ七尺折返し右之輪を釣り火罪木江結付此輪ハ囚人入候爲計に無之仕掛之ため拵合之輪竹不殘木舞繩に而ひしき卷その上を大すきを入疾と塗込其上を細繩に而土留まき塗候、

一囚人あぶり候眞木輪三尺程退輪之形ニ竪ニ積重而輪江囚人入候而仕掛候節働ニものを入候ため貳尺程も道を明ケ右之眞木積候、

一同茅眞木廻積重尤仕掛相仕廻候得バ右働之もの出入道を眞木ニ而ふさぎ候、

一囚人場所江引來り候節馬よりおろしいましめの儘ニ而右の輪之内江入兩高腕を釣り竹ニ結付次細繩柱ニ結付何れも大繩貳ツヅヽ重掛ケかと結付土ニ而塗込其上小繩ニ而卷又候塗小男ニハ槇を踏せ候、

一塗仕廻いましめし首繩を切大繩二重ニ隨分ゆる〳〵柱に結付同右之通土ニ而結目を疾(トヾ)と塗仕廻働之者立去ル、

一眞木　貳百把

一大繩　貳把

一箭槇　七拾把

紙幟仕方

一厚キ紙　橫三枚　竪四枚　文言案之通認

但乳見積り

一板　幅一枚　長三尺　文言案之通認

一茅　七百把

一中繩　貳把

〔刑罪書〕火罪壹人分御入用

一佐野薪貳百拾把　代銀八拾五匁五厘

但壹把ニ付四分五毛ヅヽ、

一茅七百把　代銀貳拾三匁八分

壹把ニ付三厘四毛ヅヽ、

一大繩貳把　四尋もの　代銀九分七厘
壹把ニ付、四分八厘五毛ヅヽ、
一中繩拾把　十尋もの　代銀貳匁貳分五厘
一箭佐野薪七十把　代銀拾九匁六分
壹把ニ付貳分八厘ヅヽ、但二夜分、
一番小屋壹ヶ所　代銀四拾三匁貳分五厘
一梭六尺札板壹枚（長さ六尺三寸）　代銀六匁七分
一札打釘拾本　足四寸　代銀壹分九厘
一札建添杭　半本　代銀三分壹厘五毛
一のほり　壹本　代銀六匁八分
〆銀百八拾八匁九分貳厘五毛
此金三兩貳朱ト壹匁四分二厘五毛
但五ヶ所ニ候得共拾札五ヶ所分
代金貳分ト六匁貳厘五毛相增
都合金三兩貳分貳朱ト七匁四分五厘
（朱書）谷大工ト申ハ、元大工町南大工町、堅大工町横大工町右四町より町役に而差出候ニ付、大工町四丁目分拠代神田九軒町道有屋鋪源兵衛店新兵衛方より差出申候、
右之外　火罪木は、御役に而谷大工拵申候、
但前日牢屋鋪江呼寄申付候
一右火罪ニ懸リ候非人足共、不殘御役に而彈左衛門方より差出申候、

右火罪御仕置之節彈左衛門自分入用ニ而差出候品、左之通、
一四斗樽二ツ、代三匁五分　一醬油樽二ツ、代貳匁、　一ねば土壹樽、代八分、
本、代貳匁五分、　一蠟燭拾二挺、代壹匁八分、
〆銀拾匁六分

火罪制度

〔御定書百箇條〕火附御仕置之事
（寛保二年極）
一火を附候者（従前々之例）
但もえ立不申候はゝ引廻之上死罪、
一人に被頼火を附候もの、（従前々之例）
但頼候もの火罪
〔憲教類典四ノ六（評定）〕寛延二己巳年二月
御定書之内、火附御仕置、燃立不申候もの引廻之上可爲火罪候、

火罪例

〔慶長日記五〕慶長十四年六月朔日辛亥駿府本丸女房局に火をつくる間、燒上ル處ニ、され共もみ消ける、是女人の災成とて、下女を二人あぶり殺、局女房衆二人遠流、
〔當代記〕慶長十七年三月廿三日岡本大八ト云者有親ハ在江戸ス、彼大八、九州長崎ノ有馬修理儀ヲ於駿府取持者也、自修理方、金銀ヲ於指越ハヽ、各年寄衆幷女房衆へ遣之、彼取成ヲ以、九州鍋島知行中ヲ三郡申請可出ノ由、僞テ申候、眞ト心得、金銀ヲ大八方へ渡ス、素爲謀計間、不及何沙汰、金銀ヲ大八令領、此旨修理令言上間、廿三日、於阿部川原火炙ニ被成、
〔耶蘇天誅記中〕一慶長十七壬子年三月廿一日、駿河國府中ニ於テ、岡本大八、田中修理兩人吉利支丹宗門ナルガ故ニ、縛テ入牢シテ有リケルガ、今日獄屋ヨリ引出シ、府中ノ市町ヲ引渡シテ、

阿部川河原ニ於テ、火罪ニ行ハルト云々、

○按ズルニ、是說當代記ト異ナリ、附シテ參考ニ供ス、

〔梵舜日記〕元和五年八月廿九日、デイウス門徒七條河原ニテ火アブリ、六十五六人御成敗也、男女子共以下如此、見物群集、不及是非儀也、

〔羅山文集五十八雜著〕誅耶蘇邪徒論〔阿媽港ニ代ニ加加爪忠澄〕

夫施政安民者國家之本也、修文懷遠者主將之德也、及本朝慶長之初源大君之治世、文武兼備寬嚴相濟、四夷來款而立市舶司于肥前長崎浦、商賈交易者往來絡繹、阿媽港之蠢蠻、平素尊天主之敎、欲弘其邪法于本朝、比年所來之船中、或雇唐船以載耶蘇之徒號伴天連者、到于此、蓋是以此敎而唆我黎民竊有覬覦本朝之志、故大君震怒、捕伴天連及其徒悉斬之磔之、下令禁之、有信其法者罪及三族、爾來先君大相國今大君慕下三葉之間最惡之徒斯之術制禁益甚、然阿媽港猶寄事于商賈、匿伴天連于所雇唐船底來、而徵服潛行于群國、以此邪術誣惑庸人、且蠻船密養其衆、是以其徒連年逢囚縲或陷大辟、或被焚死者多矣、

〔耶蘇天誅記下〕一寬永年中、大坂ニ於テ、町御奉行久貝因幡守、島田越中守、大坂町中穿鑿ノ處ニ、深ク彼宗門ニ泥ミテ、公禁ヲ恐ザル輩數多アルニ付テ、糺明ノ上、悉ク火罪ニ行ハル、然ル處ニ、火罪見物群集ノ中ヨリ、翁嫗二人杖ニ携リ刑場ノ正中ニ出ケルガ、天主敎ノ御惠ミ有難シト言ナガラ、手ト手ヲ取リ組テ、火罪ノ煙ノ中ヘ飛ビ入テ自滅ス、

〔御仕置裁許帳六〕火を付る者之類幷投火仕者之類、

萬治三年子三月廿六日

壹人長兵衛　是ハ駒形町家主ハ不知庄兵衛出居乘どろぼう之由、放シ目明シ鳥井庄兵衛湯島ニ而捕ヘ來ル付入、

右之者火付成故、江戸中引廻シ、端々ニ晒同子三月五日火罪、

〔御仕置裁許帳六〕火を付る者之類幷投火仕者之類

延寶五年巳二月十二日

壹人傳藏　是ハ松平長三郎組同心、森作左衛門小者、此者今月四日之夜、榜輩松澤九郎兵衛家江火を付候由ニ而捕ヘ、久世大和守殿、土井能登守殿ゟ斷ニ付籠舍、

右之者同巳三月廿一日、大塚之末、巢鴨村ニ而火罪、

○按ズルニ、掃聚雜談ニ、寬文中ニ、峻府ノ番頭稻葉伊勢守正吉、ソノ家士安藤甚左衛門、松永喜内ノ爲ニ殺サレタルコトアリ、同姓稻葉美濃守正則、糺問シテ其實ヲ得シカバ、コレヲ火罪ニ行ハントテ、其下屋敷ヘ廣ク穴ヲ堀リ、内ニハ炭火ヲ起シテ、大ナル丸竹ヲ架シ、其上ヘ兩人ヲ渡シ、鯛ノ濱ヤキヲ燒クガ如クニシテ焙リ殺シキトアリ、是ハ私刑ニシテ、固ヨリ百箇條ノ制トハ異ナリ、其後猿子燒ト云フアリ、刑場ニ柱ヲ立テ鎖ヲ以テ罪人ヲ擊ギ、薪柴ノ上ヲ狂ヒ廻ルヤウニシテ燒キ殺セリト云フ、是亦百箇條ノ制ト異ナリ、

〔百一錄〕元祿十五年十一月廿一日似銀罪人被引渡於大路於丹波放火者被行火罪、

〔百一錄〕享保四年十一月廿六日、市中引渡者有之於丹州殺沙門者闔座主、成謀判者、田中村五左衛門　於水落十五歲男、投火於屋上者被行火罪、

〔的例黃紙之寫〕火罪

安永元辰年八月主殿頭殿御下知

一上州古屋村ニ而召捕候無宿猪八吟味一件

此猪八儀、盜爲可致、上州古屋村久七方雪隱之軒下ニ積有之候藁江致附火、右騷ニ紛レ、股引壹足盜取、幷夜著壹ツ肩ニ懸ケ、可逃去といたし候段、不屆至極ニ付、存命ニ候得者、御定之通、手限　安藤彈正少弼懸リ

無宿　猪八

町中引廻之上火罪可申付哉之段可奉伺處病死、

〔的例黃紙之寫〕火罪

安永元辰年九月佐渡守殿御下知

一常州土浦城下ニ而召捕候庄兵衛事庄七附火致候吟味一件之內、

手限　安藤彈正少弼懸リ

遠山兵右衛門御代官所常州信太郡江戸崎村百姓庄右衛門悴　庄兵衛事　庄七

此庄兵衛事庄七儀、土浦城下中條町出火之節、櫻川橋之下ニ、富田屋千藏方ニ而取除置候錢箱を明ケ、錢貳貫九百文盜取、其上爲可致盜右町藤兵衛居宅裏、木部屋之內ニ有之明キ俵江附火いたし候段、不屆至極ニ付、御定之通、町中引廻之上火罪可被仰付哉、

〔御仕置例類集ニノ七〕文化八未年御渡

火附盜賊改松浦大膳伺

一無宿枡五郎盜并遺恨を以附火いたし候一件、　常陸無宿　廣岡小僧　枡五郎

右之もの儀、所々寺百姓家ゟ有之處押外し、建寄有之戶障子を明ケ、明キ有之處へ這入、衣類金銀錢其外品々盜取、右品之內所持いたし、預ケ置金銀借受、質入賣拂、又は同類馴合、寺窓を押外し、脇差を拔持、頭取押込、住持を縛、聲立候ハヾ可切殺旨申威、衣類反物脇差等奪取、右品賣拂代金錢配分いたし、前書之代金銀錢盜取候分不殘遣捨、剩淨心方江止宿相賴候處、斷申聞候を心憎存候迚、同人方江附火いたし、居宅燒拂候段、重々不屆至極ニ付、町中引廻之上火罪、

此儀、品々惡事いたし候內、遺恨を以附火いたし候段、重々不屆ニ御座候間、御定書ニ物取ニ而無之、火附不及捨札ニ、火を附候處、居所町中引廻之上火罪と有之、尤此ものは寺院江押込其外所々ニ而盜いたし候上、右體附火いたし候ものニ付、差別も可有御座候哉と先例相糺候處、去ル未年、石川左近將監御勘定奉行之節伺之上御仕置申付候無宿繁八儀、所々百姓家入口其外

土藏等之ゟりを押外し、又はゟり無之處江も這入、衣類錢等盜取、其上相州平塚宿外レ松林ニ而、住所不存もの共と手合ニ加り、博奕いたし剩同國下飯田村儀八ニ遺恨有之候迚、盜可致心底ニ無之候とも、同人宅江附火いたし候始末、不屆至極ニ付、五ヶ所不及捨札、町中引廻し之上、火罪申付候例も御座候間、伺之通町中引廻しの上火罪、

〔我衣〕八百屋お七ガ本說

一加賀宰相殿ノ足輕ニ、山瀨三郎兵衛ト云者有、浪人シテ太郎兵衛ト改、丸山本妙寺門前ニ八百屋店ヲ出シ、青物商賣ヲイタシケル、子ナキ事ヲ愁ヒ、且那寺駒込吉祥寺元法花宗ノ七面大明神江深ク祈願シテ步ミヲ運ブ、佛力ノ誓ヒムナシカラズ、妻妊娠シテ女子ヲモウク、是偏ニ七面ノ加護也トテ、名ヲお七ト付タリ、生付サカシク、手跡ナドモヨシ、（レドモ、ヨキ女ニテハナカリシト云リ、○中略）お七ハ一體フトリ肉ニテ、少シ疱瘡ノアトモアリシトイヘリ、色ハ白カリケル依之七面へ御禮ノタメ、お七ニ額ヲ書セ、天和二年ニ奉納シタリ、常在靈鷲山法花最第一ノ文字ニ、十一歲ト書タリ、是ヲ狂言ニハ湯島ニカケシ松竹梅ト直シタリ、然ルニ九山ヨリ出火有之、太郎兵衛宅、類燒ニ及ブ、依之太郎兵衛弟小石川南緣山圓乘寺へ參リ、類燒急火ユエ、諸道具不殘燒失ニ及タルヨシ物語ケレバ圓乘寺申樣、幸地內ニ明寮モアレバ三人トモ住ハレヨ、來春ニナリ普請ニ取カヽラルベシト言テ、彼空寮ニ住セケル、扨亦圓乘寺ニ、御旗本山田十大夫殿悴佐兵衛ト云者有、若キ人カヽリ人ト成テキラレケルガ、お七ト密通シテ、太郎兵衛ガ住ケル寮へ晝夜行テ遊ビケル、其後來春お七ハ兎角佐兵衛ガ事忘ガタク、圓乘寺計ナツカシク煩出シ、人ノ言事モ耳ニ入ラズ、忙然トシテ暮シケル、爰ニ吉祥寺ノ門番吉兵衛悴吉三郎トテ、大酒ノ博奕打、ヤヽモスレバ喧嘩コノミ、親ノ手ニアマリ、終ニ勘當シテケリ、町所ヲユスリ、少々ヅヽノ小遣錢ヲモラヒ暮シケル者有、八百屋太郎兵衛方へ心易ク出入シケル、お七ガ煩フヲ見テイフ樣、ソナタノ病氣我ナラデハシル人

ナシ、極テ圓乘寺ヘ行テ佐兵衛ニ逢度キ煩ヒナルベシ、夫ホドナツカシキハ、アマリ不便ノ事也、我等中立シテ參ラスベシ、一日々々ノ小遣ヲ給ハラバ、毎日モ使セント申ケル、お七嬉シク、文シタヽメ佐兵衛方ヘ遣シケル、度々カクノゴトク使シテ、お七方ヨリ心付ヲ取リ、後々ハお七モ心付成ガタク、文計頼ミケレドモ吉三中々取次ズ、後々ハ惡心增長シ、お七ニ申ケルハ、何ホド文ヲヤリテモ佐兵衛ニ逢ガタカルベシ、逢ヒタクバ火事ヲ願フベシ、火事故ニコソ圓乘寺ヘハ引越タリ、結ブノ神ハ火事ナレバ、是ヨリ外ニ頼ミナシ、コナタノ家ヲヤクナラバ、又圓乘寺ヘ立退ベシ、其時佐兵衛ト逢給ヘト言ケレバ、お七女子ノ事ナレバ、夫ヲ誠ト心得テ、成ホド左樣思ヒテモ、火ノ付ヤウヲシラヌ也、吉三聞テ、シラズハ教ヘテ參セン、カヤウ〳〵トヲシヘケルコソウタテケレ、或時風ノ烈シキニ物干ニ出、吉三ガヲシヘニマカセツヽ、火ヲ放テバ、何カハタマルベキ、猛火盛ンニモエ上リ、消ベキヤウゾナカリケル、吉三郎時分ハヨシト欠付テ、家財衣類ヲ引包ミ立退ケル、其時盜賊奉行中山勘解由、吉三ヲ見付、心得ヌ人柄也トテ、組ノ者ニ申付召捕ラセ、雜物ヲセンギシ、屋敷ヘ引カヘル、夫ヨリ吉三拷問有ケレバ、成程盜取タル也、併火ハ付不申、火附ハ娘お七也ト申上ル、依之お七召捕レ、吉三ト對決ニ及ケル、お七申上ルハ、ソタクシ火ヲ付候事、存知不申、アノ吉三ヲシヘノゴトク、軒ヘ火ヲサシ候ト申上ル、奉行大ニ立腹アリテ、吉三オノレ火付ヲト申セドモ、致方ヲお七ニヲシヘ、其紛ニ盜イタシタル條、火罪ヨリモ重シ、先詮義大方ニ極リタリトテ、兩人トモ獄屋ヘ入ル、扨右ノ譯御老中ヘ御披露アル、上井大炊頭殿被申ケルハ、お七事、十五歳ナラバ科モ一段引下ケテ申付ベキ間、今一應お七ガ年ヲ吟味アルベシトノ事也、勘解由畏テ退出アリ、お七親名主家主共召寄ラレ、イカニお七ガ年ハ十五歳ナルカ、トクト吟味可致トノ事也、依之名主五人組、口ヲ揃ヘ、成程お七ハ十五歳ニ候ト申上ル、奉行悦ビ給ヒ、ガッコウ成程其年來ニミユル也、罷立トテ、其翌日吉三ヲ召出サレ、イカニ吉三、お七當年十五歳也、何トテ十七歳

犯罪地行刑

トハ申上タル、不埒成ト御叱リ有リ、其時吉三申樣、十七歳ニ紛無之候、お七元來戀故ノ事ニテカヤウナル事仕出シ候、十五歳ニテハ戀ハ致シ申間敷候、其上慥成證據ハ七面堂ニお七、十一歳ノ筆ニテ額カケ置候也、是ヲ御覽可被下ト申ケル、奉行聞テ額ヲ取ヨセ御覽アレバ、天和二年十一歳書トアリ、夫ゟ貞享二年迄算ユレバ十七歳ニ當ル、奉行悦ビ給ハザレドモ、是非ニ及バズシテ、右之段御披露アリケレバ、御老中方ニモ不便ニオボイテ、吉三諸トモ同罪〇火ニゾ及ビケル、

〔御仕置裁許帳〕ニ在所江遣被行者之類

元祿四年未四月六日

壹人女はつ　是ハ出羽國上北山村彌兵衛女房、此者同國中江村六兵衛と申者と三年以前ゟ致密通、當正月廿七日之夜、相談之上、本夫彌兵衛を斫ニ而切殺、其上居宅江火を付候由、彌兵衛兄弟彌藏彌十郎訴訟申ニ付、今日召寄遂穿鑿候處に、右之段無紛ニ付、評定所ゟ牢舍、

右之者同未七月廿五日、其所江遣火罪、

壹人六兵衛　是ハ右同國中江村之者、此者彌兵衛女房はつと致密通、其上彌兵衛を切殺、居宅江火を付候由、はつ申懸候得共、此者曾而覺無之由爭申ニ付、今日召寄遂衆議候處、申口不分明候ニ付穿鑿之內評定所ゟ牢舍、

右之者同未七月廿五日、其所江遣シ火罪、

〔的例黃紙之寫〕死罪

安永元辰年三月右近將監殿御下知

一備中國西山村久兵衛悴政七、火を附致盜候吟味一件之內、

野村彦右衛門御代官所備中國川上郡西山村百姓久兵衛悴　政七

手限　松平對馬守懸

此政七儀爲可致盜主人伊平次方水車小屋江火を附右騷ニ紛錢八貫文盜取候段不屆至極ニ付、
西山平川兩村引廻之上於平川村火罪可申付哉、
〔新張紙留〕江戸町抱之中間ニ而附火いたし候もの自分仕置申付方之事
御相談書　榊原主計頭
酒井雅樂頭中間安五郎儀盜を心懸附火いたし候ニ付相伺候處自分仕置申付候樣御差圖相濟候旨を以仕置申付方問合候間取調候處万石以上領分ニおいて附火いたし候もの其領分ニ而仕置申付候儀ハ子細も無之儀ニ候得共今般之安五郎ハ江戸抱之者ニ而雅樂頭屋敷內ニ而之附火ニ付一體ハ江戸表ニ而仕置ニ相成候方相當之ものに有之遠路在所迄差遣仕置申付候ハ、差跨候儀ニ候得共江戸屋敷ニ而火罪ハ難申付左候迚自分之仕置之ものを御仕置場ニおいて爲取計候筋ニも有之間敷殊ニ右場所ニ而仕置取計候ニ付ハ五ヶ所捨札等ニも差響候間矢張於在所申付候樣可及挨拶候哉先例相糺候得ども右體之例不相見候間御相談おゐて候以上、
巳三月
右文政四巳年三月二日主計頭持參其通一座評決、
〔御仕置例類集一ノ六〕文政五午年御渡
奈良奉行伺
一和州御所町新七借屋留吉致附火候一件
植村駿河守御領所和州葛上郡御所町新七借屋　留吉
右之もの儀弟音藏江附火之儀ハ不申聞盜ニ罷越候間盜物持運ニ參リ呉候樣申聞音藏同道罷越同人儀ハ附火之儀心付不申樣途中ニ爲待置留吉壹人八家五ヶ所江火を附爲及燒失出火場所ニ取出有之候錢貳貫文著類其外物數とも六拾三品盜取途中迄持退夫より音藏と兩人ニ而

持歸り內壹品ハ落拾壹品ハ用ひ仕舞四品ハ所持其餘質入又ハ賣拂候代南鐐銀札錢且盜錢共都合南鐐壹片銀札三匁錢三拾貫五百文を仕廻候始末重々不屆至極ニ付奈良町引廻し之上火罪、
此儀火を附候もの火罪之御定ニ見合物取ニ而之火附ニ候間江戸表ニ候得ハ引廻之上五ヶ所科書捨札建火罪可申付ものニ候得共并上丹波守申上候趣ニ而ハ於彼地捨札無之儀と相聞候間伺之通奈良町引廻之上火罪、
朱書　評議之通り濟

投熱湯

○
〔耶蘇天誅記 中〕一元和二丙辰年六月大和國五條ノ領主松倉豐後守重政本知三万三千石ノ上一万石ノ御加增ヲ下シ置レ肥前高來郡有馬ノ城へ所替仰付ラル然シテ仰渡サレケルハ今度所替仰付ラレ候高來郡ハ往昔ヨリ吉利支丹宗門ノ輩數多在住ノ地ナルノ由聞召及バレタル所ナリ其方彼地ニ到ラバ郡中微細ニ相改メ不日ニ邪宗門退治仕ルベシ其ニ就キ江戸表ノ公役一切ニ御免成セラルヽノ間隨分精ヲ入領內靜謐セシムベキノ由也豐後守上意ノ趣有リ難ク承知奉リテ入部ノ後万事ヲ閣キテ邪宗門ノ輩ヲ穿鑿シケル程ニ日々ニ五人十人此所彼所ノ村々ヨリ召囚リ來リテ糺明シ或ハ斬罪或ハ火罪或ハ熱湯ニ沈メ或ハ鋸挽ニシ罪ノ輕重ニ隨テ刑ヲ行セケル、
〔耶蘇天誅記 下〕一寛永二乙丑年肥前ノ國高來郡島原ノ城主松倉豐後守重政私領高來ノ村々吉利支丹宗門棟シク詮議セシメ糺明ノ上ニテ本宗ニ立復ル輩ヲバ赦宥シ邪宗ヲ故路備ザル族ヲバ種々重刑ニ行フ其節刑伐ヲ蒙ル徒ハ西古賀村百姓三人河原平村百姓一人深江本場村百姓一人島原町作右衞門口之津村助大夫女房深江村庄屋甚平母以上八人是等ハ溫泉山ノ熱湯

ニ打込ミ煎殺サル、作右衛門ガ子共三人ハ、島原表ノ海ニ臥漬ニス、深江村庄屋甚平是モ温泉ノ熱湯ニ沈メラルベキニ究リタル處ニ此程炙籠ニ載セテ強ク責ラレ、先達テ死タリトゾ、

一寛永三丙寅年、松倉豊後守重政ガ領内肥前高來郡ノ村々吉利支丹穿鑿アリケル處ニ、口之津村百姓助大夫、島原古町休巴、同所中町彦右衛門ガ女房、同所水頭町庄三郎等、其外高來郡一郡ニテ都合十人、堅ク邪宗門ニ泥ミテ、本宗ニ立復ラザルニ付テ、温泉山ノ熱湯ニ沈メラル、トナリ、」

一寛永四丁卯年、長崎御奉行水野河内守、長崎表ニテ吉利支丹宗門詮議アル處ニ、彼宗門ニ拘泥シ、本宗ニ立復ルマジキ由申ス奴曹三百四十二人アリ、○中略其中ニ紙子屋淨淋ト云シ六十有餘歳ノ老人一人、兎角改宗セズシテ、温泉山ノ熱湯ニ沈メラル、

一寛永年中、長崎御奉行曾我又左衛門、長崎町中ニ於テ、邪宗ノ類族數多召捕テ糺明ノ上、道ルヽ所ナキ輩百十餘人、長崎ヨリ引來テ、高來郡温泉山ノ熱湯ニ沈メラルト云、

臥漬

【金澤藩刑法者扱書】

才川於二河原一釜煎

石川郡番匠垣内村太郎左衛門娘　ぬい

右之者寛文六年、侍方等ニ致奉公罷在候内、主人等家六ケ所江致付火、過分ニ金銀等盜取候付、金澤中引渡、其後雨橋ニさらし候上、釜煎ニ申付候而、死骸於上口磔ニ掛置候事、

【耶蘇天誅記下】一寛永二乙丑年、肥前ノ國高來郡島原ノ城主松倉豊後守重政私領高來ノ村々吉利支丹宗門稠シク詮議セシメ、糺明ノ上ニテ本宗ニ立復ル輩ヲバ赦宥シ、邪宗ヲ故路(ゴロ)備ザル族ヲバ種々重刑ニ行フ、○略申作右衛門ガ子共三人ハ、島原表ノ海ニ臥漬ニス、

【近世見聞錄】一今の世は上代に替ること多に成ぬ、是によてあながちに古法をのみ用ば誤りも有らん、田中法印社務の節、延寶の比、八幡の放生川に網引もの有り、殺生禁斷の處なるを、淀の者密に網を入る事度重り、被生捕て贖にせられ沈みに掛けるを理もなく科に行ふこと

坑殺

そ意恨なれとて、淀ゟ江府に訴之、○略下

【御仕置裁許帳四】座等人之女房と致密通、本夫を殺候者、幷嫉妬にて人を切殺者、

手鎖帳

天和三亥年五月廿九日

壹人座等意津一　是ハ本八町堀壹町目善兵衛店座等靜一出居衆此者宿靜一相店、金左衛門悴仁兵衛と申者、同店次郎兵衛所江夜前參泊リ、次郎兵衛出居衆金兵衛と申者と兩人二階ニ臥リ罷在候處、夜前七ツ前ニ、金兵衛何者ニ歟數ヶ所ニ而被切殺、屋根ゟ落、次郎兵衛表ニ倒罷在候、仁兵衛儀モ二階ニ而被切付候由、下江おり、其身親金左衛門方江欠込候由ニ而、家主善兵衛、五人組名主申來ル付、雙方召出シ遂僉議候處、此者申候ハ、兩人共ニ切申候段無紛候、其段右之仁兵衛儀、私女房と致密通候付、證據を取申度心懸候得共、盲目之儀ニ候得ハ、證據を取不申候故、當月八日女房ニ暇を遣シ申候、仁兵衛を切殺可申と存切候由申ニ付、穿鑿之内手鎖を懸ケ、家主五人組ニ預ケ遣ス、

右之手負仁兵衛ハ、親金左衛門ニ養生仕候得、死人金兵衛ハ、宿次郎兵衛ニ取置候得と翌廿九日申付之、切人之儀、遂僉議候處座等意津一、切候段無紛白狀申ニ付、穿鑿之内手鎖を懸家主善兵衛ニ預ケ遣シ段々遂穿鑿候之處、重々不屆ニ付、岩船檢校方ニ而座等仲ケ間之任法ニ、簀巻ニ行申度旨檢校願、兩番所ゟ年寄同心相添、同亥閏五月三日岩船檢校方江渡之、

右之座等意津一を岩船ニ而簀巻ニいたし、於佃島之沖ニ沈之、

【耶蘇天誅記下】一寛永年中、江戸ニ於テ乞丐(或說ニ癩病人ト云ルハ全クノ非ナリ)百人餘リ、吉利支丹宗門タルニ依テ、淺草鳥越ノ邊ニ、虎落ヲ結ビテ其中ニ追込ミ置、食事ヲ與ヘズ飢殺シニシテ、直ニ其土地ヲ堀リテ埋レシトナリ、

〔羅山文集五十六雜著〕山伏

古之刑墨劓刖宮大辟後世易以笞杖徒流絞斬皆是所謂五刑也至於太甚則有轘（クルマサキ）磔（ハリツケ）梟首腰斬棄市鋸項之刻薄暴酷也何足數哉今浮屠中之一徒著頭巾挂露衣帶劒杖錫佩大螺具有事乃吹貝而呼衆世之所號山伏者是也其徒有犯法當罪者衆胥議穿深坑而活埋之然後下石以封樹焉表曰某之山伏有罪矣官之所不能禁也（略）下

○按ズルニ是ハ私刑ナレドモ又罪人ヲ坑スルナレバ姑ク記シテ參照トス、

〔明良洪範十九〕稻葉淡路守殘忍の事

稻葉淡路守紀通ハ丹州福知山の城主なりしが生得無道殘忍にして惡行超過しけり代官の中に私曲の者有とて召捕て禁獄せしが其事の吟味もきはめずして夫婦子共すべて忌懸りの者をば悉くからめて居間の庭に穴をほらせ首ぎはまで埋みならべて小さき桶を頭に打かぶせ置て朝夕の慰みに一々見廻られし段々死亡しけるに代官計は命つれなく七日までそ生延ける毎朝桶を取て見られしに未だ死なざれば妻子親族皆死たるに己一人殘りしは業因ふかき男よと嘲哢せられしかば彼代官眼を開き申けるは今迄は何とぞ命だにあらば此恨を報はんと思ひしに妻子皆死亡びし上は最早是まで也士の仕樣こそ有べきに終に聞も及ばざる刑罰也今に思ひ知らせんと忿りながら舌をかみ切死したり夫れより淡路守亂心して色々に狂はれしが鐵砲に藥を込自ら火をさして打拔れてぞ死せられし、

古事類苑

法律部三十五

下編上

遠島

配流地　二六一
遠島方法　二六二
遠島制度　二六四
發遣前禁獄　二六五
遠島者發遣　二六六
遠島者在路（在路逃亡）　二七一
遠島者到配所　二七四
流人給與　二七八
聽送物流人　同
聽流人子到配所　二八三
遠島代人　二八八
朝廷遠島例　同
幕府遠島例　二九一
僧徒處刑　二九九

晒之上遠島　三〇一
遠島者犯罪　島替　三〇二
脫島　三〇四
雜載　三〇七

古事類苑

法律部三十五

下編上

遠島

配流地

遠島ハ卽チ流罪ノコトナリ、德川氏ノ時ニ至リ、京、大坂、及ビ四國中國ヨリ配スル者ハ、薩摩、及ビ五島ノ諸島、隱岐、壹岐、肥後天草郡ニ遣ハシ、江戸ヨリ配スル者ハ、伊豆ノ七島（大島、八丈、三宅、新島、神津、御藏、利島、）ニ遣ハス、其他甲斐、信濃、陸奥、出羽、蝦夷等ニ配セシ事モ亦尠カラズ、而シテ流人其島ニ到レバ、島守ニ請ヒテ數十步ノ地ヲ借リ、茅舍ヲ造リテ以テ雨露ヲ避ク、而シテ身體强壯ノ者ハ、島民漁捕ノ助ヲ爲シテ、僅ニ飢渴ヲ救ヘドモ、軟弱ノ者ニ至リテハ、之ヲ爲スコトヲ得ザレバ、飢餓シテ命ヲ失フコト往々コレアリト云フ、

流人脫島シ、又ハ死罪以上ノ罪ヲ犯ス時ハ、其罪ノ輕重ニ據リテ、死罪若シクハ磔刑ニ處シ、遠島以下ノ罪ヲ犯ス時ハ島替ニ處ス、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事（從二前々一之例）

一遠島

江戸ヨリ流罪之者ハ、大島、八丈島、三宅島、新島、神津島、御藏島、利島、右七島之內（江）遣ス、京、大坂、西國、中國より流罪之分ハ、薩摩、五島之島々、隱岐國、壹岐國、天草郡（江）遣ス、

但田畑家屋敷家財共欠所

〔公裁秘錄〕島々善惡之覺

遠島方法

一大島　是は流人暮能島ニ而、少々場廣候、
一三宅島　是は大島ゟ狹候へども、外島ゟ能候、
一八丈島　是は江戸道法遠く候へども、流人暮能、流人親類ゟ見屆物早速屆申候、
　惡敷分
一利島　家貳百十八軒、人數五百八人、廣サ壹里四方、流人三人、
一神津島
一御藏島　家廿九軒、人數百八人、東西廿四五町、南北一里程、此島中ニ惡敷候、
　右之通島々善惡如此御座候
　正德四年午三月十四日
〔政談四〕古ハ遠流中流、近流ノ三品有、當時ハ八丈島ヲ遠島ト云、古ハ其罪人之故鄕ヨリ遠近ヲ分ケテ遠流、中流、近流ト云タル事ニテ、或ハ備後、出雲、土佐、伊勢、尾張、上總、伊豆、常陸、上野、陸奥、出羽等ヘ流サレタルコト有、大島、八丈島ハ江戸ヨリハ遠流ニテハ有間敷也、大島ヨリ船ニテ蛤等賣ニ來ルト云、商人入込テ、島ト云樣成コトニテハ無ト也、八丈島モ殊之外近ケレドモ、近ト云コトハ島代官ノ秘スルコトナリト云、殊ニ安樂ナル所成由ナレバ、遠流ト云フコトニハ當ル間敷也、當時近流、中流ト云コトノ無モ、戸籍ノ法不立、人ノ心儘ニ日本國中ヲ何方ヘモ、先ヨリ先ヘ歩行キ居住スルコト成世界成故、近流中流ト云コトハ、自ヅカラ絕失タルナリ、〇中略七八十年以前迄ハ、庄內最上ヘ流サレタル類有、是ハ流罪ト名ヲ付タル迄ニテ、大形ハ當時之御預ケ也、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事
（從二前々一之例追加）
一八丈島御藏島、兩島江之流人ハ、三宅島迄差遣、島守江相渡、夫ゟ順風次第右兩島江遣候事、

〔科條類典下七〕覺
一島々江之御證文ハ、拙者共方江請取、島支配之御代官江相渡申候、
一大島流人御座候節ハ、御證文拙者共方江請取、向井伊織方江相渡申候、
一浦賀御關所江之御證文ハ、拙者共方江請取、流人警固同心共爲持、浦賀御關所江差越申候、
一御目見以上之流人、幷女流人ハ船中別圍に而差遣申候、
一流人出船之節、重病に而相殘り候者有之節ハ、町奉行ゟ斷證文、拙者共方江請取、浦賀御關所幷流人遣候島之役人迄人數減候斷證文、拙者共方より差越申候、
一八丈島御藏島、此兩島江之流人ハ、三宅島迄差遣、三宅島之島守より請取證文取之相渡、三宅島ニ而順風次第其所出船仕候、
一若破船仕候節ハ、其所流人揚置、名主年寄共江申付、番人附置、警固同心之內壹人御當地江罷登、注進次第伺之上、代リ之島船仕立差越申候、
一伺書之趣、何年以前被仰渡相濟候哉、書面等も無御座、相知不申、先役共方より段々申傳ニ而伺書差出申候、
右之通、流人有之節は取計仕候、以上、
　十二月
〔御仕置例類集二ノ一〕文化元子年御渡
　所司代伺
一流人差遣候島之儀ニ付評議
　下野守殿所司代御勤役中御差圖之通、舊臘廿二日、遠島申付候、十郎兵衞和助、新助儀、來ル三四月頃、薩州島江便船ニ差遣可申處、十郎兵衞外貳人儀ハ、拔荷賣買致し候もの共、吟味一件之內

櫻井七右衞門

遠島制度

重立候もの共ニ付、外島江差遣候方可然哉ニも御座候ニ付、此後流人差遣候島順之儀、大坂町奉行江懸合候處、薩州之次順之儀ハ、五島ニ有之、來丑年ハ、五島江差遣候積申越候間、便船ニ不拘、右三人之もの共一同、來春五島江差遣候様可仕候哉、舊臘遠島申付候もの共ニ付、來丑春ニ相成候而ハ出帆徐り延々ニも相成候儀ニ付、矢張薩州江差遣候筋ニも可有御座哉、又ハ京都町奉行より申越候、伺之通可申渡様ニも可仕候哉、乍去徐り延引ニも相成、其趣旨難相決奉存候ニ付、則町奉行共差出候書付寫壹通入御披見相伺之申候、

子三月

朱書　評議之通濟

此儀十郎兵衞和助ハ、薩州江罷下り、出所不正之唐物買取候ものニ而、新助ハ同國ゟ持登候同様之唐物買取爲賣捌候ものニ付、三人共薩州之島江可被差遣筋ニ有之間敷候間、京都町奉行伺之通、來春五島江可差遣旨被仰達可然哉ニ奉存候、

〔寛政刑典〕目安裏判之事

一壹万石以上、一領一家中迄にて、外江障無之候ハヽ領主にて遂吟味、仕置之儀可相伺候、但遠島可申付科ハ、其領内ニ島無之候ハヽ、永牢或ハ親類緣者等江、急度預置べき事、

〔武家嚴制錄〕禁裏院中幷公家中御條目

一公家衆御條目

公家衆法度○略　中

一公宴之外私而不似合勝負幷於不行儀之靑侍已下拘置輩者流罪同先條事、

右之條々所相定也、從五攝家幷傳奏如其屆有之時可行武家之沙汰者也、

慶長十八年六月十六日

昭實在判　二條關白

秀忠在判

家康在判

〔禁裏向御法式〕禁中幷公家中衆諸法度○略　中

一關白傳奏幷奉行職事等申渡儀、堂上地下輩於相背者可爲流罪事、○略　中

慶長廿乙卯年七月日

登遣前禁獄

〔御定書百箇條〕廻船荷物出賣出買幷船荷物致押領候者御仕置之事

寛保三年追加

一同船頭（逢雜風打荷致、殘荷物を盜取候船頭之一宿いたし、馴合村中之者江申勸、配分取候者、）遠島

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保三年極追加

一幼女江不義いたし怪我爲致候もの　遠島

〔憲教類典四ノ六評定〕寶曆四甲戌年四月

遠島者申渡相濟牢內ニ差置、人數十人程ニ相成、島々江差遣候に付唯今迄致永牢候者も有之候、向後遠島申渡相濟牢內ニ差置、人數何人有之候共、出船爲仕候樣可被致候、勿論七ヶ月に限候儀ニも無之候、七ヶ月越候儀有之候而も不苦候、然共七ヶ月越候上、致延引候儀ハ如何ニ候、其節之時宜にも可寄事ニ候間、其節々々可有作略候、

四月

〔牢獄秘錄〕遠島に成候者の事

一遠島に成候者ハ、前日に遠島部屋（東の揚り屋を、遠島部屋といふなり、）に入置、翌日出す事也、遠島に成り候ものは、今迄牢內に（揚り屋に而も、大牢式間牢に而も、）有之處之蒲團を、其者へ遣し候事也、牢內蒲團持行ものは、遠島ものに限ると云、

朱書　流罪

〔后赦錄〕安藤對馬守殿御差圖

寛政十二申年閏四月廿三日遠島申渡
同年十月十三日

一三宅島江流罪

朱書 右は根岸肥前守病氣ニ付、小田切土佐守殿於御役宅、御目付筧助兵衛立合、御仕置申渡、出船迄之内歸牢、

〔公事手留〕遠島申渡、出帆迄在牢之もの病死いたし候儀ニ付申上候書付、

御留守居番成瀬吉藏組元同心　石川傳七〇略中

御屆

右之もの儀、博奕貸元いたし候趣、吟味伺之上、當六月十八日、遠島申渡、出帆迄在牢申付候處病死いたし候趣、牢屋敷江差遣、身寄江屆候もの差遣候處、病死ニ無相違候間、死骸取捨申付候、依之申上候、〇年月闕

石川主水正

下墨村無宿　太吉

遠島者發遣

〔官中秘策二十四〕御預ケ人遠島或者御赦免之事

遠島於評定所被仰渡候以後、船出來不申候得者、預りて船出來候時、船場迄送り、御船手江相渡候、前日舟手衆御目付衆御出入に御逢、御見知り候て翌日御請取なり、

一衣類道具金銀米等一門中遣候樣差圖も有之、預り主方江も預り主方於船場遣候、

先達而御老中方書付を以、御船手へも申談遣候、

〔刑罪大秘錄〕遠島御仕置之事

一掛り〳〵ニ而遠島申渡、出帆迄在牢、出帆以前四人身寄方屆物書付を以、掛り〳〵江願出右書付計、出帆世話役町奉行江達、町奉行方牢屋敷江差遣、身寄方屆錢無之ものは掛り〳〵方手當錢遣す、雜人ハ壹人江金貳分、揚屋者ハ金壹兩、揚座敷者ハ金貳兩、何れも錢ニ而渡ス、屆物員數ハ、壹人江、

米貳拾俵迄　錢貳拾貫文迄　金貳拾兩迄　但錢ニ直ス

右員數方上之屆不相成外ニ麥五俵位迄ハ屆願相濟、

刃物　書物　火道具

右品々ハ屆願、前々方不取上、

一出帆日限定り候得者、先達而願書差出置候屆物之品々、右出帆前日世話番之町奉行所江持參候樣、兼而願置候身寄之向々江、牢屋敷又者掛り〳〵方申達ル、

一出帆前日卸船手江引渡、出役與力雙方貳人牢屋敷見廻り與力雙方立合、石出帶刀江世話番之町奉行申渡、人別島割帳面相渡ス、

一右申渡相濟、牢屋見廻り江居殘當番所前ニ而屆物品々相改、帳面ニ引合、品之分ハ屆願人町役人共懸り御船手當番所江持參候樣申渡、年寄同心江品書帳相渡、差添御船手江引渡候樣申談、

一右錢之分ハ屆錢手當錢共前日御船手江者不遣、牢屋敷江遣ス、右調相濟、牢屋見廻り牢屋鋪江罷越詰所前江筵を敷、遠島之囚人一同呼出し、手鎖腰繩ニ而下男引來、鑰役、醫師椽側ニ坐ス、明日出帆、幷島割帳、身寄方之屆之品掛々方之手當錢等牢屋見廻申渡、牢屋内ニ而用ひ來り候藥舊藥等醫師方相渡、右屆錢手當錢之内ニ而買物等當人共相願候得者、壹人四百文位者買物爲致候事、

一當朝引渡出役一同相揃候上、囚人ハ牢前江差出、侍出家等ハ駕籠、雜人ハ持籠ニ乘せ、何れも青細引ニ而縛り、揚屋ものハ羽がひ〳〵ニ致ス、錢ハかますニ入、木札を附、銘々前ニ並居、出役與力其外一同罷越、鑰役出牢證文を以、囚人銘々名前肩書年付入日懸り附等相改、出役與力江相渡、牢屋裏門方差出引渡、下役同心ハ囚人高ニ應じ、增減有之、囚人ニ附添御船手番所江罷越、出役之與力御船手頭江應對、囚人錢幷牢内方爲持參り候雜物共引渡ス、

但揚座敷幷女ハ、船中別ニ圍、

〔刑罪書〕遠島者御入用

一赤椀折敷　壹人前ニ付壹ゑ九分壹厘宛

是は出船の節相渡申候

但御世話番御番所より、町年寄江被申付、直ニ牢屋敷江室町駿河屋儀兵衛方より爲相納申候、

一二把入叺　壹ツニ付壹ゑ六分宛

是は遠島被下錢、幷居錢入遣申候、

但牢屋敷ニ而申付候

一町人足　壹人ニ付壹ゑ貳分五厘宛

是は遠島者錢持運人足、幷揚座敷格遠島出船之節、駕籠舁幷雜物持參之人足、

右御入用不殘、牢屋御入用帳江書出申候、

一遠島者出船之節、差出候非人人足之分は、不殘御役ニ而彈左衞門方より差出申候、

但前々日牢屋敷ニ而彈左衞門江申付候、

〔諸事留〕追放もの欠所之儀ニ付相談書

書面追放もの欠所之儀は、其時宜ニより取計候方可然、此上極置候而は、差支も出來可申間、是　之通ニ致置可然旨談差戻ス、

小田切土佐守殿　松平兵庫頭

根岸肥前守殿　水野若狹守〇中略

一遠島者之儀、親類より見繼金等差遣候もの無之段、各樣より御通達有之候得ば、關所金之内ニ而、金貳分之錢、大貫次右衞門より爲差出相渡來候、然處親類より見繼金貳分ニ不滿節は、各樣御役所ニ而は、右送り錢へ足し、都合貳分ニ不滿節は、右不足分之錢は、次右衞門より爲差出、相渡心得ニ御座候、

右之通取極可然哉、此段及御相談候、以上、

長四月〇文化五年

〔御仕置例類集ニノ三〕文化十酉年御渡

御船手石野傳兵衞伺

一御出產有之候節、遠島もの出船之儀に付評議、

先達而伺相濟候、私承ニ而差遣候遠島者、出船日限之儀、來廿五日之積申上置候處、其比御簾中樣御出產被爲在候節者、御七夜相濟候迄、右出船相延し、其後町奉行江申談、出船爲仕可申ト奉存候、依之此段奉伺候、

此儀遠島もの出船之儀、御仕置申渡候ト者譯違候間、御七夜過候はゞ御三七夜內ニ而も手鎖過料、其外輕キ御咎者可申渡哉之段、今般申上候通被仰聞候ニ准じ、御七夜相立候上、町奉行江申談、出船爲仕候樣被仰渡可然哉ニ奉存候、

酉十月　朱書評議之通濟

〔遠島者一件〕戌〇嘉永三年九月五日

明六日遠島もの出船ニ付、御船手江相渡候間、別紙帳面之通、囚人拾貳人別圍のもの壹人、都合拾參人出役江相渡諸事先格之通可被致候、

石出帶刀江

九月五日

〔遠島者一件〕遠島もの之儀ニ付申上候書付　池田播磨守

遠島御下知相濟候もの、當時拾壹人程御座候間、島々江遣申度奉存候、御船手江被仰渡可被下候、

以上、

池田播磨守

巳〇安政四年二月

〔翁草百十七〕流人之話

流人を大坂へ渡さるゝに、高瀬より舟にて町奉行の同心之を守護して下る事なり、凡そ流人は前にも記す如く、賊の類は希にして、多くは親妻子もてる平人の辜に遇へるなり、罪科決して島へ遣はさるゝ節、牢屋敷に於て親戚の者を呼出し引合せて暇乞をさせらるゝ、定法なり、故に親戚長別して、舊里を出る首途なれば、己がごち船中にて夜と倶に越方行末の事を悔みて、愁涙悲歎してかきくどくを、守護の同心終夜聞くにつけ哀傷起り、心をいたましむる事成に、或る時一人の流人公命を承ると雖も、世に嬉しげに、舟へ乗てもいさゝか愁ふる色不見、守護の同心是を見て、卑賤の者ながらよく覺悟せりと感心して、船中にて彼者に對して稱嘆するに、彼云く、常に僅の營に渇て粥を啜りて露命をつなぎしに、此御吟味に逢ひてより、久々在牢の内、結構なる御養ひを戴き、いたづらに遊びくらし、冥加なき上に剩へ此度島目貳百文を下され（流人に島目貳百文下さるゝ事古來ヨリ定例ナリ）て島へ遣はさるゝ事、如何なる果報にて如斯成りや、是まで貳百文の錢をかため持たる事、生涯に覺え申さず、か程過分の元手有之候得ば、たとへ鬼有る島なりとも、一ツ身の凌ぎはいか樣にも出來可申候、素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候得ば、都に名殘は更になく候とて、悦ぶ事限りなし、此者西陣高機の空引に傭はれありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の

遠島者在路

者同く其日を過ぎ兼貧困に迫りて、自害を左かゝり、死兼居けるを、此者見付けて、迚も助かるまじき體なれば、苦痛をさせんよりはと手傳ひて殺しぬる、其科に仍て島へ遣はさるゝなりけらし、其所行もと〳〵惡心なく、下愚の者の辨へなき仕業なる事、吟味の上にて明白なりしまゝ、死罪一等を宥められし物なり、彼守護の同心の物がたりなり、

〔井上正鐵翁在島記上〕御用船の出船

斯て此月〇天保十四年五月の末つ方には、遠島の御用船出帆すべしと定まりぬ、偖此頃は、靈岸島川口、永代橋川口、濱御殿川口の三ヶ所に御番所と稱へて、海上諸般の事を監察し、尚又靈岸島、深川萬年橋、永代橋北新堀、深川新田島、濱御殿大手向の五ヶ所に、御船手組屋敷ありて、遠島用船等の事を掌り、毎年交代にて勤めしとぞ、此年は濱御殿組屋敷の當番にて、同屋敷の頭たる夏目勇次郎其掛たり、されば遠島の用船には、小頭一人書役一人鍵役一人外に船頭數名乘込み、罪人を乘せて出船なし、鐵砲洲沖に三日間滯船し、此間に流人の家族親族等より、飲食物を差送るを稱し願ひ出る者には、役人の適宜にて逢はしめ、亦流人より書狀を送る事抔も差免し、此所に滯船三日間を經ぬれば、船を進めて品川沖に風待し、夫より相州浦賀の御番所に船を留め同所にて流人の改めを爲し、及び流人の始末書、卽ち評定所よりの公證を納め、寫しに引換之を以て豫定の島へ、廻船するなりとぞ、

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

寛保四年極追加

一遠島もの、船中にて遭難風破船之後助命候はゞ、人相書を以浦觸いたし、身寄之もの江も相尋可申付事、

（從前々之例）

但遭難風浦々江被吹流候時、其浦々警固之船爲差出置、順風次第出船いたし候、若破船候はゞ、流人は其島江揚置、所之もの共に警固爲致置、注進次第替之島舟仕立差越候事、

（従二前々一之例追加）
一遠島者船中にて病死いたし候時御關所前に候はゞ死骸番人江爲レ致見分、其所江死骸片付候事、

但御關所を越、相果候はゞ其所に相渡し候、島近所にて相果候節は、其島守江死骸相渡候事、

（同追加）
一御目見以上之流人幷女流人ハ船中別圍にて差遣候事、

〔科條類典下 七〕寛保三亥年十月御好御書付之内

御仕置仕形之事

一遠島者船中に而遭難風破船難通節、警固之者流人を指殺死骸取捨候事、

破船難通節、流人を差殺候と申掟如何に候、破船之後流人不慮ニ助命候はゞ、又流罪たるべく候若助命候而行末不相知候共、くるしからざる事に候、存命ニ而國中に難差置と申者に候はゞ、元より遠島は不申付死罪可申付儀候、此掟相止可然哉、

〔御仕置例類集二ノ二十七〕文化十酉年御渡

大坂町奉行伺

一大坂御船手組水主共儀、渡海中流人取逃候一件、

無宿竹松事　三藏
同伊丹の　丑松

右之もの共儀、遠島申付候身分を不顧、船中圍之内致氣鬱候迚、請負人勘五郎宰領水主江内々申立、度々上陸いたし、入湯之上酒等給馴、千吉願行の丑松申爭混雜之内逃去、於途中申合、三藏頭取人家江押入、家内之ものを追散、銀札盜取、或は丑松頭取往來人所持之品奪取候段不届至極に付、兩人共大坂三郷町中引廻之上獄門、

此儀遠島申渡候を受渡海中逃去候上之惡事に候得共、一等重き御仕置は遠島可爲以下旨之御定も有之、今般之犯科死罪以上に相當り候上は、再犯之所を以御仕置重り候筋は有御座間敷、且惡事品々之内、此もの共申合人家江押込候段、重々不届に有之、其節三藏頭取に付、盜可致と徒黨いたし人家江押込候者頭取獄門同類死罪之御定に而三藏は獄門、丑松は死罪、

（朱書評議之通濟）

〔公案比事四 十七〕流人を船圍ひに而取逃候得共、手配等宜、早速捕其外品有之、御咎ゆるみ候水主同心幷船頭等之類、

安永九子年二月

大坂町奉行相伺候

一無宿樽屋之彌助、長柄の十右衞門船圍を拔出、幷牢内ニ而女を殺候一件、御仕置之儀評議

（玄十月十九日）
板倉佐渡守殿御渡

菅沼左京組水主　菰淵彌七
今市六左衞門

右之者共儀、流人宰領仕候上は、諸事入念可申處、船圍錠前かけがねのつぼ開き有之儀ニ不心付、彌助十右衞門抜出候を不存罷在候段、不埒之至御座候得共、早速手配仕、茂八〇船頭江篤と申含め連歸らせ、其段注進仕、其外手當等之儀ニ付而は、無手抜も取計候儀ニ御座候間、百日押込と相伺候處、一座評議之上、三十日押込と申上其通濟、

〔御仕置例類集二ノ二十一〕文化十酉年御渡

大坂町奉行伺

一大坂御船手組水主共儀、渡海中之流人を取逃し候一件、

松平勘助組水主　福田入之助
外一人
同斷　平野逸平

右之もの共儀、流人致宰領候上者、不取締之儀無之様、致警固候儀者勿論之儀ニ候處、出船前勘助より申渡候儀をも等閑ニ相心得、勘五郎申聞候趣に迷、船頭又兵衛さへ如何之旨再應申聞候程之儀ニ候處、千吉願行の丑松、三藏伊丹の丑松平六を入湯之ため、度々湊江揚遣候より事起、既に三藏伊丹の丑松逃去候處、内分ニ而尋出度存、早速注進も不致、殊ニ召仕候もの無之迚、流人之内千吉、喜助を逸平召連尋ニ出候處、又々右兩人逃去、千吉者加左衛門捕候得共、喜助者取逃、猶又流人蘇惠を逸平召連尋ニ差出、於地家室、嘉兵衛を蘇惠不法之打擲致候をも、其儘差置、殊逸平儀者、嘉兵衛より差贈候金子受納致し立歸候上、入之助、嘉左衛門江も不申聞罷在、剩蘇惠寛凌願行の丑松申任せ、逸平附添、又候上之關江相越、料理屋ニ而及遊興候條、一々流人宰領之主意を取失ひ候次第、其上逃去候もの共を捕度存候迚、流人共を召仕候段、不所存之至、輕も御扶持致頂戴候身分ニ而は、別而不届ニ付、逸平者遠島、入之助、嘉左衛門者重追放、

遠島者到配所

此儀相當之例相見不申、〇中略遠物もの船中宰領之身分ニ而、流人共を度々上陸爲致、又者逃去候もの共相尋候迚、流人共召連上陸いたし、猶又喜助を取逃候段、流人ニ馴合候ニも相當、其上平野逸平者嘉兵衛を蘇惠無體ニ及打擲候節、差留も不致、剩同人相贈候不正之金子を以、流人一同及遊興候段、四人を警固致し候役儀之詮更ニ無之御扶持被下候身分、旁重キ不届ニ付逸平者例同様死罪、福田入之助孤淵嘉左衛門者例より輕遠島、

朱書評議之之通濟

〔伊豆海島志上〕凡ソ流人ハ罪定リテ、官庭ヨリ徑ニ往テ船ニ就ク、己ガ家ニ回テ、父母妻子ニ辭訣スルヲ得ズ、衣服貨財齎ユクヲ不得已ニ島エ赴ケバ、故郷ヨリ見屆ケノコトハ赦免ナレドモ、ソノ贈リ物全クハ達シ難ズ、是以流人島ニ在テ、艱難言モ疎也、其始メ至ル時、何レ村ニテモ地ヲ借、小茅屋ヲ造リ住ム、儘モ赦ニ遇テ鄉ニ還ルコトヲ得ル時ハ、ソノ茅屋ヲ地主ヱヤル法也、島人ニ親ミナジムコトハ制禁也ダマ〳〵妻ナド迎ルモ私コトニテ、公邊ノ聞ヲ憚ル、島人亦流人ヲバ甚ダ輕侮スト云、但素ヨリ卑賤ノ業ニ習ヒ、筋骨強キ者ハ漁獵ヲ助、亦山ニ入テ木ヲ伐リ、凍餓ノ患ヒヲ免ルレドモ、富貴人、又農商ニテモ、アラキハタラキノナラザル者、春ハ鹹草、虎杖、藁吾藍等ヲ摘ミ食トシ、夏秋ハエモナレヌ引網ヲ少シヅヽ手傳テ、少シノ魚ヲ乞ヒ、直ニ海水ヲ以テ煮テ飢ニ充ツ故ニ歷々ホド困憊憔悴シテ其天年ヲ終ルコトヲ得ズシテ斃ルト云、ソレ流刑ハ斬罪ヨリ輕キコト一等ト雖、死ニマサル哀ミ有リ、古人云、生別難ニ於死別一、在家ノ父母妻子ヲ棄テ、生涯相見ルノ期ナク、遙カノ風濤ヲ凌ギ、カノ海島ニ赴ク、難忘故鄉ヲバ浮雲ノ空ニ望メヤリ、夫ノ徹書記ガ中々ニナキ魂ナラバトヨミシモコトワリ也、世ニ識ル處ノ、俊寛ガ足ズリシテ泣キ倒レ、近ハ秀家、〇田浮官位ハ從三位權中納言、祿ハ四十七萬四千四百三十石ナリシモ、八丈ニ在リテ、島人嘲哢シナブリニクム、餘リノ艱苦ノ堪ガタサニ、曰、存生ノ内、今一度花房志摩ガ所エ行テ米ノ飯クロフテ死シナバ、生前ノ思ヒデナラント、朝暮悲シミ哀レニ覺エ侍ル、苟讀是志者、島民ノ寒儉苦楚ヲ知リ、流寓人ノ辛苦、欲生シテ生モヤラレヌ境界ヲ想像シテ可也、知之則カリニモ上ノ憲法ヲ不犯、制禁ニ觸ズ、愼身完行ノ心付キノ一助トモナランカ、

〔伊豆七島日記中〕十九日〇寛政八年七月けふはこのしま〇小島の流人みなよびいだすことあるを見るに、おほかたはやせ衰へ、色青ざめて、此世のひとゝも覺えぬばかりにて、其さまいみじくあはれなり、されども下ざまのものはいはじ、其中には尋常ならぬ人も有、又世のおぼえめでたく時めきたりし人も有、又一山一寺を去りたる法師も有、又富有にひとゝ成て、世の憂めをらぬひともありときくに、今は島の人にいやしめられ鹹草に露の命をつなぎて、かなしき星霜をおくるも、若御免の有て一度國に歸る事もやと、それのみを賴て明し暮すなるべし、かゝる憂はづかしめを受る事、是誰があやまちぞや、皆自もとむること有てをかり、さりとも其身のはぢはをのば

ざのびても有なん、先祖親族の名をけがす、其罪は島の海よりもふかゝるべし、

〔井上正鐵翁在島記中〕御在島第一年記

抑三宅島は伊豆七島の一にして、豆海の東南に在る一孤島なり、○中略幕府政を執に及んで、專ら罪人を配流せしむる處となり、流人の中にも一軒の世帶を持つ者は、水汲女と云ふ者を抱へ、之を妻とし定むる例なれども、別住の資力に乏き者は、小屋と稱て、上代に所謂穴居の如き有狀なる所を住居と爲し、晝は山に登り、海に投じて、纔に一日を送り、鎖少の事にも鬪爭毆打を爲し、夜に入れば飮酣賭博暴婬など、常に珍らしからぬ程にて、別世界の趣を爲り、

偖も大人には、同船流人數名の者共と、住馴し都を後に出船なし、其夜は神奈川沖に船繫し玉ひ、○中略二日○天保十四年六月大島波布港に著き、同所に五日迄風待し、六日の夜順風に帆を揚げ、海路の障碍もなく七日の夕暮、配所なる三宅島伊賀谷村の荷取場に著玉ひき、

偖も此伊賀谷村には御陣屋と唱る御船手役所ありて、流人出入の事を監察する所なるが、此日御用船の著しければ、直に右の御陣屋より、掛の人人引取人となりて、流人一同同村内の大林寺と云ふ寺に誘ひたり、されば大人にも此寺に一泊なし玉ひ、翌日は御陣屋へ出頭なし玉ひ、豫て設け有る流人罪名張に、前夜掛の役員が記載し置たる御名前の下へ、書判を爲し玉ふ、其寫し左に、

天保十四卯年六月流罪

三宅島配流人　夏目勇次郎樣御掛

關保右衞門御代官所武州足立郡梅田村　神明神主　井上式部　華押　卯五十四歳

御科御疑ヒニテ

彌大人には、島人の一人と成玉ひしも、未だ御住居とては定らざりしが、是より先牢内にて、大人の御教を受け信仰最も篤かりし、修驗者の惠教流竄せられて此島にあり、御陣屋の留守居を勤めたりしが、役人の計ひにて、大人の御住居を假に此所と定めたりき、○中略初便に細々と示し玉ひき、

初便

出船の節段々厚き御世話、御禮申盡し難く存候、小子事、御別れ申上候後船中無事にて、六月七日、三宅島伊賀谷村へ著船致し、流人頭世話にて其夜は寺へ參り一宿致し、其上流人頭八次郎と申者かたへ參り、三日の內村內に罷在候、流人五十一人と申候者江振舞致し、夫より二三日村流人家持の分へ、世話人同道にて參り、諸入用向勘定致し家持流人へ遣ひ物致し、又家持ず、小屋と申候處へ集り居申候者へ米を遣はし、其上御船手御役人御世話にて、御船手役所留守居致し申候惠教方へ、十四日に同居仕り、尙又昨日神著村と申候處伊賀谷村より三里大難所を通り參り、世話人同道にて、右村方役人流人頭等へ遣者致振舞に遇ひ罷り歸り申候、是にて先一通り相濟申候事に御座候へ共、當年冬に新流人參り候迄は、なんのかのと申、流人又は其外の人々より、無心致し候事に御座候、右の振舞等出來不申候者は持參致し申候諸道具衣類まで、流人頭取上諸勘定致し、其上流人小屋へ下申候事に御座候、右遣ひ物等致し、振舞諸勘定相濟候者へは、借宅又は家等調ひ住居いたさせ候事御座候、其上水汲女と申者を付置申候事御座候、小子事は惠教方へ同居致し居申候間、借宅も不仕候へ共當秋御船手御役人參り候節は、外へ引越申候事故借宅にても致し不申候はでは相成不申候、然る處當村先年燒失にて、借宅無之困り申候、其節に相成候はゞ又々致し方も有之可申と存候、先當時の處惠教方へ同居故安心に御座候、○中略

卯六月廿日

井上式部

御門中御方へ

流人給與

〔武野燭談 五〕いつの事に歟、遠島の者の事人々もの語するに、竹千代君被仰けるは當座にこゝろさるまじき人の後に召返して、科を許さるべき輩を遠き島へ遣はさるゝことならば、彼島に食物なくては定而餓死すべし、不便成事かな、いかなれば扶持せられぬと仰られしを、家光公聞召いと感思召、今迄たれも心付ざる事を家綱が奉公始にせよ、向後遠島の輩はいかにも扶持宛行るべしとて、夫々島々代官に下知せられしとか承りし、されば寛文延寶の間、遠島の者共に農具種物等を賜、死刑に極りたる重科の者をも、多く薩摩がたへ遣されける、

〔明良洪範 二〕寛文七年大火傳馬町牢屋敷類焼の時、石出帯刀罪人共ヲ悉ク召出シ申渡シケルハ、今急ニシテ此所遁ル可ラズ、汝等ヲ焼殺サンモ不便也、牢ヨリ出ス間、心ノ儘ニ立退ベシ、火鎮リテ三日ノ中ニ歸ルベシ、其者共ハ申立テ命ヲ助クベシ、若亦逃隠レ歸ラザル者共、從類ニモ罪ヲ懸ケ、其身ハ何レニ忍ビ居ル共、日本中ヲ尋テ出シテ、重科ニ行フベシ、十一年以前丁酉ノ歳ノ大火ニ、淺草橋ニテ大勢命ヲ失ヒシハ、汝等ガ類ノ牢舍人也、今度ハ帯刀ガ了簡ヲ承リテ、命惜クバ立歸ルベシト申渡シ、追放シケル、牢ノ焼シハ二月六日也、七日ニハ殘ラズ立歸リシ内、三人見エザリシ、是ハ腰ノ立ザル者ナリシ故、焼死タルニヤ、其後其事申立テ、其歸リシ者共皆赦サレ、其中必死ニ當ル者共ハ、薩摩ノ島へ流サル、其者島ニテ農業ヲナシ、飢ニ及バザル様、農具幷ニ種物迄與エラレケル、渾テ流人ニハ扶持ヲ給ハルガ公儀ノ掟也、其掟モ破ラズ、又己ガ詞ヲモ違ヘザリケル、

隠送物流人

〔徳川禁令考 三十四 代官〕正徳四午年

八丈島青ヶ島支配之御代官 江 被仰渡候御書付、

條々

一公儀御用之事、八丈島幷青ヶ島百姓共大切奉存、不作法無之様堅可申付事、

附流人之輩 江 彼親類縁者より書狀幷音物等遣す儀於有之は、御勘定所 江 相達之書狀披見之上可任差圖、又流人之者共より諸親類等 江 書狀於遣之は、彼地に附置候手代遂披見、其趣朱書 手代之儀享保八卯年河原清兵衛支配之節相止申候、是又可爲差圖次第事、

〔地方落穂集 八〕島々善悪の事

一八丈島（中略）

八丈島流人由緒の者より、見届物幷に書狀等送る節は、先達て支配代官役所へ、右の品々書付願書を出し、其上役所よりの差圖を受、右の品尚又役所へ持參す、島掛り役人銘々之をも改め、餘情の品は相返す、狀は開き狀にて口紙を付、折掛にする也、右の書狀は役所の帳面に寫し留幷に見届の品も殘らず書留送物に封印をし、切手書付を添へ、見届物願人へ相渡す、願人之を受取、八丁堀船頭の旅宿へ持參し相渡す、船頭右切手を合せ之を受取、無相違旨書付を出す、之を又役所へ差出し相届る也、島より來る狀も開狀なり、是又役所にて寫し留、其狀を所々へ相届るなり、

〔駿臺雜話 三〕澤橋が母

加賀の前田家より、毎年八丈島浮田家子孫のもとへ、資用のために、小金幾星丹藥幾包、其外瑣細の物件定數ありて、目錄のごとく公けの官吏に付して、八丈が島へ達せしむ、翁〇宝鳩巣加賀にあり、し時、其いはれを故老に問に、澤橋兵大夫といふ者より起りたる事なり、豊臣太閤の時、前田家の先祖大納言利家の女を、太閤養女とし、浮田秀家に嫁す、是秀家の夫人なり、然るに慶長年中關原師散じて後、秀家は石田方の渠魁たれば、死罪に處せらるべかりしを、島津家の乞哀によりて、死

一等を減じて、秀家幷に其子八郎、八丈が島へ竄逐せらる、八郎に乳母ありけるに、是はとくに逃去ぬ、其介の女房（俗にさしといふ）八郎が幼少にして、乳母に離れて、遙々島に赴くを、ふかく泣悲しみ、徒跣にて官廳に詣り、あきりに八郎につれて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず、女房此上はなにの爲にいきてあらむとて、すでに自殺せんとするを、官吏おさへて、さて議しけるは、此女房を目前にて見ごろしなば、後に上にきこゑん時、不便におぼしめして、など窺ざりしと、もし御とがめもありなんか、只窺ひ奉りて、御旨にまかするに、あくはなしとて、窺ひければ、女なればくるしかるまじ、島へつかはし候へと、命下りしかば、女房限なくよろこびて、秀家父子につれて島へ赴きけり、其時三歳になりし子を抱き浮田家の夫人のもとへ來て、自は八郎御曹子の御事、偏りいたはしく候へば、御供申候て島へ參り候、此御奉公を忘れおはしまさずは、此子を御側の人へ仰付られ御そだてさせ、人になして給り候へといひすて、さりぬ。（略）中　其子の父はいかなる者にかありけん、あらず、氏は澤橋にてありける。（略）中　夫人在世の時、澤橋氏が子成長して、仕べき程になりしかば、前田家へ召仕はるゝやうにふかく付託せられしかば、彼家にて所領給り、澤橋兵大夫何がしと名乘けるが、たゞ明暮母の事をのみ思ひて涙をおとしけり、いく程なく遁世の願あるよしにて國をさり、形をかへて僧となり、いづかたにありとも行ゑ知れざりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入せらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げけるを、御供の中より抑へけれども、きかざりける程に、討てすてんとしけるを、御輿の內より御覽ありて、沙門を聊爾なる事いたし候な、訴狀うけ取候て御跡より召連て參り候へと、御直に上意あり、さてもと前田肥前守家來のよし申によりて前田大和守、御上洛の御供にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ還御ありしかば、大和守召具して江戸へ下りぬ、其訴狀の趣は、某三歳の時、母にて候もの、主家の爲に、八丈が島へ罷越て候、母を島にさし置、其子として跡に殘り居候ては、いきてあるべうも覺へず候、御慈悲に母と一所に島へつかはされ下され候へとの事になんありける、官吏上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寬喩ありけれども、御うけ合申さず、所詮思ひ切たる容色なり、上にも其志を不便におぼしめさるゝにや、かさねて仰出さるゝは、島へつかはさるゝ事は、御大法におゐてならせられぬ事なり、島より母をめし返さるべし、島より歸候やうに、文にて申こし候へとありければ、兵大夫申やう、ありがたき御事に候、たとひ申こし候ても、母中々承引仕まじく候、されども仰出されにて候まゝ、申こし候はんとて、文かきてつかはしけるが、兵大夫申ごとく、母島にて其ふみを見て、大きに腹だち、我汝が三歳の時、御主の先途を見とゞけんとて、上へ奉願て、一度こゝへ來りしものが、今汝を見んとて、御主をすてふたゝび歸るべきやうやある、いと口惜き事を聞ものかな、かさねて申こし候はゞ、返答にも及まじとぞいひこしける、官吏兵大夫を公廳へめしよせ、是程に仰出されてかなはねば、上にもなさるべきやうなし、其かはりには、外に願ひ奉りたき事あらば、御かなへ下さるべきよしいひ渡しければ、兵大夫かしこまりて、卑賤の身として、上をはゞかり奉らず所存を申上候に重々御取あげありて、是程にまで仰出され候に、此上に私の所存をたて申べきにも候はず、たゞしひとつ願ひ奉り度事こそ候へ、前田家は浮田と由緒ある事にて候へば、彼家より、毎歳助成の金幷に入用のもの承り候て、永代島へさしこし候やうに公命下り候はゞ、限なき御恩澤にて候べし、さからば母もよろこび申すにてあるべく候、某母への孝行このひとつにて候、外に願ひ奉るべき事はなく候よし申上ければ、其事下りて朝議ありけるに、是はくるしかるまじき事なり、されど金も員數多くはなりがたし、其外の物も、品によりてならぬものもあるべし、所詮衆議して、其員數其物品をきはめて、前田家へ申渡し候やうにとの事にて、今に至るまで、毎歳加賀の家より、定めのごとくおたゝめて官へ付し、官にて其物件を點檢し、島へ送り屆くる事

になりたり、

〔一話一言十〕松平加賀守家より八丈島浮田一類へ差遣候書付

寛政四子年閏二月、御老中鳥居丹波守殿へ出候、松平加賀守より書付之覺、

八丈島浮田一類共へ差遣候覺書寫

覺

宇喜田孫助養子
孫九郎方へ

一貳拾四　金壹歩
一貳匹　絹染物
　但小袖表裏貳ッ分
一五ッ　染帷子〇中略
以上

閏二月

右書付鳥居丹州家來より借寫し候由、村岡孫右衞門より傳寫、且今年寛政四子年より左之通、合力米遣し候由願書並附札寫、

覺

一七拾俵　白米　但四斗入

右於八丈島浮田一類共より、合力米之儀申越候に付、前々遣來候通、彼島御代官江川太郎左衞門殿賴差遣申度存候、以上、

閏二月　松平加賀守

附札

聽流人子到配所

可爲勝手次第候

〔有德院殿御實紀附錄八〕享保の頃、〇略註小十人組伊奈友之助忠眞といへるあり、その父兵右衞門忠易甘二日たりしとき、贓罪にて元祿十年十一月三宅島に流されしに、友之助も父が罪に坐して、追放たるべかりしに、父に從ひ彼島に赴き、膝下にありて養はん事を願ひしかば、御ゆるしあり、配所にあること凡そ三年、父うせしにより、かへり來りしに、その孝心の深きを賞せられて、新に百五十俵を賜り、御家人に召加へられ、ほどなく小十人組にいれられ、そののち組頭にのぼり、七十まで怠らず勤仕せり、

○按ズルニ、流人ノ子ノ配所ニ到ルヲ聽シ、外ニ、家人ノ配所ニ到ルヲ聽シ、事アリ、聽送物流人ノ條ニ引ケル浮田秀家ノ家人ノ事是ナリ、今ハ頗シク分載セズ、

〔天保集成絲綸錄百〕天明八申年九月

評定所一座江

元御代官青木楠五郎悴龜之助儀、中追放被仰付、幼年ニ付十五歳迄親類江預ケニ相成候處、今度遠島之父楠五郎ニ附添罷越、介抱いたし度旨願候ニ付而、何も江評議之儀申達候處、遠島ハ死刑ニ續キ重キ儀故、父子之情愛も難立次第、則御仕置ニ而願之通ニハ難成筋ニ可有之哉との儀實ニ不等閑評議之趣意ニ有之候、且又既ニ先例も有之事ニ候得バ、孝心之故ヲ以、願之通可被仰付哉と之儀も、是又無餘義趣ニ有之候、一體子之咎ハ其身之罪ニも無之候間孝心ニ被免、願之通相濟候儀、子之方ニ取候而ハ子細も無之儀孝心之所ハ被免度筋ニ候得共、其身之罪に而流罪遠島之父ニ取候而ハ、介抱を差添ニ相當如何敷筋ニ有之候、扨又子之願ニさへ候得ば、相濟候定例之樣ニ相心得候而者、往々ハ孝子之實否も却而不相分樣ニ成行、或ハ罪父之心底、最初より同居成產之儀をはかり候はゝ、自然事之ゆるみに相成間敷にも無之ニ付、不容易儀ニ候間、向後願候迚

も、定例相濟候とには無之、其時々得と糺之上、始末次第たるべき事ニ候、尤願之通、附添と申付候而者、罪父之爲介抱を添候ニ相當り、又遠島と申いづれ不正候間、右兩樣之名目は、以來不相唱樣ニ可被致候、依之今度龜之助親類共江申渡趣、左之通ニ候、

遠島流罪之父ニ附添罷越度旨相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右之島江相越候儀ハ、御構無之候、尤父と同船同居勝手次第可致候、追而出島之儀、是又勝手次第可致候、

一龜之助儀島住居之內、彌孝心ニ有之候はゞ、追而出島之上ハ、中追放之咎ハ、品ニより被宥候儀も可有之哉、其次第ニより、其節猶評議可被在之事ニ候、出島之儀、勝手次第たるべきとの趣ハ、島支配之向江も、兼而達置候樣可被致候、

但以來百姓町人も、是又其始末次第糺之上、申渡方ハ前書之通たるべく候、

右之趣可被相心得候

九月

町奉行

池田筑後守掛

松平伊豆守殿御差圖

〔御仕置例類集三ノ十三〕寛政四子年九月

一無宿藤次郎遠島之父ニ附添度旨、駈込願致し候一件、

無宿　藤次郎

右之もの儀、中追放ニ相成候以後、惡事は無御座候得共、御構場所江立入候ニ付、一等重く可申哉と相考候處、遠島之父江附添度存込、讃岐國ゟ立歸り、直ニ御役所江駈込候樣ニ御座候間、御構場所を徘徊致し、又者止宿等仕候と者譯茂違、其上御構場所立去候而者相願呉候好身之ものも有御座間敷、旁以無餘儀筋と奉存候、勿論先達而輕き盜仕候得ごも、是以御仕置も相濟、左候得者全無罪之ものに御座候間、遠島之父に附添度旨、相願候儀ニ付、去ル申年（天明八年）御書付之趣幷申年

以後御差圖相濟候例も御座候間、右藤次郎儀も、父に附添罷越度旨相願候得共、願之通ニ者難成、右之島江相越候儀者、御構無之、尤父ト同船同居勝手次第、追而出島之儀も、是又勝手次第可仕旨申渡、

〔御仕置例類集一ノ二〕文化九申年御渡

御先手能勢市十郎申上候

一根岸九郎兵衞元組同心中山勇藏悴銀之助儀、父之生涯爲見届、島江被遣候樣相願候儀ニ付評議、

書面評議仕申上候通、能勢市十郎江被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

評定所一座

申四月廿二日

去ル十日御渡被成候能勢市十郎申上候、根岸九郎兵衞元組同心中山勇藏遠島被仰付候處、同人悴銀之助儀、父相越候島江罷越、生涯見届度旨相願候儀評議仕候趣左之通ニ御座候、

能勢市十郎組同心　谷　鄕助

根岸九郎兵衞元組同心弟中山勇藏悴　銕　中山銀之助

右銀之助父勇藏儀、當二月遠島被仰付候ニ付、父之科ニ銀之助儀中追放被仰付、幼年ニ付、十五歳迄谷鄕助江御預被仰付候、然ル處、銀之助儀父罷越候島江罷越、生涯見届度旨申上候、通被仰付候ニ付、下候樣仕度段、鄕助奉願候旨申上候、

此儀享和二戌年評議ニ御下被成候、本多兵庫小普請支配勤役之節申上候、元飛驒郡代大原龜五郎悴大原陶太郎儀、依父之科中追放被仰付、幼年ニ付親類共江御預之旨被仰渡、本多兵庫支配世話取扱、松野長十郎方江引取置候處、父龜五郎遠島被仰付候ニ付、八丈島江罷越、父之先途見届申度旨相願候間、陶太郎願之通被仰付被下候樣仕度段、長十郎奉願候旨申上、評議之上陶太郎

儀、父之先途爲見届、父龜五郎遠島被仰付候八丈島江被遣候樣相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右島江罷越候儀ハ、御構無之候ハヾ、尤父と同居勝手次第可致旨被仰渡可然哉ニ申上、其通本多兵庫江被仰渡候例ニ見合、今般之銀之助も、願之趣意ハ同樣ニ付、父相越し候島江罷越、父之生涯見届度旨相願候得共、願之通ニハ難成事ニ候、併右島江罷越候儀ハ、御構無之候、尤父と同船同居勝手次第可致、追而出島之儀、是又勝手次第可致旨申渡候樣、能勢市十郎江被仰渡可然哉ニ奉存候、

申四月

〔御仕置例類集一ノ一〕文政五午年御渡

向井將監　梶助右衞門　伺

一遠島之女江當歲之小兒附添被差遣候儀ニ付評議

去ル二日御渡被成候、向井將監梶助右衞門申上候書付一覽仕候處、此度島々江被差遣候遠島もの之內、女壹人有之、右女江當歲之男子附添被差遣候旨、尙井伊賀守申聞、右男子船中ニ而病死いたし候節之儀、御關所前ニ候ハヾ、男子ハ召連罷歸、御關所相越候後ニ候ハヾ、其所之名主寺院より證文取之候上取置、右證文を御證文ニ引合、島守江相渡、近島ニ而相果候ハヾ、死骸島守江相渡、且右女相果候節御關所前ニ候ハヾ、男子ハ召連罷歸、御關所之もの、ニ爲致見分取置、御番所相越相果候ハヾ、其島方江引渡可申哉、又ハ召連可罷歸哉、其外船中ニ而女之乳上り候歟、前書之通女相果候節ハ乳之手當無御座養育も出來兼候趣を以取計方相伺申候、

此儀船中ニ而女相果候歟、又ハ乳上り候節、小兒之養育差支候段ハ無餘儀次第ニ候得共、右之故を以、別段乳母等附添被差遣候儀も是又差支候儀ニ付、御關所內外ニ不拘若女重體ニも有之、船中ニ而相果候儀難計候歟、又ハ病死いたし候ハヾ、小兒ハ其所江預ケ置、其旨申上、島近ニ而國地最寄ニ無之候ハヾ、島方江着船之上引渡、其段も申上、尤小兒養育之儀ハ、勘辨之上如何樣ニも手當いたし取計、其外之儀ハ、都而伺之通取計可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午九月

書面之男子母江附島方江差遣ニ不及段、向井將監梶助右衞門江ハ私共ゟ可相達、其外之儀ハ評議仕申上候通可取計旨被仰聞承知仕候、

午十月八日

評定所一座

向井將監梶助右衞門相伺候、遠島之女江附添被差遣候當歲之男子、船中ニ而病死致候節、幷女相果候歟、又ハ乳上り候節之取計方、評議仕申上候處、評議之趣聢と不致候間、今一應勘辨いたし可申上旨被仰聞候、

此儀再應先例相糺候處、寬政二戌年、町奉行池田筑後守懸り御書院番駒木根大內記組、一柳勘兵衞妻みち儀、妊娠ニ而同六月揚屋敷江入、同八月出產、女子出生致し、右女子ハ同姓一柳兵部少輔家來、田村藤七江引渡、同十一月遠島申渡、翌亥四月八丈島江被差遣候儀ハ有之候得共、右之外遠島被仰付候女江、出生之小兒等附添島方江被差遣候儀ハ勿論、妊娠之內遠島被仰付候先例無之、乍併今般之女ハ、無宿ニ而出生之小兒可引渡身寄無之故を以、乳有之候母之手を引離候も如何に付、右女ニ養育爲致候方可然、既ニ附添被差遣候積御差圖も相濟候儀ニ付、旁國地を出帆いたし候後、女相果候節ハ、勘辨之上、小兒ハ如何樣ニも手當いたし、島方江召連候樣可取計旨被仰渡可然哉之段申上候得共、猶又再應評議仕候處、國地を離候後、女相果候ハヾ、小兒養育方ニ差支可申間捨子之取計ニ准じ、望人有之候ハヾ、紛之上差遣し、若望人無之候ハヾ、溜預ケ之格を以、非人共江養育申付置候樣、町奉行江被仰渡、右小兒母江附添島方江被差遣候儀ハ、不被及御沙汰方可然哉ニ奉存候、

午十月
御書取

書面之男子母江附島方江差遣ニ不及段、向井將監、梶助右衛門江申渡候間、其段長井五右衛門江ハ何もより相達、其外之儀ハ許議いたし被申聞候通可被取計候事、

遠島代人

〔歉歲餘錄八〕寛政四年九月、松平豐後守殿家老某みやけ島へ遠流仰付られぬ、此人三千石知行してありしが、此度その子供一倍の加增あり、元知行ともに六千石に成けるとぞ、是は當五月中、豐後守殿草荷にて鷹狩ありける、御裁許此節相濟、豐後守殿御代りに遠流仰付られける故也、是によりて公儀御鳥見兩人は死刑に仰付られぬるほどの事ゆゑ、さつまの家老も遠流に配せられたる也、此度右家老遠島に赴しに付、召仕の侍も十五人供致し候由、島へ送り候荷物もおびたゞしき事之由、めづらしき遠流人也といへり、

○按ズルニ、遠島ニ處セラレタル者、代人ヲ遣ハシ、且ツ其代人ニ從者ヲ付シ、多クノ物品ヲ送ル等ハ是皆法外ノ事ナリ、

朝廷遠島例

〔武德大成記二十二〕慶長十三年、花山少將忠長、飛鳥井少將雅賢、猪熊侍從、及兼保備前守、〇備前守、一本作備後守、下同、等、弱輩ニテ容貌ウルハシカリケルニ、ヒソカニ後宮ノ宮女ヲ伴ヒ出テ、遊會婬飲シケルニ、事アラハレテ、備前守ヲ捕ヘ拷問シケルニ、〇ケルニ、一本作ケレバ、白狀ス、帝〇後陽成怒リ給テ、所司代板倉伊賀守勝重ニ勅アリテ、刑ヲ加ヘシム、勝重此事ヲ駿府ヘ申上ケレバ、神君聞召、勝重ヲ以テ諫シメ給ケルハ、朝家ノ內亂古ヨリ多ク記シオケル、然所ニ君仁愛ノ德ヲ以テユルシ宥メ玉ハヾ、後ノ人マデモ恥ル心アルベシト仰遣サル、勝重卽奏聞シケレバ、帝聞召納玉ヒ、罪一等ヲ減ジテ、三宮女ヲ伊豆ノ大島幷ニ八丈島ヘ流シ、忠長ヲ津輕ヘザンシ、雅賢ヲ隱岐ノ島ヘ謫シ、松木大炊兩侍從ヲ硫黃ガ島ヘ流サル、猪熊ハ濫行ノ最ナリ、兼保ハ宮門ヲ掌ル者ナレバ、罪コトニ重ク、帝甚ダ憎ミ玉フ輩ナリケレバ、死罪ニ處セラル、

〔創業記〕慶長十四年八月、去年ヨリ內裏御近習之女房衆廣橋局、唐橋局、以上五人、公家ニハ猪熊、烏丸、飛鳥井兄弟、大炊御門、花山院、德大寺、松木、幷齒醫師兼安ガ男備後ト云者等不形儀ニ付、主上逆鱗不斜、駿府ヘ以勅使、右ノ公家衆局衆ヲ可被斬罪由被仰下、依之板倉伊賀守ヲ駿府ヘ召下、子細ヲ聞給、猪熊罪科ニ恐レ被闕落、九月、公家衆亂行隨一ノ猪熊、於九州押取、籠輿ニ乘被爲上、九月十八日京着、十月十日、禁中五人局、伊豆ノ島ヘ被流、去二日出京、其體何モ髮ヲ剃、下女二人相添、五人一所ニ流罪也、公家衆流罪之事、花山院ハ、夷ガ島、飛鳥井少將ハ隱岐島、松木ト大炊侍從ハ、薩摩硫黃島、飛鳥井難波ハ、先駿河ヘ被召寄、烏丸、德大寺ハ、御赦免也、猪熊幷兼安備後ハ、京都ニテ殺戮也、十一月八日、公家流罪衆今日出京、烏丸ト飛鳥井二番目ノ息難波侍從ハ、伊豆國ヘ被流、其外ハ前ノ書付ノ如シ、〇又見慶長年錄

○按ズルニ、此時ノ謫地諸書異同アレバ、併記シテ參照トス、

〔幸庵夜話〕八宮樣良純、陽光院第八皇子、知恩院門主後落墮、不行跡故、甲州江流させ給ふ、是は遊女町江毎々御かよひ、遊女も一人も不殘逢給ひ、御氣ニ入たるものニハ御傳授候、大切成古筆の歌書等不殘御とらせ候故、古筆の歌書于今遊女町ニ有之由ニ候、毎ニ御越候而も御長坐被成事なく、宵ニ御越、五ツ過ニ御皈被成候由、此段凡人とは事替り申よし、

〔皇胤紹運錄〕後陽成院――知恩院良純法親王〇中略

慶長九年三月廿九日誕生、稱八宮、〇中略寛永廿年十一月十一日、遷於甲州天目山、四十萬治二年六月廿二日、歸洛、

〔基量卿記〕延寶九年五月一日、傳聞大覺寺宮〇性眞法親王御弟子之義、一宮當今第一宮、(靈元皇子寛淸親王)中納言典侍局腹也、小倉大納言實起卿息女也、可被進由被仰出、彼門主畏存候由去二十六日參內被申御禮處、一宮御出家之義非御本

意、勿論繼體之義雖無御所存、法中之義御難義之由達而被辭申云々、依之主上逆鱗以外云々、一宮御十一歳也、此御願望之義定而小倉大納言被申上歟之由風聞也、未落居如何云々、　九月十七日、入夜傳聞、昨日今日兩三度、於阿野黃門〇季信被遣小倉亭、一宮可有御參內由、度々雖被仰出無御參之間、人々參入取出奉了云々、近比之騷動也、菊亭右大將〇公規三條亞相〇實通甘露寺黃門〇方長等參、其外取次三人鳥飼侍二十人、仕丁二十人、以上人數六十人餘、石川信乃守騎馬ニ而爲御迎手者五十人計參云々、則飛鳥井中將〇雅豐舟橋屋敷へ被奉入、警固武士警衞云々、如何、此後之義恐入事也、

十八日、今日阿野黃門父子被仰出閉門、昨夜義依御使不調法也小倉父子〇實起、公連藪父子〇嗣孝、嗣章中園父子〇季定、季親竹淵柳津、高岡〇季起等、一宮依外戚各蟄居云々、　十月二十三日、御隨身藤原元信來談曰、今朝之間、武邊騷動、是小倉亞相、同相公、竹淵刑部大輔等流罪之義云々、誠不便之義也、日比依一宮事時宜不快、勅勘之間令及此義云々、猶委細之義可尋知事也、後聞小倉父子三人遠流於佐渡國、三人一所云々、

〔基量卿記〕貞享四年正月十四日、仰〇靈元帝云、中院前大納言〇通茂義、先年七年以前〇延寶九年小倉實起卿左遷之刻、中院大納言參御前直ニ言上之趣、今度小倉左遷之義甚以不可然、惣而上ニハ御年弱諸事御短慮ニ御物荒、傳奏花山院大納言〇定誠も氣短物荒、諸司代戶田山城守も氣短物荒、大樹〇綱吉も氣短ニ物荒候故如此義出來候、以後かやうニ候ては如何樣之義出來可申哉、宜敷義ハ有間敷、諸事無覺束候由言上以外腹立也、右之所存春宮御爲不忠候者之間、追付御讓位其儘被指置、件亞相切々出仕も如何可有之哉、各所存可言上之旨仰也、右之節愛宕相公〇通福庭田黃門〇重條等、中院由緒有之間彌以可被存其旨事也、申分聊雖不甘心不及他事也、各所存中院申分以外之義也、とかく急度被憚御沙汰可然由言上了、先此分ニ而各退出了、

〔百一錄〕天和三年三月廿七日、相樂治部大輔被處流刑配隱岐島、當春竹內武兵衞等依博弈殺害人、

幕府遠島例

其張本之聞有之、

〔西行雜錄〕關原ノ後、宇喜多殿島津家ヲ賴、薩摩之牛根櫻島ノ隣ト云所ニ僑居アリ、剃髮シテ休復ト云、後神君之仰ニテ、宇喜多殿駿州へ被出候トノ事ニテ、右之柱神祇、休復ヲツレテ上リ候也、其後八丈へ流罪、

〔卜齋記〕下慶長七年に、島津中將〇忠恒後改名家久、時爲少將、伏見へ被致參上候、合戰御勝翌年に可致參上候へ共、中將は龍伯〇義久の爲には甥にて、兵庫頭〇義弘實子なり、龍伯に無實子して養子也、兵庫頭關ヶ原合戰御敵成ゆへに、申分被仕に付て遲參也、御暇被下候時、御訴訟御座候、叶候樣にと、一向奉賴と老中へ懇望被申候、子細を被尋候時、備前中納言殿〇浮田秀家吾等國へ拘置申候、命を御助被下候へと御侘言被申上候、達上聞被爲上候へとの御意にて、無程中納言殿御上リ、本多上野介に被仰付、駿河國久能へ遣候、久能には山本帶刀と申て、古老の者被爲置候、翌年に中納言殿を伊豆國下田近き所へ被遣候、便次第八丈島へ可被遣爲なり、〇中略中納言殿一人は、進藤三右衞門計ひて、薩摩へ下し申事に候へ共、御息二人は何として御下り候哉、子細を承り候はゞ慥に知可申候、但家康公御仕置は、大ひに御座候て、せわしなく細成事はなし、中納言殿は正保年中迄は存命の由嫡子は死去と八丈より來候者の語り候、

〔前田文書〕態呈一翰候、備前前之中納言、不意此國へ被走入候間、不及了簡抱置候而、公儀へ致披露、種々御侘雖申候、於手前者事不濟候間、拋一命爲御侘被罷上候、一旦之罪者雖無遁候、哀以廣大之御慈悲、遠島遠國之端へ成共、命計被助置候樣に、御前之御償偏所仰候、去春此旨爲可賴存、用愚書候處、彼使不慮に令遠行候故、相達候とも不存候、彼方へ連々何之子細も無御座候間、爲拙者雖非所氣遣申候、一度被相賴候條、於御許容者可爲面目候、本多上州、山口勘兵衞尉殿へも申入候間、被仰談、御入魂此時候、恐惶謹言、

八月〇慶長十八年廿日

兌長老〇豐光寺承兌

衣鉢閣下

薩摩少將

忠恒花押

〔奥羽永慶軍記三十六〕小野寺遠江守義道流罪幷先祖事

羽陽山北ノ領主小野寺遠江守義道ハ、會津攻ノ加勢トシテ、名代ニ人數ヲ差添、最上山形ニ遣ストイヘドモ、イカナル思慮ヤ有ケン、山北ニ引返シ、其後ハ最上ヘモ關ケ原ヘモ曾テ參ル事ナシ、此事最上義光言上ス、次ニ關ケ原ヘ馳着、忠ヲ盡セシ戸澤治部大輔ガ妻ヲ誅セントセシ事、其子戸澤右京言上ス、次ニ秋田城介實季モ關ケ原ニ馳參陣ニ於テハ留守ノ間ヲ攻トラントセシト、秋田ヘ聞ヘケレバ、城介關ケ原ヘ上ル事ヲ得ズ、名代トシテ湊源内ヲ上セ、右ノ次第ヲ申上ル内府公〇德川家康聞シ召サレ、扨ハ山北遠江守モ、石田ニ一味セシカト御疑心ヲ蒙リヌ、カヽル事ハ皆虚説ナリシト、後日ニ諸人沙汰シ侍レドモ、小野寺ガ運ノ盡ル所ニヤ、事實ニ極リテ、義道兄弟五人石見國ニ流罪、其國ノ住人坂崎出羽守ニゾ預ラル、

〔家忠日記增補〕慶長十五年閏二月二日堀越後守忠俊ガ家臣堀丹後守直寄ト同姓盛物兄弟權ヲ爭テ訴論ニ及テ、江戸ニ來テ是ヲ訟ル、〇中略大神君此訴ヲ聞召給フ、〇中略是忠俊ガ咎ナル由ヲ命有テ、忠俊ハ岩城ニ配流セラレ、盛物ハ最上ニ謫セラル、〇又見慶元記二

〔藩翰譜四大久保忠隣〕同〇慶長十九年正月廿四日、佐渡守正信父子等、忠隣に配流の奉書を下す、兼てより板倉内膳正重昌、父に久しく對面に及ねば、身の暇賜て上洛すと披露して、忠隣に先だつて都に上り、去年十二月十四日に江戸を立つ父伊賀守勝重に仰を傳ふ、勝重既に其期に及びしかば、相模守〇忠隣が旅館に行向ふ、忠隣折ふし象戲に對し居たりしが、勝重を坐に請じ、忠隣配流の御使たるよし、さきに承り訖んぬ、流人の身となつて後、かゝも戲あるべしとも覺えず、待ち玉へ、事終て仰せ承るべしとて、靜に事を終て後、さらばとて謹て仰を承り、〇下略

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年七月廿六日、讃岐國高松城主生駒壹岐守高俊、封地十七万千八百石餘を收公せられ、長子右衞門高法と共に、出羽の國由利矢島に配流せられ、かしこにて賄料一万石を賜はる、これも家政みだりにして藩士爭論するによりてなり、

〔憲教類典二ノ三國替所替〕年號月日不知

生駒壹岐守領國被召上候付、被仰渡之覺、

一生駒壹岐守事、是又御穿鑿被成候處に、家中仕置惡敷仕候ニ付、讃岐國被召上爲堪忍分、羽州由利に於て、一万石被下候事、〇略下

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年七月廿六日、播磨國山崎領主松平石見守輝澄封地六万八千石收公せられ、松平相模守光仲にあづけられ、因幡國鹿野に配流せられ、賄料として一万石を給ふ、こはその家司伊木伊織が、新任の家司小河四郎右衞門が權を妬み、あまさへ其藩を立退き、藩士等騷擾せしかば、輝澄が國政撿束なきをとがめられてなり、

〔御仕置裁許帳八〕似セ狀を以語仕者之類幷主人之名を語道中ゟ自分之狀を時付にて遣す者、

寛文九年酉五月十日

壹人市郎兵衞　是は無宿新石町彦右衞門店釘屋七兵衞と申者、水野對馬守用所承候處、此者當四日ゟ四五度右之七兵衞方江對馬守殿家來田口吉右衞門謀書を致持參、代銀百六十目餘之釘を語り取候由、捕江來り七兵衞訴訟申ニ付籠舍、

右之者、酉七月廿三日五島江流罪、

〔御仕置裁許帳〕謀書謀判仕者之類

寛文九年酉五月廿一日

壹人五郎兵衛　是は四ヶ市町七兵衛店佐次兵衛手代、此者主人之金銀横取仕候由訴訟申候間、當正月廿五日手鎖に而預ヶ置候處、手代仕候時分、主人之謀判仕候而、金銀を語り取候由承出し、訴訟申に付籠舍、

右之者、戌四月朔日薩摩江流罪、

〔御仕置裁許帳〕道中上下之飛脚方々ゟ誂之金子を紛失仕者

寛文十二年子九月四日

壹人四郎兵衛　是は上下之者南傳馬町三丁目彌市出居衆大坂江遣候金子、方々取集百三拾兩餘、宿彌市方ゟ此者共に、當月五日大坂江荷物に入爲登申候處、金子紛失仕候由彌市訴申に付、穿鑿之内、訴定所ゟ籠舍、

右之者、天和二年戌十二月廿八日、籠屋類焼に付預ヶ、天和三年亥十二月、隠岐島江流罪、

〔近世江都著聞集十一〕多賀長湖百人女艸を畫きし御咎にて遠流幷後年英一蝶となるの話、

天和貞享元祿の比、狩野永眞が弟子多賀長湖と云者有て、畫の道に執心あつて、能精心を込て、上手の名を得たり、〇略中此者元祿の始公廳の御咎有て、一度遠流せられたり、此事の眞實を聞に、元祿の比の大君は、常憲院殿御治世、東照宮五代の君にまし〳〵て、好色にふけらし玉ひ、あまたの美女を寵愛し玉ひけり、〇略中其比おでんさまと云は、御寵愛第一の女艸たり、〇略中おでんの方は、小鼓の上手にて、平生御側にて鼓の一手を打玉へば、公は御諷うたはせ玉ひ、又或時は吹上御庭泉水に御舟を浮め、公自棹し給へば、おでんの方は舟の中に坐し、綾羅の袂をひるがへし、小鼓取て打玉ふは、蛾眉の山の端に三ヶ月の出る有様、ふやうのまなじり丹花の唇ひとへに西施もはじらひ楊貴妃の吹笛も、數ならぬ氣色におもはれけり、されば江口の君の川道遙と云を諷せ玉へば、一挺の鼓の音迦陵びんがの聲よりもうるはしく、天人もあまくだるかとうたがはれたり、此御遊度々なりけるゆへ貴賤ともに去らぬ人もなかりけり、されば繪師多賀長湖は百人女艸と云繪を畫て、世に流布しけり、其繪は貴人高位の女艸より賤の女迄其比名高き麗しき女の姿を寫しけり、其中におでんの方船中に鼓打てまします姿繪、公の棹さし玉ふありさまゝでさもうつくしく畫きたりけり、此事誰有て公儀へ訴へしか、奉行頭人の御耳へ入て、渠を忽ち召捕れ牢舍被仰付、終に遠島に被仰付けり、されども此事にて御咎は、表向いかゞとや思召けん、多賀長湖此御代の御制禁に、殺生を好、小鳥を取、魚をつり候科あつて如斯との御書付其外町方へ被仰渡けり、さて長湖は、配所へ繪の具持參仕度と願ければ、則御免被下けり、斯て配所の月に詠め、八十島かけてこぎ出んと云し有樣も、自然に目にさへぎり、眼前を繪本として積年の功有て、誠に畫工の妙を得たり、〇略中後年章廟の御代、歸朝免許被仰付けり、

〔慕府時代屆申渡抄錄〕元祿十六未年四月廿七日

一淺野內匠頭家來

右四人之もの共大島へ

小笠原壹大夫殿へ御口上

流人四人書付之通差越申候、御請取可被成候趣、幷手鎖二ッ遣申候以上、

出役中番　植竹傳大夫

村松喜兵衛次男　村松政右衛門　廿三歳

間瀬久大夫次男　間瀬定八　廿歳

吉田忠左衛門次男　吉田傳内　廿五歳

中村勘助忰　中村傳三郎　十五歳

〔翁草 四〕繪島遠流之事

月光院殿之御年寄繪島と申女中は、小普請組白井平右衞門妹にて、若年より御奉公に罷出段々御取立にて重き役儀仰付られ、時めきけるが、其行ひ正しからず、御使又は宿下りの折からは、芝居遊所等へ立寄、亂行擧てかぞへがたし、正德四甲午年正月十二日、上野增上寺へ參詣の先より、直ぐに木挽町の狂言芝居へ行候事相聞え、御吟味之處段々不行跡露顯し、其懸り合者一々御穿儀之上、同三月五日、御仕置被仰付所左の如し、

三好平兵衞
双方同心四人

但世說には芝居役者を櫃之類へ入レ忍々に御城へ呼たる抔色々の說も有れども、御吟味之表如此なれば、其餘の說は捨之べし、

遠流

繪島

一繪島事段々御取立にて、重き御奉公をも相勤、多くの女中の上に立られ候身にて、內々にて而者其行ひ正しからず、御使に出候折々、又ハ宿下り候度々、人の貴賤を撰ばず、能からぬ者共に相近付、さしたる所緣も無き家々に泊り明し、中にも狂言の座の者共と年頃馴親み、其身の行ひ如此なる而已に非、傍輩の女中迄勸め道びき遊びあるき候事ども、其罪重々ニ候と雖、猶も御慈悲を以、命を助け置れ、永く遠流に行れ候者也、

但遠流の格を以、信州高遠三万三千石之領主內藤駿河守清長へ御預ケ、木綿衣類、一汁一菜にて可差置段被仰渡、

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政五丑年八月

松平伊豆守殿御差圖

一表御臺所人清水龜之助追放者差置候一件、

町奉行
池田筑後守掛

右之もの儀、去子七月、元知人鐵五郎罷越身分之義相賴先達而追放ニ相成候儀承候得共、手前ニ差置、其上怪敷品と乍存世話致、盜物之衣類賣拂遣、既此もの方ニ罷在候內も、鐵五郎儀所々江盜ニ入候儀をも不存罷在候段輕くも御扶持被下候身分ニ有之間敷不届ニ付遠島、

御臺所頭支配表御臺所人　清水龜之助

右重追放ニ相成候ものを乍存差置候はゞ、町人百姓ニ候はゞ中追放相當可申處、此ものハ御扶持人ニ而殊ニ右之不埒而已ニ無之、盜物と乍存致世話候不埒も御座候處、差當相當之例も相見不申、安永七戌年八月、牧野大隅守伺之上申付候、百人組內藤十次郎組同心、山下惣左衞門祖父團七義、無宿初次郎先達而知ル人ニ相成致中絕暫不出合候處、內藤新宿旅籠屋仁兵衞抱飯賣女りんを誘引出候由當正月廿九日召連參、店持候迄差置呉候樣相賴候處、右體知ル人迄ニ而身元も得と不糺任相賴ニ、初次郎りんとも差置遣、其上初次郎怪敷由ニ而組廻り之もの尋候砌、右之もの吟味ニ相成候而者、團七身分難義可相掛と存じ、與五右衞門屋敷裏之方生垣之破より初次郎逃遣同夜又候參りん候節、りんを相渡遣し、其外無宿庄七幷右初次郎手合ニ而盜取候衣類品々新家與五右衞門、中間佐助持參候を請取手前ニ差置候儀共、不埒之至ニ付、中追放之例ニ見合、盜物を取捌候義者似寄可申處、是以龜之助者身分も違、例より格別品不宜候間遠島、

〔一話一言二十七〕千家滿鯖彥
神職

遠島

其方儀神道盛に被行候樣致度候得共、神職共學問未熟に候間、諸國巡行いたし、諸人へ神道之次第說聞せ、其上江戶表へ罷出、神道學校取建可申旨志し、雲州大社神職を隱居之上、諸國徧歷いたし神道之講釋いたし、○中略又は神服と唱候狩衣に紛敷品を著し、烏帽子をかむり、他行等致し候

故、諸人を遂し候致し方、其上雑談に候共、容易に申出間敷義共を、講釋之席にて申聞せ候段、不届之至に付遠島被仰付もの也、

九月〇年代未詳十八日落著

右は小田切土佐守申渡す

〇按ズルニ、小田切土佐守ハ、江戸町奉行小田切直平ノコトナルベシ、直平ハ寛政四年正月十八日任ゼラレ、文化八年四月廿一日免ゼラル、

〔嘉永明治年間錄〕安政六年十月七日、飯泉喜内等三十七人死罪、流罪等處刑、各差アリ、〇略中

大覺寺門跡御家來療病院六物窓萬、遠島、〇略中

松前伊豆守領分奥州伊達郡今原田村百姓八郎遠島、

廿七日吉田寅次郎等二十三人死罪流罪追放等各差アリ、〇略中

松平修理大夫家來伊三次悴日下部裕（ヤス）之丞遠島、〇略中

小普請組阿倍十次郎家來豐作悴勝野森之助遠島、〇略中

右於評定所五手立合申渡之

〔遠島者一件〕戊（朱書）文久二年〇九月三日差出ス伺之通申渡、即日取附之上返上、

蝦夷地江被遣候者共、取計方之儀奉伺候書付、

書面伺之通取計可申

旨被仰渡奉承知候

戊九月三日

谷村官太郎

德岡政左衞門

石出帶刀

諸御掛ニ而遠島被仰渡在牢之もの貳拾人、此度蝦夷地江被差遣候段、箱館奉行衆御掛合濟之處、右は遠島もの取計之心得を以、先例之通御世話番御用人中より、近々遠島者出帆之旨、御達有之

僧徒處刑

候、〇略下

〔武家嚴制錄〕一禁中幷公家衆御條目

禁中幷公家中衆諸法度〇略中

一上人號之事、碩學之輩者、爲本寺撰正權之差別、於申上者可被成勅許、但其仁體佛法修行及二十ケ年者可爲正年序、未滿者可爲權、猥競望之儀於有之者可被行流罪事、右可被相守此旨者也、

二條關白殿　昭實公在判

秀忠公御判

家康公御判

〔御定書百箇條〕女犯之僧御仕置之事

元文四年極

一寺持之僧

遠島

〔家忠日記增補〕慶長四年十月八日、日蓮宗門ノ僧、去々年大佛供養ノ時出座シテ法事ヲ相勤ムルノ僧ト、亦其供養ニ出座セザルノ僧等、相別レテ宗論ニ及ビ、大坂ノ城西ノ丸ニ登テ是ヲ訟ル、大神君〇德川家康大廣間ニ出御有テ、此宗論ヲ聞セ玉フ〇略中國主秀吉ノ追善ニ出ザルノ儀曲事タルノ由、其罪ヲ決セラレ、一方ノ僧ヲ遠流セラル、

〔駿河土產〕三權現樣御代醍醐定行院科之儀有之遠島被仰付候事

一權現樣御在世の內醍醐の定行院科之儀有之、遠島被仰付候節伊豆の大島御預ケ被置候并出志摩守へ、板倉伊賀守書狀を被相添たる迄にて事濟候となり、

〔續視聽草八集四〕澤庵配流

一洛陽大德寺の住侶澤庵、玉室兩僧左遷の事を尋るに、寬永六己巳七月廿五日、澤庵へ被仰渡趣は、先年東照宮於京都大德寺の寺法に付、天叔、松岳、玉室、此三僧を被召出樣子御尋之上、數月御

吟味にて、御定の節は違背不仕、今度卒爾之罷出御條目之旨を違背仕剩祐筆を以裁答書條、公儀を輕しめ、恣なる義共、併澤庵一人の覺悟之由、世こぞつて風聞ニ付、先々三使を以御尋の處、無相違の旨及言上、依て被仰遠流之旨にて、則羽州上ノ山城主土岐山城守賴行へ御預け也、又玉室への台命には、先年東照宮大德寺の法令を改被置べきにて、天叔、松岳、其方一同に宮中へ被召出御尋の處、慶長廿年五月十九日に裁出し、法令今度改被下候間自今已後堅可相守御下知文、御案文被見之、六月加潤百日に及び、御吟味之上、三僧を一人宛被召出、話則等被開召、彌寺法相續之義定被下、同七月廿五日、於二條御屋形三僧一同に御下知文頂戴、辱旨再三及御請ながら、今度又違犯致近年猥に出世を執行のみならず、裁答書加判仕候條、甚不屆被思召候、萬一可追訴旨趣於有之は、權現樣御在世の時分可指出候處、其節は無異儀及御請、今又是非するの條、重科に被思召候間、流刑に處せらるゝ由ニ而則奥州棚倉の城主內藤豐後守信照へ御預ケなり、依之棚倉城下赤館と云處に配所すと云々、

〔高野山事略〕行人の僧徒流刑幷高野山東照宮神法樂御法事の儀關如の事

元祿四年の夏、來迎院某、興山寺住持職となされ、其後追箇條と稱せられて、先に下されし二十一箇條の外に仰出さるゝ事ごもあり、こゝにおいて行人の僧六百八十人餘遠流に處せられ、興山寺の事、在山行人上首（組頭六人の事）なり輪番交替して執務させらるゝ、されば東照宮毎月毎日の神法樂、天下御祈禱の法事、供養等の儀、本導師といふものもなく、わづかに其舊儀の存する事、すでに二十餘年に及べり、

〔御仕置例類集三ノ十四〕寬政元酉年閏六月

松平伊豆守殿御差圖

牧野備前守掛

一上總國求名村高福寺如善儀觸頭幷本寺之申渡違背いたし候一件、

三宅久三郎知行上總國武射郡求名村

日蓮宗東漸寺末高福寺　如善

右之もの儀、本寺東漸寺申付違背致し候ニ付觸頭本光寺ゟ退寺可致旨申渡候處、品々難澁いたし、其上奉行所江差出相成候節、早速退寺可致旨觸頭迄書付差出置ながら、村內治兵衞娘そのと、五六年以前より密會いたし居、右之もの打捨置退キ候段、不便ニ存候迚、退寺不致我意申張、寺持之僧之身分ニ而、女犯等いたし候段、旁不屆ニ付遠島、

右御仕置附

右觸頭本寺之申付違背いたし不屆も御座候得共、女犯いたし候段重々不屆ニ御座候間、御定書女犯之僧御仕置ケ條ニ寺持之僧遠島と有之ニ見合遠島、

〔默叢餘錄八〕寬政四年當春みやけ島へ流れたる、金杉安樂寺住持揚り屋江入牢の砌、みやけ島の名主その國にては神職なりしが罪ありて同じく揚り屋に住持と同居せしに、住持の敎化にて念佛に歸し、其後名主は御免ありてみやけへ歸鄕せしが、安樂寺和尙もまたみやけ島へ流罪に處せられ、彼島へ和尙わたりたりしに、名主親子ことの外信仰致し、則和尙へ一庵を造てあたへ移居せられしとぞ、和尙に隨ひ配所へ赴し弟子の僧一人ありしが、是又ことの外深切に仕へ、島中水不自由なる所を、此弟子遠き所より毎日水をくみ日々湯を焚、和尙を入浴せしむる事おこたらずとぞ、其比和尙の詠に、

露の身をむすぶばかりの庵とよまれしよし、彼地より來る船頭の物語なり、

〔視聽草六集三〕明和四亥年八月山縣大貳御仕置被仰付候書付〇中略

宮澤準曹　亥四十七

桃井久馬　四十九

遠島者犯罪島替

佐藤源大夫
禪僧　五十三　靈宗　五十一

此者共儀、永澤町浪人山縣大貳物語の由にて、同人方に居候、堂上方家來と僞り候、藤井右門不取留不敬之儀を申出候に付、難心得存じ、出會之度々可糺と尋問候處、公儀江對し恐多事共、雜談致し候に付、大貳右門不屆之企致候儀と存、推量を以不慥成儀を、治定之趣に相認め、大貳弟子之內親鋪隨身と承り候得ば、何之儀をも不相糺、徒黨之事と相察、右名前荒增承候儀を取合認置、其內には大貳右門一向知人にも無之者之儀、其外御家人幷堂上方にも、一味之者有之由、重き事共を相認、此者共之儀は、蔭に相成、手寄を以可訴と彼是取拵、一途に御爲訴出處、上も無之恐多き儀を厚く相聞候樣申立候段、却而不憚公儀致方、不屆之至、殊に此者共訴にて、大勢無罪之者共迄致入牢、御詮義に相成、其上無名之捨訴狀、捨文等有之、右認方全く此者共之仕業と相聞候、重々不屆之至、重科之者に付、死罪可申付者に候處、大貳右門儀企等之儀は、毛頭無之事に候得共、兵書雜談或は堂上方等之儀、其外恐入候不敬之雜談申散候段は、此者共申立より相知れ、大貳儀は死罪、右門儀は獄門に相成候仕置相立候、乍不屆訴人之事故、此所を以此者共儀は助命申付、三日晒之上遠島申付者也、

〔御定書百箇條〕遠島もの再犯御仕置之事

從前々之例、遠島もの、島にて死罪以上之致惡事候においては、於其島死罪

但同類、亦は於其島にねだり事いたし、或ハあばれ候類は島替、

〔公案比事四十一〕流人致惡事、於島御仕置申付候類、

明和三戌年十二月

御勘定奉行總掛

一三宅島流人之內、不屆致候者一件、

朱書　松平右近將監殿御下知　三宅島流人　了昌

右之者儀、流人松角金三郎と酒給候上ニ而及口論、一旦引別、翌日ニ至り誤らせ可申とて金三郎寐込江庖丁を持踏込、金三郎江取掛、其上流人行信方江罷越、衣類無心申掛ケ、庖丁を持おどし、木綿袷壹ツ貰請、其外數度酒狂之上、百姓又ハ流人江對シ喧嘩致候段、旁不屆ニ付島替、

〔御仕置例類集三ノ六〕寬政三亥年四月　御勘定奉行　根岸肥前守掛

松平和泉守殿御差圖

一隱州代村ニ罷在候流人伊助外壹人盜いたし候一件　隱岐國周吉郡中村　流人　新兵衞

右之もの儀、盜物と乍存、喜兵衞持參候衣類、其外反物等代錢七貫文ニ買取候始末不屆ニ付敲、

右御仕置附

右盜物と乍存、下直ニ買取候もの所拂ニ相當候處、流人之義ニ付所拂ニ者難相成候間、盜物と乍存預り候もの敲之御定をも見合敲、

〔后赦錄流罪〕戸田采女正殿御差圖

寬政十二申年閏四月廿一日遠島申渡　元數寄屋町三町目重次郎店平兵衞悴

同年千月十三日

一三宅島江流罪　半兵衞〇中略

朱書

右半兵衞儀、島拔企候依科、死罪申付候旨、享和二戌年十一月十一日、御勘定奉行石川左近將監方より達有之候ニ付、爲見合記之、

〔御仕置例類集一ノ三十四〕文化十二亥年御渡

長崎奉行伺

一肥後國天草郡ニ罷在候流人甚吉盜致候一件

高木作右衞門當分御預所肥後國天草郡小宮地村罷在候

元無宿　大坂の甚吉

右之もの儀、先年惡事有之、於大坂遠島申付候身分不慎、無宿直八、天草郡宮田村虎市江盜之手段有之を明ヶ這入、錠前無之竹葛籠ニ入候木綿四拾七反盜取、右品直八可賣拂旨申之ニ付、同人江相渡、右之内壹反賣拂、代錢八百文直八此もの兩人ニ而分ヶ取遣捨、其上右始末內分ニ而相濟セ度、無宿嘉門江相渡候儀共、不屆ニ付島替、

此儀吟味書之趣ニ而ハ、盜之品代金積拾兩以下ニ付、晝夜不限戶明有之處、又ハ家內ニ人無之故手元ニ有之輕キ品を盜取候類之御定ニ而、入墨之上重敲と相當り、死罪以上ニ可申付惡事ニ無之候間、遠島もの島ニ而死罪以上之惡事いたし候ニおいては其島において死罪、但同類又ハ於其島ねだり事いたし、或ハあばれ候類之もの島替と有之、御定之但書ニ准じ、伺之通島替、

脫島

〔御定書百箇條〕遠島もの再犯御仕置之事

寬保二年極

一島を逃候もの　於二其島一死罪

〔御仕置裁許帳ナシ〕流人島を逃歸る者之類

寬文八年申三月十四日

壹人五郎　是は下總國馬立村之者、同所するを村彥五郎下人喜助と申者を、七年以前切殺シ候由、彥五郎訴訟申ニ付、佐渡江流罪申付候へば、去年七月佐渡より、當地江逃參候由、馬立村之者、當十二日捕來ルニ付、評定所より入〇中略

右之者、申四月十八日佐渡江流罪、

〔御仕置例類集三ノ十三〕寬政七卯年十一月

戶田采女正殿御差圖

一伊豆國附新島流人藤助外壹人、島拔致し候一件、

元江川太郎左衞門
當時三河口太忠

御勘定奉行
根岸肥前守掛

右之もの儀、不屆有之、新島流罪ニ相成候處、織藏申合、船を盜島を逃去、江之島浦江漂着之節も、名前國所を僞候段、不屆ニ付死罪、

但科之次第相認右島江札爲建、

同島流人榮藏事　入墨　織藏

右之もの儀、死罪御仕置にも可相成惡事致し候得共、十五歲以下ニ付、入墨重敲、又ハ遠島ニ相成候處、猶又島拔いたし、殊江之島浦ニ而浦役人共相糺候後も、一旦逃去候始末、右浦役人江僞之儀申立候儀可相顯と逃去候ニ相當、不屆ニ付死罪、

但科之次第相認、右島江札爲建、

右御仕置附

右御定書ニ、島を逃候もの、其島において死罪と有之候處、島方之儀ハ、渡海差支も有之、先達而伺之上島江差遣候ニ不及死罪申付候科之次第相認、右島江札爲建置候例も御座候間死罪、

〔后赦錄流罪ノ朱書〕松平伊豆守殿御差圖

享和二戌年九月三日遠島申渡
同年九月十九日

一三宅島江流罪

本鄕六町目橫町續和助元店

麴屋鐵事源助〇中略

朱書
右源助儀、享和三亥年四月七日、島逃去行衛不知旨同十三子年八月、御代官杉庄兵衛より達有之候、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文化十三子年御渡

町奉行永田備後守伺

一伊豆國附新島流人、元下總國中妻村百姓三左衛門聟養子榮次郎外壹人島拔いたし候一件、

伊豆國附新島流人ニ而島拔いたし候

元下總國豐田郡中妻村　百姓　三左衛門聟養子　榮次

右之もの儀、不屆有之新島江流罪ニ相成候處、島拔可致旨流人瀧藏外四人申合、當六月十一日、たぶし浦岸ニ繫有之候漁船江乘移り、漕出し候得共、難風ニ而乘戻し村方江立歸り候途中ニ而、又候島拔可致旨同類之内吉右衛門と申合候處、右島拔之始末相顯、翌十二日瀧藏外三人ハ被捕押、後日手鎖足ほたを懸ケ、銘々五人組頭江預ニ相成候故、右申合之趣、同類源彌江相咄候處、同意いたし同人儀脇差斧を持參候間、右脇差を此もの帶同夜村内長榮寺地中善立坊江兩人ニ而附火致し、燃上り追々人出合候故、右吉右衛門預ニ相成候五人組頭九郎兵衛方江參候途中、百姓幷流人共出合、此もの共を可捕押樣子ニ付、兩人ニ而出合候もの、九人江手疵爲負、卽死之ものも有之、夫々九郎兵衛方江踏込、同人を及殺害、吉右衛門江懸ケ置候手鎖足ほたを打碎、同人一同猶又五人組頭市左衛門方江踏込、番人共江手疵爲負、右瀧藏江懸ケ置候手鎖足ほたを打碎、都合四人ニ而同島續若郷村海岸ニ繫有之候解船江乘移り、島逃去、房州小湊江漂着上陸いたし、銘々相別れ、此もの者奥州邊迄逃去候始末、重々不屆至極ニ付、

但科之次第相認、右島江捨札爲建可申、

〔類例秘錄五〕内藤隼人正掛り　天保二卯年

田口五郎左衛門出

雜載

一伊豆國附三宅島流人嘉兵衛外貳人島逃去候一件伺

書面三宅島流人、其外之者共義、流人嘉兵衛外貳人、神著村市郎兵衛所持之用達船盜取島拔いたし候を不存罷在候段、平日心得方等閑故之義不埒ニ付、笞や平兵衛壬生式部は押込申付、名主、年寄共は急度叱り、其外之もの共は叱り置、證文取之差出、且平兵衛外一人押込日數相立三十日相立候はゞ、不及伺可被差免候、以上、

卯二月

追而此觸書浦繼刻限附を以、早々相廻し、尤別紙請取いたし浦々之分追々繼添、此觸書一同留候宿村繼を以、田口五郎左衛門役所へ可被差出候、

先達而三宅島江差遣候流人無宿入墨嘉兵衛、鴻巢宿無宿勘左衛門、淺草無宿入墨千吉事吉五郎申合同島之内神著村又藏所持之衣類幷ニ同島大久保湊ニ繫置候同村市郎兵衛用達船盜取乘組、當二月六日逃去候旨、注進申出候間、右體怪敷もの著岸ニおゐては、其所へ捕置、早々田口市左衛門役所江可申出もの也、

卯二月

〔市尹要覽四〕御仕置者一件之事

一御仕置ものゝ内、遠島ニ成り候もの之子供、向後構無之候間、其旨可被相心得候、以上、

享保五子年十二月三日　戸田山城守殿　三奉行江御渡被成候、

〔憲教類典四ノ五評定〕享保十六辛亥年

遠島者減方之事

一大勢遠島之者有之候而ハ如何候間、向後死罪歟と存候はゞ、猥に追放申付候事ニ而ハ無之候、只今まで江戸拂所拂申付候者ハ只今之通に可相心得候、

右之通被仰出候間、此趣を以、御仕置可被伺候、

亥三月

古事類苑

法律部三十六

下編上

追放

追院　退院　一宗構

御料所　地方奉公構〔併入〕　一派構　武家奉公構

御構場所　三一〇

追放方法　三一六

重追放　入墨之上重追放　敲之上重追放　三二一

中追放　入墨之上中追放　敲之上中追放　三二六

軽追放　敲之上軽追放　晒之上耳をそぎ追放　三三四

江戸二十里四方追放　入墨之上江戸二十里四方追放　三三七

江戸十里四方追放　三三八

江戸七里四方追放　三四〇

江戸五里四方追放　鼻をそぎ江戸五里四方追放　同

江戸三里四方追放　三四一

江戸拂　敲之上江戸拂　同

所拂　敲之上所拂　三四六

門前拂　敲之上門前拂　三五一

洛中拂　三五三

洛中洛外拂　三五五
五畿内構追放　三五八
山城國中拂　同
伏見拂　三五九
大和國中拂　同
攝河兩國拂　三六〇
大坂三鄉拂　同
堺兩鄉拂　三六一
駿府拂　三六二
佐渡國中拂　同
長崎拂　三六三
箱館市中拂　三六四
松前市中拂　三六五
伊勢神領拂　三六七
日光御領拂　三六八
追放異域　三六九
僧徒處刑　三七〇
婦人處刑　三七四
追放者犯法　三七六
追放者犯罪　三八一

追放者容止　三八三
雜載　三八八
○
追院　三九〇
退院　三九四
一宗構　三九六
一派構　三九八
武家奉公構　同
御料所地方奉公構　同

古事類苑

法律部三十六

下編上

追放 追院 退院 御料所 地方奉公構 一宗構 併入 一派構 武家奉公構

追放ハ罪惡ノ者ノ害ヲ良民ニ播サンコトヲ懼レテ、之ヲ領内ヨリ驅逐シテ他ノ領地ニ放ツナリ、但シ其罪ノ輕重ニ由リ、重、中、輕ノ三等アリテ、住居スルヲ得ザル國數ノ多少ヲ以テ差トス、

重追放ハ江戸ヨリ放ツ者ハ、武藏、相模、上野、下野、安房、上總、下總、常陸、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、甲斐、駿河ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、京都ヨリ放ツ者ハ、此外ニ河内、近江、丹波三國ヲ加フ、

中追放ハ、武藏、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、下野、日光道中、甲斐、駿河ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、

輕追放ハ、江戸十里四方、京、大坂、東海道筋、日光、日光道中ニ入ルコトヲ禁ズ、而シテ現住所ノ地及ビ犯罪ノ地ニ入ルコトヲ得ズシテ、田畑、家屋敷ヲ沒收セラルヽハ、三追放同一ナレド、家財マデ沒收セラルヽハ、重追放ニ限ル、其逐ヒ遣ルニ方リテハ、右ノ地名ヲ書キ列子タル書狀ヲ授ケ、江戸ニテハ常盤橋、及ビ呉服橋外ニ於テ之ヲ放ツ、然ルニ延享二年ニ至リ、其追放ノ地ノ廣クシテ、平民ノ輩、生計ニ便ナラザルヲ以テ、改メテ三追放共ニ犯罪ノ地、所生ノ地、江戸十里四方ノ地ニ入ルコトヲ禁ジ、田畑、家屋敷、家財取上ニ就キテ、輕中重ノ三等ヲ分

チタリ、

江戸十里四方追放ハ、日本橋ヨリ五里四方ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ但シ江戸ヨリ外ノ者ハ、兼テ其住所ハ地ニモ入ルコトヲ得ズ、此刑ニ處セラレタル者ノ、田畑家屋敷等ハ沒收セザルヲ以テ例トス、然レドモ利欲ニ出デタル者、又ハ貢納未進ノ者ノ如キハ此限ニ在ラズ、江戸二十里四方、七里四方、五里四方、三里四方、並ニ之ニ准ズ、

江戸拂ハ、品川、板橋、千住、本所、深川四ツ谷ヨリ以内ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、是ハ町奉行ノ支配ニ係ル地ナリ、

所拂ハ住居ノ地ニ入ルコトヲ禁ズ、但シ此二刑ノ田畑家屋敷家財等ハ、江戸十里四方追放ト同ジ、

門前拂ハ奉行所ノ門前ヨリ追ヒ放ツナリ、此刑ハ大抵無籍者ニ科ス、

洛中拂洛中洛外拂等ハ、京都ニ於テ處分スル刑名ナリ、卽チ江戸拂江戸十里四方追放ノ如シ、

耶蘇教徒ヲ處刑スルニ方リ、亞馬港（アマカウ）及ビ咬噌吧（ヤカタ）ノ地ニ追ヒ遣リタルコトアリ、是亦追放ノ類ナリ、

追院以下ハ僧侶ニ科スル刑ナリ、而シテ追院ト退院トハ、相似タルモノニテ、俱ニ居住ノ寺院ヲ放逐セラルレドモ、追院ハ命ヲ受クル後ニハ、再ビ其寺ニ還ルヲ得ズシテ、徑ニ去ルヲ謂ヒ、退院ハ寺ニ還リテ後ニ退クヲ得ルヲ謂フナリ、一宗構ハ、其宗旨ノ籍ヲ除クヲ云ヒ、一派構ハ、宗旨中ノ一派ノ籍ヲ除クヲ云フ、

武家奉公構ハ、武家ニ仕フル者ノ刑ニテ、再ビ武家ニ仕フルヲ聽サズ、

御構場所

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

（從前々之例）
一重追放　御構場所
寛保二年極
武藏　相模　上野　下野　安房　上總　下總　常陸　山城　攝津　和泉　大和　肥前

東海道筋　木曾路筋　甲斐　駿河

（從前々之例）
但欠所、右同斷、（田畑家屋敷家財共欠所）

（同）
一中追放　御構場所
寛保二年極
武藏　山城　攝津　和泉　大和　肥前　東海道筋　木曾路筋　下野　日光道中　甲斐

駿河

（從前々之例）
但田畑家屋敷欠所、家財無構、

（同）
一輕追放　御構場所
寛保二年極
江戸十里四方　京大坂東海道筋　日光　日光道中

（從前々之例）
但欠所、右同斷、

寛保二年極追加
右重中、輕共、何方にても住所之國を書加相構、住居之國を離於他國惡事仕出し候者、住所之國惡事仕出し候御構場所書付相渡候事、

寛保二年極追加
一右追放もの御郭外にて放遣、侍ハ其場所にて大小渡遣候事、

寛保二年極
一於京都重追放申付候ものハ、右御構場所之外に、河內、近江、丹波三ヶ國を加相構、中輕追放ハ別義無之事、

〔官中秘策二十六〕訴訟御定之事
一追放構、國々之重き追放は關八ヶ國、山城、攝津、駿河、甲斐、尾張、伊勢、奈良、長崎、東海道筋、木曾路筋、
一中追放、江戸十里四方、京、大坂、奈良、伏見、長さき、東海道筋、木曾路筋、日光道中、甲斐、なご屋、和歌山、
水戸、

〔科條類典下七〕享保二十卯年七月伺

追放者御構場之内、甲斐國入候儀、相伺候書付、　評定所一座

覺

一追放者御構場之内、甲斐國前々入候處、松平美濃守江被下候以後、只今以入不申候、自今甲斐國入可然奉存候、依之奉伺候、則追放御構場所書付入御覽申候、以上、

七月

追放御構場之内、前々之通甲斐國入可申旨、被仰渡承知仕候、　評定所一座

卯七月十四日

〔科條類典下七〕寛保二戌年十月廿日

追放御構場所之儀ニ付、御尋之趣申上候書付、書面之通可相極旨、被仰聞承知仕候、　評定所一座

戌十月廿二日

去ル廿八日被仰聞候、追放御構之場所書付之内、名護屋和歌山水戸相載有之候、右三ヶ所ハ相除候而も、苦ヶ間敷哉之儀被仰聞候、

此儀右三ヶ所ハ御三家御城下故、前々ゟ相加り候物と相見申候故、其通可被差置哉之旨、申上候得共、三ヶ所除候而も、外に差障り候儀ハ、無御座候間、向後相除申候哉、

一住居之國中におゐて、惡事仕出候ハヾ、何方江も右一國を構可申事、

住居之國を離レ、他國におゐて惡事仕出候はヾ、其一國を構、尤住居之國共に構可申事、

右は評議仕候趣、書面之通御座候、此通相極可然奉存候、以上、

戌十月

〔科條類典下七〕寛保二戌年十月廿六日

追放御構場所之儀ニ付書付　評定所一座〇中略

右追放御構場所之儀評議仕候處、書面之通相極差障候儀、無御座候、中輕追放ニ甲府加へ候儀、近年之儀ニ御座候間、相除可申哉、書加候ハ甲斐と相認可申候、甲斐を書加候に付而は、前々無之候得共、駿河も書加可然哉、依之甲斐駿河書加奉伺候、以上、

戌十月

〔科條類典下七〕延享二丑年八月廿六日、大岡越前守、島長門守、木下伊賀守上、去ル廿日御渡被成候御書付之儀ニ付、申上候書付、

一追放者御構之處々之事、是は專御扶持人其外侍以上に掛り候儀ニ而、町人百姓末々日雇體之者、御構場所多ク候而ハ、渡世可致便も無之、忍而致住居、若相知候時は、猶又罪科重ク罷成候事、向後左之通可相改哉、評議可有之事、

一町人百姓追放重中輕共に、御構場所江戸十里四方住居之國、幷惡事仕出候國構之、欠所ハ重キハ田畑家屋敷家財取上、中ハ田畑家屋敷取上、輕キハ田畑計取上、

右之通欠所にて重、中、輕三段品を附候事、但田畑家屋敷無之者ハ、家財取上可申歟、田畑家屋敷家財無之者ハ、輕重不分樣ニ候得共、左樣之者は構之場所差別も不覺程之族多ク候、輕重程よく全備候樣ハ難成候事、

一御扶持人幷陪臣浪人侍以上ハ、唯今迄之通御構場所替無之事、〇中略

丑八月

〔張紙留〕寛延三午年十月十一日、相模守殿能勢肥後守江被仰渡候御口上、

御仕置伺黄紙下ヶ札ニ、何之國を構追放と申儀、幷江戸拂、江戸十里四方追放ニ居村構と申儀、向

後相止、重中輕追放、江戸拂、江戸十里四方追放と計認上候樣被仰聞候、

〔徳川禁令考後聚三十六〕天保十五辰年二月

追放もの御構場所之儀ニ付、相談并挨拶書、

鳥居甲斐守（○南町奉行）
鍋島内匠頭（○北町奉行）

重、中、輕追放御構場所之儀ハ、武士雜人之無差別、住居之國惡事仕候國共構之、江戸拾里四方追放江戸拂ハ、在方之ものは居村共構候御定ニ有之候處、拙者共御役所ニ而ハ、重、中、輕追放、生國江戸十里四方追放、江戸拂ハ、出生之土地を構候仕來ニ而、寺社奉行衆、御勘定奉行衆取計と、區々ニ有之、依之致勘辨候處評定所張紙ニ江戸十里四方追放、江戸拂ハ、惡事之村を構可申と之儀者無之候得共、重、中、輕追放ニ准じ右村をも構可申と有之、江戸十里四方、江戸拂等之刑者、御城廓を被遠候而已ニ無之、口論疵付等之類、都而惡事仕出候土地を立廻り候而は、再び害を生じ可申哉右は至當之儀に付、御定には無之候共、其儘居置、以來武士雜人之無差別、一般に惡事仕出し候村國、住居之村國は構之、出生之村國は構不申積仕來可相改と存候、然る處追放ものヶ所書認振之儀に付、寛政十一未年書留ニ、出生之國を構候趣ニ評定所仕來之旨、別紙之通書留も有之候間、旁及御相談候事

別紙

重追放
御構場所

何之誰家來　何之誰
何國何村　誰

江戸十里四方
（朱書）住居之國　下總國
（朱書）惡事仕出候國　武藏國
（朱書）出生之國　相模國

右之場所、徘徊すべからざるもの也、

寛政十一年六月廿一日

追放ものヶ所書振合、兩御役所區々ニ付、內寄合ニ而、昨六日御評議極、以來右之通被心得候樣被仰渡候由、大塚龜之進より通達有之候事、

但評定所書振、右之通ニ候由、且文言文字假名共、書面之通認候儀、評定所仕來ニ候間、右ニ不違樣認候樣龜之進被申聞候、勿論右國々を顯候ハ、振合見合計ニ、何國と認候事之由、是又被申聞候、

未七月

御書面追放もの御構場所之儀、寛政十二申年迄者、評定所おゐても出生之地を構候處、右者御定ニ振候趣を以、同年十一月中出生之地は、構不申積取極、其以來住居并惡事之國而已相構、尤無宿は住居之國無之故、惡事之國計構之、且十里四方追放、江戸拂之儀も、御定書ニ惡事之町村を構候儀者無之候得共、重、中、輕之追放ニ准じ、右町村を構、出生之地を構不申仕來に付、御仕置筋之儀、區相成候は不可然候間、其役所仕來御改有之候方と存候、以上、

寺社奉行
御勘定奉行

辰二月

〔公事手留〕御構場所書付

追放方法

中追放

御構場所

江戸拾里四方

下總國

右之場所、徘徊すべからざるもの也、

文政六年月日

〔官中秘策二十六〕訴訟御定之事

一評定所ニ而追放申渡時ハ、御小人目付、町同心立會、常盤橋御門迄連行追放、屋敷ニ而者徒士、足輕召連、

〔刑罪大秘錄〕追放江戸拂等之事

一評定所、又ハ掛々ニ而落著申渡、御曲輪外迄役人附添見送リ、御曲輪外ニ而侍ハ大小渡放遣ス、但身分ニ寄御徒目付、町方與力見送之、

〔憲教類典四ノ五評定〕正德元辛卯年四月十四日

但馬守殿御渡町奉行江

遠慮日數幷出奔之定〇中略

一追放之者大小、近年ハ不相渡候由前々之通大小追放之場所にて相渡可遣事、

右之通、向後可被心得候事、

卯四月

〔憲教類典四ノ五評定〕正德元辛卯年四月

左之書付、當御代被仰出候留帳有之、

日本橋ゟ四方江五里ヅヽ

大野村無宿坊主勘藏

一重キ追放〇中略

一中ノ追放〇中略

一輕キ追放〇中略

一江戸追放〇中略

右之通六年以前戌八月廿四日被仰渡、四段に分御座候、江戸五里四方追放申付候儀御座候、

一改易

右改易ハ申渡候得バ罷歸早速屋敷引拂申候、先々罷在候場御構無御座候、追放ハ宿江不罷歸、直ニ常盤橋、呉服橋外にて追放、御構之場所輕重御座候ニ付、改易にハ違申候、

一追放之者ハ、常盤橋、呉服橋外にて追放シ候、其所にて刀脇差相渡申候、然ル所木工右衞門追候之節より刀脇差相渡不申、右木工右衞門追放ハ、二十二年以前、元祿三年二月五日若藤木工右衞門追放之節也、

一追拂、追放とは譯違申候、追放ハ右之通、御構場所輕重相定申候、追拂ハ其所を追拂申候迄ニて御座候、刀脇差も渡シ遣申候、

四月

丹羽遠江守

松平壹岐守

坪内能登守

右者正德元卯年四月、御尋ニ付町奉行ゟ但馬守殿江上ル、

〔公裁秘錄一〕所拂以上追放御仕置申渡方之事

落著之節、科之次第讀聞、不屆ニ付、中追放申付ルと被申渡候節、傍ニ出席之手代、御構場所書付不殘讀畢而、御構場所徘徊いたす間敷旨、申渡候事、

〔憲教類典五ノ十町奉行〕享保六辛丑年二月九日

追放申付候者之儀、畢竟所々江も立歸、又候惡事不叶者ハ格別、其外ハ過料ニ而も爲出、追放之者數少き樣にと被思召候間、只今迄追放ニ成候咎之次第致吟味、何も相談仕、追放不申付候而ハ難成もの、又ハ過料等ニ申付可然者、書付差出候樣ニと、丑二月九日於羽目之間三奉行江水野和泉守殿被仰聞候事、

〔憲教類典五ノ十町奉行〕享保六辛丑年二月十二日

覺

唯今迄追放ニ申付候科之者之內、向後過料爲出候儀被仰渡候趣、何も奉承知致相談存寄左ニ申上候、

一追放之重科、幷入墨追放ニ申付候程之者之義ハ、此以後只今迄之通可申付候、

一中追放幷輕キ追放ニ申付候程之分ハ、自今ハ過料又ハ戸〻ニ可申付候、其科之輕重ニ隨ひ、過料ニも致、多少爲出可申候、且又此類ニ申付候內、無宿幷無宿同前之者之義ハ、追放ニいたし候てハ、其以後又惡事をも仕出し申族も御座候間、ケ樣之類ハ非人之手下に相渡可申候哉、

右之通可然奉存候

二月

評定所一座

右丑二月十七日、水野和泉殿江上ル、

〔憲教類典五ノ十町奉行〕享保六辛丑年二月十七日

同十六日和泉守殿三奉行江被仰聞候は、先日書付差上候追放者非人手下江遣候義非人方にて致欠落候得ば同樣之義ニ有之候向後追放者之義相伺可申之旨御口上ニ而被仰聞候事、

〔公裁秘錄〕遠島者減方之事

一大勢遠島者在之候而は如何ニ候間向後死罪か遠島かと存候程之者は吟味之上重追放可申付候、

右之類追放ニ成候而も猥りに追放申付候事ニ而は無之候、唯今迄之通可被相心得候、

右之通被仰出候間自今此趣を以御仕置可被相伺候、以上、

丑三月〇享保六年

〔牧民金鑑二十〕享保七寅年二月廿二日御書付

科人放之事

右科之品ニ依而扶持を召放し候歟、或ハ家財闕所又は其品輕くは過料等それ〳〵に可被申付儀ハ勿論ニ候、件之惡事有之候もの、領內ニ差置候を嫌ひ、他所江放遣候儀ハ有之間敷事ニ候、近年於公儀は、追放もの先は無之樣ニ被仰付候間、於國々所々、其旨を存猥ニ追放有之間敷候、然共喧嘩などニ而雙方疵付候もの歟又ハ侍などニ品により追放被申付、却而可然趣も可有之候間、其段ハ格別之事ニ候、

右之通可被相心得候、以上、

〇又見ニ續要永久錄

寅二月

〔憲教類典四ノ五評定〕享保七壬寅年三月十五日

水野和泉守殿御渡

追放者之儀ニ付御書付

今度追放御仕置無之樣に被仰出候に付前々追放に成候もの、追放御免之儀願出候はゞ右願取

御勘定奉行江

上、吟味之上差免可申候、以上、

寅三月

六月十四日

和泉守殿江上ル

追放もの丶儀ニ付伺書

私領にて追放申付候もの丶赦免之儀、奉行所江願出候ものハ、地頭江願候樣にと申渡、私共方ゟ地頭江申通候儀御座候得ども、不埒明候由を申、度々罷出候樣之類、自今ハ頭有之面々は、其頭ニ申通じ、頭無之面々ハ、其地頭江直に相通じ、其以後罷出候はゞ、此分に而者取上ヶ不申候樣にと奉存候、以上、

寅六月十四日

右之通可相心得旨、寅六月廿日和泉守殿被仰聞候、〇下略

〔評議書〕寛政元年七月廿六日

伊豆守殿江（編首守 [illegible]）立會下り物相添御直ニ上ル、酉九月三日、御同人一座評議之通相濟候旨被仰聞候、

但右一件評議之内、此別紙計寫置伺書ハ略ス、

別紙

別紙評議仕申上候、大坂町奉行相伺候、名目銀貸付方之儀ニ付、不屆之取計仕候者之儀、先訴之出入濟方ニ差詰、調達手當之間、期を延申度存、名目銀借請居候姿ニ取拵、返濟相滯候旨、支配人共ゟ爲相願候もの共、大坂町奉行重、中、輕追放與相伺申候處、右科之者一件之内、九十人餘有之、多人數追放申付候も如何ニ可有御座、御定上卷追放之儀ニ付、御書付ニも科之品ニ依而扶持を召放候歟、或ハ家財欠所、又は其品輕くハ過料等、夫々ニ可被申付儀ハ勿論ニ候、件之惡事有之候者、領内ニ差置候を嫌ひ、他所江放遣候儀ハ有之間敷事ニ候、近年於公儀ハ追放もの先ハ無之樣被仰付候間、於國々所々其旨を存、猥ニ追放有之間敷、然レ共喧嘩などニ而雙方疵付候もの歟、又ハ侍など品ニ寄追放被申付却而可然趣も可有之候間、其段ハ格別之事與有之候を見合候而も、多人數追放申付候事は有之間敷筋與奉存候、依之別紙評議仕申上候通、類例相糺候處、右類例居町拂申付候もの丶科ニ似寄、右より品輕く御座候間、過料錢拾貫文與評議仕申上候儀ニ御座候、以上、

重追放

酉七月

〔御定書百箇條〕關所を除、山越致候者幷關所を忍通候もの御仕置之事、

從前々之例

一關所難通類、山越等致候者、　於其所磔〇中略

同

一同忍通り候者　重追放

〔御定書百箇條〕地頭江對し强訴其上致徒黨逃散之百姓御仕置之事

寛保元年極

一頭取　死罪

同

一名主　重追放

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事

從前々之例

一御林之竹木申合盜賊致候もの　頭取　重追放

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

寛保元年極

一人を殺候旨申掛いたし候もの　一通之申懸に候は　重追放

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

寛保三年極追加

一遺恨等を以、拾人以上結徒黨を、　頭取

一狼藉之上、人を殺候におゐては、　獄門〇中略

同追加

一同狼藉いたし、諸道具等於爲損候には、　頭取　重追放

〔官中秘策二十〕諸浪人村々江參り、無謂合力ヲ請、旅籠錢等不拂村次人足を乞召連通ニおいては重追放、

〔兼胤公記〕寶曆九年五月七日、竹內式部仕置申渡之趣、爲心得差越之由、

申渡

德大寺家家來麩屋町丸太町下ル町植地屋六之助借屋ニ罷在候

竹內式部

其方儀、堂上方江神書相傳候、堂上方ニは神道其家々も有之事ニ候得者、被相望候トモ、相斷可申處、無其儀、殊經學計指南いたし候由申候得共、靖獻遺言等、堂上方江致講釋、其上三本木江堂上方被參候節、罷越酒宴いたし、都而敎方不宜ニ付、堂上方弟子之分御咎被仰付候、殊ニ色々軍書武器等之風聞等有之候付、武藏、相模、上野、下野、安房、上總、下總、常陸、山城、攝津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、甲斐、駿河、河內、近江、丹波、越後、

右國々追放被仰付候○中略

卯五月

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永三午二月右京大夫殿御下知

一伊豫國南神崎村外四ヶ村と同國上下麻生村用水論之上打合、南神崎村百姓庄兵衞外壹人變死一件之內、

松平對馬守懸

加藤覺十郎領分豫州浮穴郡下麻生村　庄屋　清右衞門

此清右衞門儀、南神崎村下四ヶ村ゟ覓江小土手堀崩又は覓取除大勢場所ニ相詰罷在、難捨置候ハ者、領主役所江訴、差圖を可請處無其儀、爲用心棒鍬持出可然旨、兵右衞門申聞候を差留も不致故、猶又兵右衞門より百姓共江申觸太鼓を爲打、人數を集雙方百姓共矢取河原ニ而石を投合、又は棒鍬ニ而打合、互ニ疵負候內、南神崎村庄兵衞、矢倉村作右衞門右疵ニ而相果候始末ニいたし成し候段、庄屋役乍勤、旁不屆ニ付重追放、

御仕置附

右御定之但書ニ、荷擔人中追放と有之候得共、此者は庄屋之儀ニ御座候、地頭江對し强訴、其上徒黨いたし逃散之百姓御仕置之ヶ條ニ、頭取死罪、名主追放組頭田畑取上所拂、惣百姓村高ニ應じ過料與有之、右名主之御定を見合、重追放と御仕置附仕候、

松平隱岐守御預り所同國伊豫郡南神崎村

ホオ許人　佐野七

善兵衞

此佐野七善兵衞儀、覓江小土手差障ニ成候趣、麻生村江懸合不致承引候ハゝ御預り役所江訴差圖可請處、麻生村ニ而取繕置候小土手を私ニ堀下ゲ、殊ニ瀨淺ニ出取除候を取請、誰仕業ニ候哉不相知候ハゝ、猶又麻生村江對談之上取鎭可申處、却而夜中大勢右場所江詰居り候故、上下麻生村ゟも大勢罷出雙方石を投合、又は棒鍬ニ而打合、互ニ疵負候內、庄兵衞佐右衞門、右疵ニ而相果候始末、此ものゞも最初之いたし方卒忽より事起り、不屆ニ付重追放、

御仕置附

右南神崎村外四ヶ村大勢罷出候も拾人以上ニ而罷出候百姓共者、前書上麻生村百姓與同樣之趣意與御座候處、一體此もの共最初之取計ひゟ事起り候間、强訴徒黨之頭取死罪之御定ニ一等輕く、兩人とも重追放と御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永七戌十二月佐渡守殿御下知

桑原能登守懸

一上州穴原村佐左衞門同國薗原村叔父伊兵衞方ニ而及狼藉候一件之內、

布施彌市郎御代官所上州利根郡穴原村　組頭佐左衞門母すわ

此すわ儀、佐左衞門酒ニ給酔、叔父伊兵衞方江參、金子無心申懸及口論、脇差を拔切懸ケ、品々及狼藉候ニ付、捕押、番人附置候處、逃去候段無相違殊ニ江戸表江罷出候節、佐左衞門同道いたし罷出存命之段存乍、罷在伊兵衞方ニ而打殺、卽品川江流候旨、僞之儀取拵、人殺之申懸いたし候段不屆ニ付重追放、

御仕置附

右弟江對し人殺之申懸致候ものニ御座候間、人を殺候旨申懸いたし候もの、一通り之申懸之御定ニ而重追放與御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

入墨之上重追放

安永八亥七月右京大夫殿御下知

一備中國乙島村傳藏外貳人、御材木伐採候一件之內、

山村信濃守懸り

守屋彌惣右衞門御代官所備中國淺口郡乙島村百姓　傳藏

此傳藏儀、薪ニ差支候迚、御林江立入、桐六本盜伐いたし候段不屆ニ付重追放、

御仕置附

右御定書ニ、御林之竹木申合盜伐致候者頭取重追放、頭取ニ准じ候もの中追放、同類過料右之通有之、此ものは壹人ニ而御林木伐採候間、頭取之御定ニ而重追放與御仕置附仕候、

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永元辰七月右近將監殿御下知

一下總國市川村百姓小兵衞悴無宿河右衞門御構之地江立入候吟味

朱書手限　安藤彈正少弼懸

伊奈半左衞門御代官所下總國葛飾郡市川村百姓小兵衞悴　當時無宿河右衞門

此河右衞門儀、敲之上中追放御仕置相成候身分ニ而御構之地江立入、其上村役人を可致殺害抔及雜言、叔母聟佐平次方江踏込あばれ候段不屆ニ付、入墨之上重追放可申付哉、

御仕置附

此者は度々あばれ所を爲騷候ものニ付、當四月廿七日敲之上中追放御仕置申付候處、同五月十六日居村江立歸り、あばれ候儀ニは無御座候得共、御構之地江立入候計ニは無之、村役人を可致殺害抔雜言申、殊ニ叔母聟佐平次方江踏込、又候あばれ候段御仕置を不相用ニ相當り可申哉ニ付、右御定之但書ニ准じ最前之御仕置より一等重く、入墨之上重追放と御仕置附仕候、

敲之上重追放

安藤彈正少弼懸

〔的例黃紙之寫〕重追放

安永二巳八月右近將監殿御下知

一武州上瓦葺村懸渡井御普請御材木之儀ニ付同國向山村外三ケ村一件之內、

大岡伊織知行同國同郡宮下村名主　小平次

宮村孫左衞門當分御預り所武州足達郡向山村名主　政右衞門

此政右衞門、小平次儀、御材木車與乍存、喜平次同意いたし、百姓ども大勢差出右車差留御普請役ら兩度迄呼出候節も不罷出始末、一同不屆ニ付、兩人とも敲之上重追放、

右御仕置附

右差當例相見不申、遺恨を以十人以上結徒黨致狼藉諸道具損さし候もの、頭取は重追放、荷擔人所拂之御定ニ見合、遺恨を以徒黨致候ニは無御座候得共、欲心ニ拘り、其上對公儀候儀ニ付、右御

中追放

定ゟは格別不届ニ御座候間、右頭取之御仕置ゟ重遠島、政右衛門小平次は荷擔人ニは無之、同意いたし候ものニ御座候間、敲之上重追放と御仕置附仕候、

〔御定書百箇條〕裁許幷裏書判不請者御仕置之事

（從前々之例）一裁許不請者　中追放〇略中

（同追加）一裁許相濟候儀ゟ内一證にて不用破候者　中追放

〔御定書百箇條〕關所を除山越致候者幷關所を忍通候もの御仕置之事

（從前々之例）一口留番所を女を連忍通り候者　中追放

但女ハ領主江可引渡、

〔聽訴秘錄〕二貞享二年三月十八日

一女中山崎事、不届ニ付而御追放被仰付之、〇略中

仰渡之次第

申渡之覺

一今度山崎儀、中性院事ニ付而不謂義を取持仕候段、不届千萬ニ被思召候、依之追放被仰付もの也、

山ざき

右之段、山崎勘解由宅江、御留守居内藤出羽守、酒井能登守相越申渡之、

御追放之所々　江戸十里四方　京都　大坂　堺　奈良　伏見　大津　東海道　日光街道　甲府　房州　紀州　水戸

○按ズルニ、是ハ卽チ中追放ノ構地ナリ、蓋シ百箇條ノ制定以前ノ定ナラン、

〔御仕置裁許帳〕入謀書謀判仕者之類

元祿十二年卯四月廿六日

壹人源六　是ハ富澤町甚兵衞旅人、江州大津寺町源左衞門養子、此者養父源左衞門、同國膳所ニ罷在候甚兵衞、茂兵衞、幷手代利左衞門と申者方江、米代金爲手付、金貳百五拾兩相渡候由之出入ニ付、證文幷通帳ニ押候源左衞門判形致相違候ニ付、於評定所僉議之上、不届之仕形ニ付、當二月十四日、評定所ゟ源左衞門牢舍申付候、依之此者儀養子故父一所ニ罷在候上ハ、養父之仕形存候哉と度々召寄遂僉議候處、四年以前子八月、源左衞門方へ養子ニ罷越候處、曾而樣子不存候由申候得共、源左衞門不届ニ付、此者儀も今日牢舍、

右之者於評定所　江戸十里四方　山城國　大坂　堺　奈良　大津　東海道　甲府　名護屋　和歌山　水戸　同卯五月六日追放

〔御仕置例類集〕一ノニ十九文政元寅年御渡

町奉行永田備後守伺

一上總國寄瀨村百姓久五郎悴茂兵衞後家不仁之取計いたし候一件

松平織部正領分上總國夷隅郡寄瀨村百姓久五郎悴茂兵衞後家　すて

右之もの義當二月晦日、江戸表江出元主人小船町三丁目四郎右衞門店、死失藤兵衞母うの方江七歳ニ相成候娘きくを連無給金ニ而相勤度旨申込候處、承知ニ而折節うの持病之積氣差發、此ものは介抱之致方兼而相辨居候ニ付、兩三日介抱致候内、きく儀一體病身ニ而歩行も陸々不相成、其上痢症差發候節ハ强泣、此もの手を不放、同三月三日夕方、うの癪氣强く差發、介抱致候處、其節きく泣出、外江連出、相宥候得共不泣止、人手を賴候事も不相成、右體病身之小兒有之候而ハ召仕申間敷、殊ニうの介抱も不行屆、其上國元江歸り候而も、勇幷實父共貧窮ニ而、長々厄介ニ相成居候も難儀ニ存右之義を存迫り、娘きく無之候はゞ、うの病氣介抱も存寄通りニ行屆可申與、一

途ニ存詰、きくを江戸橋上ゟ川中江投込候始末、元主人之病氣介抱致方存、右始末および候とハ乍申、人情ニ有之間敷、不仁之仕方不屆ニ付中追放、

此義娘きく罷在候而ハ、外江奉公住も不相成、國元江歸り厄介ニ相成候も難儀ニ存候由之申立も有之候得共、うの介抱難行屆故而已之心底ゟ差詰、きくを殺候儀共難申、併きく不罷在候はゞ、うの介抱も存寄通可行屆與之心取も有之、旁右始末および候ものニ付、非分無之實子養子を殺候親、短慮ニ而不斗殺候はゞ遠島與有之候御定江ハ難引當、先例相糺候處、此度備後守申上候例之外、差當相見不申、依之再應評議仕候處、右例之平次郎ハ死罪ニ可相成、致盜候ものニ候處、全く養父之困窮を可救心底ゟ仕成候故を以、御仕置弛ミ中追放ニ相成候儀ニ而、右段取ニ見合、非分無之子を殺候もの遠島之御定ゟ見おろし候得バ、今般之すて儀、輕追放ニ相當、尤一途ニ主人之介抱難行屆故與之心底ゟきくを殺候儀ニ候はゞ、親子之愛情をも打絶候程、主恩之厚を存候事ニ付、於義理ニ盜いたし候共譯違、前々段取等見合、御仕置附候筋ニも有之間敷候得共、主人之介抱不行屆與之存意而已ニ差迫候ニも無之候ニ付、例之段取同樣格別ニ弛ミ候も相當仕間敷候間、前書御定ゟ一等輕く伺之通中追放、

朱書評議之通濟

〔類例秘錄三〕一甲州上大野村入墨織兵衛、博弈一件、吟味中牢屋敷出火に付、引出候節逃去候始末吟味伺、

書面織兵衛先達而不屆有之依科、入墨之上敲御仕置に相成候後も不相愼、甲州駒飼宿外貳ヶ宿野田山中におゐて、名住所不存もの共手合に加り、廻り筒賽博弈度々致し、其上牢屋出火之節、番人引出候處、其儘不立歸始末不屆に付、中追放申付、御構場所徘徊致間敷旨申渡、證文取之可被差出候、則別紙御構場所書付、左之通相達候、以上、

戌六月

中追放　御構場所

江戸拾里四方　日本橋ゟ四方に五里宛

甲斐國

右之場所徘徊すべからざるもの也

文政九年六月

〔嘉永明治年間錄八〕安政六年十月七日、飯泉喜内等三十七人、死罪流罪等處刑各差アリ、○中略

御同人○鷹司殿御家來三國大學、中追放、○中略

三條殿御家來因幡守悴森寺若狹守、中追放、○中略

青蓮院宮御家來伊丹藏人、中追放、○中略

三條殿御家來森寺因幡守、中追放、○中略

三條殿御家來丹波豐後守、中追放、○中略

同町○信州松本町大名主茂左衛門、中追放、

廿七日、吉田寅次郎等二十三人、死罪流追放等各差アリ、○中略

常州茨城郡、鈴高野村、手跡指南、黑澤季恭事とき、中追放、○中略

二丸御留守居古賀謹一郎家來藤森恭助、中追放、

入墨之上中追放

〔御定書百箇條〕巧事、かたり事、重キねだり事致候もの御仕置之事、

從前々之例一賣人買人を拵似セ物商ひ候もの　入墨之上中追放

〔御仕置例類集一ノ八〕文政八酉年御渡

火附盜賊改長井五右衛門伺

一南品川宿三丁目金次郎悴鐵五郎博奕又はねだり事いたし候一件、

南品川宿三丁目佐兵衛店金次郎悴　鐵五郎

右之もの儀、ゆすり事可致と、所々町家見世江罷越、博奕相催候由及承候間、手合之もの同道致可参間、宅貸呉候様跡形も無之儀を申、或は致口論候砌、中江立入呉候得共、見廻にも参不申候迚、難題申掛、見世之邪魔に相成候様、彼是申募、銀子ゆすり取、右銀子不残遣捨、又は品川邊地名不存海邊汐之干潟に而、船乗體之もの五六人手合に加り、廻り筒に而五拾錢百錢賭之籌博奕致両度候段、不届に付入墨之上敲、

但親金次郎江引渡

此儀致博奕候科は、寛政六寅年之御書付に而重敲に相當ねだり致候方重々不届に御座候、右ねだり致し候段吟味書之趣に而は、都合三度に而、金三分ねだり取候由に有之、御定書巧成儀申懸、度々金子等かたり取候もの、金高雑物之不依多少、獄門と有之候處、巧候と申程之儀にも無之、殊全くかたりには無御座、ねだり致候ものに付、寛政五丑年小田切土佐守町奉行勤役之節、伺之上御仕置申付候、長五郎屋敷佐助店吉五郎事、こなみ源藏儀、六之助其外之もの共と連立、嶋田正甫家前相通候節、錢之音致候を承、博奕可有之と申、一同正甫方江立入彼是六ヶ敷申掛、金弐分弐朱ゆすり取、弐朱宛致配分、又は壹人立町屋四ヶ所江罷越、金子無心申掛、及断候迚彼是六ヶ敷申罵、金錢ねだり取、都合三分三百文は追々酒食雑用等に遣捨候段、不届に付入墨之上重追放申付候例有之、右は申合罷越候儀等も有之、一體之始末右例々品輕く御座候間、入墨之上中追放、

朱書　評議之通濟

〔御定書百箇條〕申掛いたし候者御仕置之事

敲之上中追放

前々ノ之例

一御褒美可取巧にて僞之致訴人候者　敲之上中追放

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

從前々之例

一あばれ候て町所をさわがし候もの、

寛保二年極

但所々にてあばれ候におゐては敲之上中追放、

敲之上所拂

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永元辰十一月右京大夫殿御下知　松平對馬守懸

一武州幷塚村彦右衞門方ニ而及狼藉候、無宿勇七一件、　無宿　勇七

此勇七儀、彦右衞門母淨貞名前ゆくと申候節、得心も無之處、女房ニいたし度旨欠込訴いたし、殊ニゆく江對し申分無之段、伊奈半左衞門江書付差出候後、心外ニ存候迚、彦右衞門方江罷越、理不盡ニゆくを貰懸ヶ不立歸、親長兵衞江引渡ニ相成候處、ゆく剃髪いたし候由承り、又々彦右衞門方江罷越、脇差を抜同人江切懸及狼藉候段、旁不届ニ付、敲之上中追放、

御仕置附

右御定書ニ、あばれ候而町所をさわがせ候もの敲之上所拂、但所々ニ而あばれ候ニおいては敲之上中追放と有之、右勇七ハ所々ニ而あばれ候ニは無之候得共、理不盡ニ両度迄彦右衞門方江罷越、同人母ゆくを貰ひ懸不立歸、剰壹度ハ脇差を抜彦右衞門江切懸ヶ及狼藉候ニ付、右但書之御定ニ准じ、敲之上中追放と御仕置附仕候、　安藤彈正少弼懸

〔的例黄紙之寫〕中追放

安永三午四月、右近將監殿御下知、

一野州栃木村ニ而召捕候、湯澤四郎左衞門と名乗候圓八外壹人吟味一件、

戸田長門守領分野州足利郡足利裏町湯澤四郎左衞門と名乗候

此圓八儀、石州衣山大々神樂勸化之儀、御門主ゟ御免有之勸化として相廻し候旨、御師共印形致、願主四郎左衞門奥印いたし候書付、栃木町十五郎ゟ請取、勸物取立として、村々相廻り候上は、得與承糺可罷出處、無其儀、其上湯澤四郎左衞門と名乘帶刀致シ、小七を苛持ニ雇、繪符を差、村々相廻り、勸物取立候段、旁不屆ニ付中追放、

鉦町　圓八

右御仕置附

右御定書ニ、自分ニ帶刀いたし罷在候百姓町人刀脇差ともニ取上輕追放與有之、此ものは外不埒も御座候間、中追放と御仕置附仕候、

〔御仕置例類集一ノ三〕文政九戌年御渡

御勘定奉行伺

一長脇差を帶候無宿共御仕置當分改革之儀評議

當月七日致評議可申上旨被仰聞御渡被成候、御勘定奉行相伺候書面一覽仕候處、近來惡黨、無宿共次第ニ增長、脇差を帶、中ニハ四五尺位之大刀、鑓、鐵炮、仕込等致所持候もの、關東在々徘徊致、時時黨を結び喧嘩を催、刃傷および、農業等ニ罷出候、女子子供を取押、强姪および、或ハ寺院百姓家江相越、品々難題申懸、金銀貪取、又ハ途中ニおいて及殺害候故、農業ニ罷出候儀も安心不致、夜分も快寢いたし兼、良民悉難澁仕、其上百姓共內ニも若ものどもは心得違ひいたし、右惡風を見眞似、長脇差を帶、惡事致候もの追々相增候間、御仕置之儀、是迄之通ニ而ハ風儀立直り候ハ勿論、惡黨共相減候樣ニハ至リ申間敷、畢竟右樣長脇差を帶候惡黨共、召捕吟味之上、平生之强惡格別之聞有之候もの等ハ、佐州江水替爲人足差遣候得ども、是以當時之姿ニ而ハ、懲惡之筋ニ不相成候間、此上格別之嚴科ニも被處候はゞ惡黨ども恐怖いたし、百姓ども風儀も自ら惡業ニ不移樣罷成、無宿共之內ニも致改心候ものも出來、良民安堵致候樣可成行哉ニ付、長脇差帶、又ハ帶候儀無之抔申立候共、召捕候節致所持居、惡事ニ携候分ハ、當分之內、一般ニ死刑ニ被仰付候はゞ、取締ニも相成、風儀立直可申哉ニ付、當分之內、前書見込之趣を以、長脇差帶、惡事致候もの御仕置相伺、尤伺之通被仰渡候はゞ、長脇差を帶し步行、惡事致候もの共ハ重刑ニ被行候段、關東在々江觸置、其後召捕候ものゟ、改革之趣を以、相伺候樣可仕哉之段相伺申候、

此儀關東在々取締方、前以御勘定奉行おいて、精々心附候儀ニ御座候得共、追々惡風致增長、既當二月以來ハ、多人數徒黨を結び、鎗、鐵炮等をも致所持、强惡相募候次第ニ候上ハ、所詮一通りの儀ニ而風儀立直リ、良民安心致候樣ニハ相成申間敷、尤長脇差を帶、又ハ致所持居候とも、左迄之惡事不相顯もの、一般ニ死刑ニ被處候ハ、不隱樣ニも御座候得共、如何樣强惡有之候而も、其場所ニ而卽座召捕候歟、或ハ面體名前等、兼而相分有之候分ハ格別、先ハ誰々仕業與、聢與取留候儀無之、左候得バ嚴敷吟味可仕手掛無之候ニ付、長脇差致所持候ものニ而も、一通り博弈等白狀之趣を以、敲追放等之御仕置申付候事故、良民之惱不相止、追年惡黨相增候儀に有之、素素身分不相應之長脇差を好候程之ものどもニ候得バ、强惡致間敷樣無之右樣之もの、嚴科ニ被處候段ハ、万民之害を除キ候而已ならず、無宿共恐怖改心いたし百姓共も惡黨ニ不押移、年月不立內、風儀立直リ、一殺多生ニ而、則格別之御仁惠ニ可有御座、只今迄之姿ニ而ハ、關東在々手廣之儀、旁惡黨共滅可申期相見不申候間、長脇差を帶、又ハ致所持步行惡事いたし候もの共ハ、向後死罪、其外重刑ニ被行候旨、關東在々江相觸、其段認村每高札場、幷村役人宅前江、悉張置候樣申渡、其後召捕候ものより、當分死刑之積り、且長脇差を帶、又ハ致所持步行候而已ニ而、外ニ惡事無之分ハ遠島之積取調相伺、死刑ニ相成候分ハ、其場所々江科書捨札をも爲建可申儀與相心得候樣、御勘定奉行江被仰渡可然哉ニ奉存候、

輕追放

戌六月○再評議書略

〔御定書百箇條〕二重質二重書入二重賣御仕置之事
寛保二年極　名主輕追放
一田畑屋敷二重に質入致候者

〔御定書百箇條〕縁談極候娘と不義致候者之事
寛保三年極　輕追放
一縁談極候娘と致二不義一候男
但女ハ髪を剃親元江相渡

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事
寛保四年極追加　名主輕追放
一親殺シ候死骸見届候得共、物入を厭ひ、村役人等江相談之上、不二訴出一押隠候義顯おゐては、

〔御定書百箇條〕帶刀いたし候百姓町人御仕置之事
從二前々一之例　刀脇差共取上輕追放
一自分と致二帶刀一罷在候百姓町人

〔御定書百箇條〕御仕置に成候ものの之欠所田畑を押隠し候もの咎之事
寛保四年極　延享二年極　名主輕追放
一欠所に可レ成田畑地面押隠におゐては

〔的例黄紙之寫〕輕追放
安永二巳四月、佐渡守殿御下知、
一下總國新市場村百姓木工右衞門悴
中山伊勢守知行下總國香取郡新市場村百姓木工右衞門悴　木工之丞事　齋宮
安藤彈正少弼懸

此齋宮儀、木工右衞門跡株は妹きよ智養子いたし、相續り候積りニ而江戸表江出、侍奉公又は醫業杯いたし候とも、村方江立歸り帶刀いたし間敷處、木工右衞門方江參り逗留いたし帶刀ニ而歩行、妹きよ幷妹聟兵助を掠、殊ニ長持之内ニ有之衣類三ツ取出し、却而兵助夫婦盜出候抔申懸難二居遂一様ニ致し成し、其上作德米立木等我儘ニ賣拂、親江對し申爭ひ、村役人之申付をも不二相用一段、旁不届ニ付輕追放可レ被二仰付一哉、

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政四子年五月
松平和泉守殿御差圖
一駒込片町大圓寺天瑞寺内に女を差置候一件　駒込片町大圓寺召仕中間　甚助
右之もの儀、博奕之儀は嚴敷御觸も有之處、御法度相背、貳三錢賭之寶引又は七八錢賭之簸博奕兩度致し、其上惠忍より貰候餅菓子に中り食傷致し候を、毒をも入候哉と相疑、同人を打擲及び、且大圓寺女を境内に差置、不束成儀を見込、同人申付も不二相用一、不法我儘之勤方いたし候段、主人江對、不届之至に付輕追放、

町奉行　池田筑後守掛

〔御定書百箇條〕盜人御仕置之事
寛保二年極　敲之上輕追放
一家藏へ忍入候盜人に被レ賴、盜物持運、配分取候者、

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政元酉年十二月
松平和泉守殿御差圖
一武州鎌形村ニ而捕候無宿吉五郎一件　御勘定奉行　根岸肥前守掛
右之もの儀、盜賊吉五郎外貳人致盜候樣申勸候ニ致同意、其上右之もの共ゟ衣類脇差等貰候始末不届ニ付敲之上輕追放、

無宿　文次郎

右御仕置附
右盜惡事いたし候儀は無之候得共、吉五郎外二人儀盜可致旨申勸候ニ致同意、右盜賊ども衣類脇差等貰請候始末は、家藏江忍入候盜人ニ被賴、盜物持運配分取候もの、敲之上輕追放之御定

ニ引當同樣之趣意ニ御座候間、敲之上輕追放、

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人ニ立、致ニ不埒一者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

天和二年戌十月廿五日

壹人與五左衞門　是は喜左衞門町八左衞門店之者、此者請に立、大塚彌助と申者を、植村右衞門佐方江奉公に出し置候處、白壁町彦兵衞と申者、彌助元請人に而辨金有之由、彌助主人江彦兵衞斷候に付、主人ゟ金子五兩餘出し埒明候處に、彌助致ニ欠落一候由にて判有之候に付、彌助を可ニ尋出一旨證文申付候得共、不ニ尋出一候間、日切度々相延候、其外二ヶ所江奉公人之請に立候處、其者共致ニ欠落一候に付、評定所ゟ籠舍、

右之者、日本橋ニ三日晒、同戌十月廿八日耳をそぎ追放、

同日

壹人吉右衞門　是は赤坂裏傳馬町六右衞門店之者、此者新肴町半左衞門方より、人請之出入有之ニ付、手鎖を掛置候處、其外方々より、人請出入有之候、不ニ埒明一候ニ付、今日評定所江召出、穿鑿之上手鎖を外シ籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同戌十月廿八日耳をそぎ追放、

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立致ニ不埒一者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

天和二年戌十月廿五日

壹人七兵衞　是は南小田原町貳丁目安兵衞店之者、此者請ニ立、稻葉出羽守方江笠松傳左衞門と申者を奉公に出置候處、主人方より暇出シ、返リ金拾貳兩餘有之候ニ付、主人方より斷有之不ニ相濟一候内、傳左衞門致ニ欠落一候、其後於ニ品川一見付預ケ置候由申候得共、樣子不埒ニ付、其外三ヶ所之奉公人之請ニ立、返リ金滯リ不ニ相濟一候ニ付、評定所より籠舍、

晒之上耳をそぎ追放

晒之上鼻をそぎ追放

右之者日本橋ニ三日晒、同月廿八日、鼻をそぎ追放、

同日

壹人角兵衞　是は神田紺屋町市左衞門店之者、此者請ニ立、安兵衞と申者を、麻布市兵衞町德左衞門方江奉公ニ出シ置候處、致ニ欠落一候ニ付、主人訴訟申出、遂ニ穿鑿一候處、不屆之義有之、其外六ヶ所奉公人之請ニ立候處、其者共、致ニ欠落一返リ金滯不ニ相濟一候ニ付、評定所より籠舍、

右之者日本橋ニ三日晒、同月廿八日、鼻をそぎ追放、

〔御仕置裁許帳五〕博奕を打者之類

寛文八年申八月廿八日

壹人德右衞門、是ハ稻葉美濃守殿領分、本町甚兵衞門下人、相州小田原筋達橋町庄右衞門後家召仕博奕打穿鑿之儀ニ美濃守殿ゟ捕來ル付籠舍、

右之者同申十月十二日在所幷江戸廿里四方追放、

〔御仕置裁許帳八〕似せ五人組似せ名主仕者之類幷金子肝煎仕者、

寛文九年酉九月十三日

壹人八左衞門、是ハ新肴町小八郎屋守同町宇右衞門似せ五人組を作り、三十間堀四町目權右衞門店吉兵衞方ゟ金子を借リ候節之肝煎成ル故、穿鑿之内、當七月ゟ手鎖を懸ケ町之者ニ預ケ置候處出入不ニ埒明一候ニ付籠舍、

右之者戌二月十九日江戸日本橋ゟ廿里四方追放、

〔御仕置裁許帳三〕武士方辻番人死骸を捨る者同隱密に埋置者幷手負を見損じ通す者或人を討立退者不ニ留置一者、

寛文十年戌三月十八日

江戸二十里四方追放

入墨之上江戸二十里四方追放

壹人清右衛門　是は野村彦大夫支配、牛込御門外御堀端之辻番之者、今月十三日、辻番近所御堀之内に、死人うば有之候を、御歩行目付衆野村伊大夫方江致斷、差圖無之處捨候科により、土井能登守殿より斷ニ付、穿鑿之内牢舍、

右之者、同戌四月十八日、江戸貳拾里四方追放、

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寛文五年巳六月十六日

壹人彌右衛門　是は無宿、此者松浦肥前守家來鷺嶋四五右衛門方江、久助と申中間之請に立出し候處、久助致欠落候、此者も致欠落候處、今日湯嶋天神前に而、主人見出し捕來に付籠舍、

右之者、額に惡之字を彫付、午十一月廿九日、江戸廿里四方追放、

江戸十里四方追放

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一江戸拾里四方追放　日本橋ゟ四方江五里ツヽ

延享元年極

但在方之者ハ居村共構欠所無之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、尤年貢未進等有之候はゞ家財とも欠所、

〔御定書百箇條〕質地小作取捌之事

寛保元年極

一御朱印地寺社領屋敷共讓渡質に入候寺社　江戸十里四方追放

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保元年

一取逃之儀乍存、奉公人計隱置候請人人主、　江戸十里四方追放○中略

寛保元年

一自分之名を替、奉公人之請に立候もの、　江戸十里四方追放○中略

從前々之例

一寄子致欠落參候儀存候得共、盜人と不存宿致し雜物質置主に成、世話致遣、配分は不取者、　江戸十里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕捨馬仕者之類、幷馬を打殺者、同怪我にて殺者、附酒狂にて切殺者、

元祿三年午四月十八日

壹人平兵衛　是は内藤上野介組、服部又次郎知行所、常陸作屋村之酒屋、此者馬を打殺候に付、可爲致牢舍之旨、大久保加賀守殿被仰渡、上野介家來荏田藤大夫、又次郎家來稻川角左衛門召連來る付牢舍、

右之者、同午五月六日、江戸十里四方幷在所共に、於評定所に追放、

〔御仕置例類集三ノ六〕寛政四子年二月

戸田采女正殿御差圖　町奉行　池田筑後守掛

一檜物町與三右衛門衒致候一件　通三町目平次郎店　平藏

右之もの儀、與三右衛門江馴合配分取候儀は無之候得共、與三右衛門儀、南嶺荷物を持參候上は、與三右衛門計兩度迄立歸り候はゞ怪敷義ニ有之處、得與樣子も不相糺宿致し、其上半左衛門方江南嶺ゟ預り置候衣類道具等、衒取り候儀與は不存候得共、與三右衛門任申旨立會取戻させ、右品々質入賣拂候、度々致世話殊ニ與三右衛門江店借受遣し、右請人ニ相立罷在候儀とも、旁不屆ニ付、江戸拾里四方追放、

右仕置附

右南嶺荷物を持參り候與三右衛門義、南嶺を見失ひ候由ニ而、兩度迄立歸り候はゞ怪敷儀ニ有之候間、得與樣子も可相糺處、無其儀宿致し、殊更半左衛門方江、南嶺ゟ預置キ候衣類道具等取戻候間、立會候樣與三右衛門申ニ隨ヒ、衒立候儀與は不存、立會取戻させ、質入又は賣拂候、度々世話いたし候儀ニ而、馴合配分取候儀ニは無御座候間、御定書ニ、寄子欠落いたし參り候儀存候得共、盜人與不存宿致し、雜物質置主ニ成致世話遣、配分不取もの、江戸拾里四方追放與有之候、此もの之寄子ニは無御座候得共、南嶺店請人ニも相立、又は與三右衛門店持候節も、請人ニ相立罷在候

身分ニ御座候間、右御定ニ見合、江戸拾里四方追放、

江戸七里四方追放

〔御仕置裁許帳十〕御法度之新酒を造商賣仕者、幷請賣仕者、肝煎仕者、

寛文十二年子十一月二日

壹人、伊兵衛、是ハ南槇町長兵衛手代之者、此者肝煎ニ而、雉子町酒屋小左衛門方ゟ箔屋町養運店小兵衛所江新酒うらせ候ニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、同月十五日、日本橋ゟ七里近邊追放、

江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳五〕博弈を打者之類

寛文十三年丑五月廿一日

壹人、道清、是ハ馬喰町壹町目吉兵衛店願人碩庵弟子、當月七日夜、神田紺屋町三町目六兵衛店きれの清兵衛所ニ而致博弈候處、此者被剝候出入ニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、丑十二月十三日、江戸日本橋ゟ五里近邊追放、

鼻をそぎ江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寛文五年巳六月十五日

壹人半左衛門　是は富澤町新道八右衛門店之者、此者拾ヶ所之請に立、奉公人を出し致欠落候、出入不相濟候に付、家主訴訟申に付籠舍、

右之者、午十月十三日、鼻をそぎ江戸五里四方追放

〔御仕置裁許帳九〕奉公人之請人に立、致不埒者之類、幷請人之方江參あたけ申者、

寛文六年午正月廿八日

壹人、長左衛門、是ハ本郷貳町目平兵衛店之者、此者儀永井外記、加藤市十郎、万年佐左衛門、石川美作守、南鍛冶町長左衛門、湯島三町目喜右衛門、右六人江人請ニ立、不埒明候ニ付籠舍、

右之者同午十一月十五日、鼻をそぎ江戸五里四方追放

江戸三里四方追放

〔御仕置裁許帳八〕犬を殺者之類、同疵付る者之類、幷犬之子を捨る者、損ジ犬を捨る者、同失者、

寛文十三年丑五月七日

壹人、權兵衛、是ハ小石川歸雲寺門前次左衛門店之者、此者方々ニ而犬を殺候由訴人有之候ニ付、先月廿九日、家主ニ召連參候樣ニと申付候處、同日宿を罷出、行衛不相知候由申出、尋出シ候樣ニと家主ニ申付候へバ、今日糟壁町ニ而見出シ捕來ルニ付、穿鑿之内籠舍、

右之者、同丑六月廿日、日本橋ゟ三里近邊追放、

江戸拂

〔御定書百箇條〕御仕置仕形之事

從前々之例

一江戸拂

品川、板橋、千住、本所、深川、四ツ谷大木戸、より内御構

但町奉行支配場限り

延享元年極

但右同斷〇在方之者は、居村共構、欠所無之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、九年貢未進等有之候はゞ、家財とも欠所、

〔寶暦集成絲綸錄三十〕延享四卯年六月

三奉行江

此度高井但馬守家來、盜物出所も不糺質物ニ差置候ニ付、過科ハ相止、江戸拂申付候、惣而武家之家來、右體之科有之候節ハ、右之通ニ候間、向後其趣ニ可被心得候、

延享四卯年十二月

三奉行江

武家之家來人ニ手疵負せ、療治代差出候御仕置相當之者も、向後江戸拂申付候樣可被心得候、

十二月

〔憲教類典四ノ六評定〕寛延元戊辰年二月

江戸拂御仕置之儀只今迄ハ本所深川罷在候儀ハ、相構不申候得ども、向後江戸拂御仕置相當之ものハ、江戸幷本所深川町奉行支配限リ構之地可申付事、

右之趣御定書可被書入候

〔御定書百箇條〕評定所前箱江度々訴狀入候者之事

寛保元年極追加　一度々箱訴いたし手鎖に成候處、差免候以後、又候訴狀入候もの、町在共江戸拂

從前々之例

但宿預亦は手鎖申付候處、願不相止ものも前同斷、

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事

寛保二年極　一奉公人病氣に付、宿江下候處、致快氣候へ共、不相歸外江奉公に於て出ば、給金不相濟候ば江戸拂

寛保四年極追加　一組合人宿には無之判form有合之判form好身之者に付、人主印形は有合之判form自分請に立出置候、奉公人致欠落候處、主人方江ば不相歸又候請に立外江於奉公出ば、請人欠所同罪

但給金相濟候とも請人過料、奉公人手鎖、

〔御定書百箇條〕捨子之儀に付御仕置之事

寛保二年極　一捨子有之を、内證にて隣町等江又候捨候儀於顔には、名主江戸拂

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

寛保二年極　一離別狀不遣後妻を呼候もの所拂

但利欲之筋を以之儀に候はゞ、家財取上江戸拂、

寛保四年極追加　一他之女と致密通、又は町人等、下男ハ江戸拂

〔御定書百箇條〕盜物質に取、亦ハ買取候者御仕置事、

寛保二年極　一紛失物町觸之節隱置候もの　家財取上江戸拂

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事

享保七年極　一酒狂にて人に爲手負候もの　致統附候者、平愈次第療治代爲差出可申事、○中略

享保七年極療治代

一疵之多少によらず　武家之家來江戸拂

從前々之例

但シ町人百姓ハ右に准じ、療治代爲相渡可申事、

〔御定書百箇條〕牢抜手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事

享保元年極　享保延享二年極　一御構有之候者を隱差置候もの　追放ものを隱置候ば江戸拂

〔御定書百箇條〕辻番人御仕置之事

享保八年極　一廻リ場之内、捨子、亦は重病人有之候節、外江捨候番人、死罪

寛保二年極

但倒死有之を押隱し取捨候においてハ江戸拂

〔御仕置裁許帳〕似セ五人組、似セ名主仕者之類幷金子肝煎仕者、

寛文七年未五月十八日

壹人又兵衞、是は赤坂裏傳馬町貳丁目長七店之者同町喜左衞門五間口之家を質物に入、金子を借申候時分、爲似五人組に罷成、手形に致判を候に付籠舍、

右之者、未八月十八日町奉行支配を遂方

〔向方御赦例書四〕

享保十一年十二月廿五日

一江戸徘徊仕間敷旨申渡候者

御本丸附女中ふしの御菜之者

下谷廣德寺門前大嶋平左衞門方ニ元居候

佐五兵衞

右之者共女中宿より之届物幷宿江之文箱其外品々持罷通候節平川口御門外腰掛ニ而佐五兵衛儀多葉粉給候を一ツ橋御門番井伊因幡守足輕出會制候得共不相用及口論番人を敲候仕形不届ニ候甚助儀は譯も不存棒を持佐五兵衛取合候場江參り致荷擔候ニ付足輕敲候得ば却而手向ひ致し不届ニ付兩人共江戸徘徊仕間敷旨申渡、

外壹人

〔御仕置例類集三ノ四〕寛政二戌年八月

町奉行　池田筑後守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一池之端仲町丈六隱賣女一件

右之者儀たかを抱置去酉十月以來御法度相背隱賣女之稼爲致當四月八日右たか儀家出いたし捨五郎方江逃參候ニ付取扱人を以對談および候得共不相整候を心外ニ存知ル人長吉源次郎を相頼同五月三日朝捨五郎方江參りたかを相返候樣申候處同人儀有合候木切ニ而打掛候ニ付此もの長吉倶ニ捨五郎を致打擲候上同人裸之儘八幡門前番屋裏物置江連參有合候細引ニ而卷置候處相侘候ニ付無間も源次郎繩を解遣右體及口論町内騷動いたし候儀は不埒之商賣いたし候ゟ事起候ニ付後難之程を恐れ又候取扱人共江任置右出入致內濟其後外江店替いたし候儀ども旁不埒ニ付江戸拂○置附御仕略

池之端仲町忠兵衛店　丈六

町奉行　池田筑後守掛

〔御仕置例類集二ノ五〕文化四卯年御渡

甲府勤番支配伺

一甲州江草村新左衛門箱訴いたし候一件御仕置評議○略申渡

野田松三郎御代官所甲州巨摩郡江草村　新左衛門

右度々箱訴いたし手鎖成候處差免候以後又候訴狀入候もの町在とも江戸拂ト有之御定ニ見合甲府を構江戸拂、

〔御仕置例類集二ノ十一〕文化六巳年御渡

駿府町奉行伺

一駿州沓谷村龍雲寺富突ニ紛敷企致し候一件

駿州安倍郡慈悲尾村曹洞宗增善寺末

曾我伊賀守知行同州有渡郡沓谷村龍雲寺住持　林英

右之もの儀寺修復助成之ためニ候迚世話人札賣等相頼七會講と唱札數四百貳拾番紙札ニいたし一枚錢四百文宛ニ賣渡し當り闔之もの江相渡候始末富突ニ紛敷いたし錢壹貫文より貳拾五貫文迄員數を定當り闔六拾番竹を振闔ニいたし錢壹貫文より貳拾五貫文迄員數を定當り闔之もの江相渡候始末富突ニ紛敷いたし方不届ニ付駿府幷居村を構江戸拂、

敲之上江戸拂

〔御定書百箇條〕あばれもの御仕置之事

元文五年極一御城內にて口論之上、拾人以上敲合、つかみ合候もの、

同荷擔いたし候もの敲之上江戸拂

〔御仕置例類集三ノ九〕寛政元酉年五月

町奉行　初鹿野河內守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一石川左門中間利兵衛あばれ候一件

赤坂御門番石川左門中間　利兵衛

右之もの儀市右衛門方に而蕎麥代滯り有之故傍輩中間三平蕎麥誂候節現金に無之候而は差越不申旨三平立腹之體にて申聞候に付市右衛門致し方不心能存遺恨を含同人召仕權八擔通り候蕎麥之箱を突落逃去道具を損其後又候權八金藏江無體之儀申懸候上權八角立相立候を憤り市右衛門見せ迄追駈參り同人方に而被捕縛候始末御門番所中間相勤候身分に而別而不埒に付敲之上江戸拂○評議書略

〔御仕置例類集三ノ五〕寛政六寅年六月

太田備中守殿御差圖

一武州青梅村宇兵衞相手糀町七五郎女房のえ外壹人紛失物出入一件

糀町拾三丁目清助店　七五郎

右之もの儀、兼而定宿ニ致候、青梅村宇兵衞より預り候金百八兩貳歩餘懷中致欠落、右之内酒食遊興ニ遣捨、又は幸手宿ニ而木綿反物調、江戸表ニ而賣候はゞ利潤有之べく、左候はゞ右利潤を以宇兵衞江償ひ相詫可申與、木綿商人之體ニ致成し、同宿平藏方ニ而木綿買請、江戸表江相廻候始末不屆ニ付、死罪ニも可申付候處、遣捨之金子親類共ゟ不殘償、願人宇兵衞儀も年來定宿ニ致シ、度々金子等預ケ候處、是迄不束之儀も無之間、全之心得違與存候付、助命相願候段、再應申立候間、敲之上江戸拂、

右御仕置附

右數年致定宿候、武州青梅村宇兵衞ゟ預り候金子百八兩貳分餘を取出、致欠落遊興ニ遣候處被召捕、遣ひ殘之金子、其外遣ひ先ゟ取上ゲ候金九十六兩壹分貳朱餘之外、遣ひ捨ニ成候拾貳兩餘は、親類共より償ひ、願人宇兵衞ゟ助命相願候儀ニ御座候、手元ニ有之品を不斗盜取候類、拾兩以上死罪、拾兩以下入墨敲之御定も御座候得共、預り候金子を持出候儀ニ付、右御定ニも難引當、諸商物代金受取、其品不渡、外江二重賣致シ、又は取次可遣品質ニ置、幷賣拂、或は金銀橫取致候もの拾兩以下入墨敲、但先入牢申付、代金又は商物ニ而成共於相濟は、拾兩以上は江戶拂與有之ニ准ジ、此もの儀は一旦致欠落候不屆も有之候間例は不相見候得共、敲之上江戶拂、

【憲敎類典四ノ五評定】享保六辛丑年五月

左之書付、當御代被仰出候留帳有之、略○中

【公裁秘錄】

御勘定奉行
評定公事
根岸肥前守掛

一追拂、追放とは譯達申候、追放は右之通御構場所、輕重相定申候、追拂は其所を追拂申候迄にて

所拂

御座候、刀脇差も渡シ遣申候、

四月

【憲敎類典四ノ五評定】享保六辛丑年五月

御仕置者之內、追放之儀、向後所拂と唱可申候、

丑五月

右ハ五月十二日、河內守殿御勘定奉行江御渡被成候、

【公裁秘錄】

追拂唱之事

一御仕置者之內、追拂之義、向後所拂と唱可申候、

丑五月○享保六年

○按ズルニ、是ハ重中輕追放ヲ總稱シテ所拂ト云フニアラズ、追拂ヲ所拂ト唱フルコトナリ、故ニ本書ハ追放ヲ追拂ニ作レリ、

【御定書百箇條】御仕置仕形之事

一所拂（從前々之例）延享元年極

但欠所無之、然共利欲に拘り候類は、田畑家屋敷欠所、尤年貢未進等有之候はゞ家財共欠所、

【御定書百箇條】隱鐵砲有之村方咎之事

寬保元年極

一隱鐵砲致所持候者

同

一隱鐵砲打候もの

【御定書百箇條】二重質二重書入二重賣御仕置之事

寬保二年極

一田畑屋敷二重に質入致候者○略中

丹羽遠江守○略中

在方ハ居村
江戶町人ハ居町
拂

關八州之外
所拂

右同斷

加判人
所拂

〔御定書百箇條〕奉公人請人御仕置之事
寛保元年極
一人之仕業と相見候寄子之變死を不存分に致候もの　所拂

〔御定書百箇條〕捨子之儀に付御仕置之事
寛保二年極
一捨子有之を内證にて隣町等江又候捨候儀於顯には　當人　所拂

〔御定書百箇條〕似秤、似升、似朱墨拵候もの御仕置之事
寛保二年極
一似朱墨拵候もの　家財取上　所拂

〔御定書百箇條〕人殺幷疵付御仕置之事
從前々之例追加
一同(邪曲を以)人殺を取扱之もの有之、内證にて事濟殺候者を爲立退候儀迄乍存不訴出においては、　組頭　所拂

〔御定書百箇條〕酒狂人御仕置之事
享保七年極
延享二年極
一酒狂にて人を致打擲候もの　療治代難差出ものは諸道具取上、逢打擲候もの江可爲取、諸道具も無之償不成身上之ものは所拂、
同
同
一酒狂にて諸道具を損さし候者ハ　損失之道具償可申付、不成償身上之ものは所拂、

〔御定書百箇條〕牢拔手鎖外し御構之地江立歸候もの御仕置之事
享保元年極
延享二年極
一御構有之候者を隱差置候もの　江戸拂のもの隱置候はゞ　所拂

〔御定書百箇條〕不緣之妻を理不盡に奪取候もの御仕置之事
寛保四年極
一聟養子不孝不埒有之差戻候以後、外之養子いたし、娘に嫁合候節、先夫荷擔人を催し參、娘を奪取においては、　荷擔人内頭取田畑家財取上　所拂

〔御定書百箇條〕御仕置に成候もの之欠所田畑を押隱し候もの咎之事
寛保四年極
延享二年極
一欠所に可成田畑地面押隱においては　組頭　所拂

〔御定書例書〕死罪可成盜人を宿いたし候者幷村役人御仕置の事
延享二丑年十二月
一同類は無之死罪に可成盜人を乍存宿致し、配分は不取候得共、宿錢貰ひ候もの、　田畑取上　所拂

〔科條類典下七〕一堺町加兵衛申上候、私店茂兵衛と申者、吉十郎と申野老抱置賣遣候出入有之、御穿鑿之上、籠舍被仰付、出牢之刻、名主喜兵衛支配之町中幷木挽町御拂被成、野老をば親に被下候由、被仰付奉畏候、若右之町中に罷在候はゞ、承次第急度可申上候、爲後日家主五人組名主判形仕候、
寛文六午年六月九日
家主　加兵衛
忠兵衛
五人組　五兵衛
八右衛門
名主　喜兵衛

右之もの所拂之始りと相見え申候、是より以前所拂無御座候、

〔御仕置例類集三ノ一〕寛政三亥年十一月
松平伊豆守殿御差圖
町奉行　池田筑後守掛
一御鳥見飯田久太郎不埒之致取計候一件
伊奈右近將監支配所武州葛飾郡西葛西領龜有村名主市五郎親　新四郎
右之もの儀、先達而不埒有之、名主役後見取放ニ相成候身分ニ而、浚御普請願等取持致、其上右人足出方足錢取極等之儀、忰市五郎ニ成代リ、内談之趣を以、小前百姓共呼寄申談、又者右御普請申

渡之序江出、彼是卒忽之存寄等、一存ニ而申立候儀共、旁不届ニ付村拂、

〔公裁秘錄〕欠所心得之事〇略中

文化十亥年、東海道藤澤宿旅籠屋不届有之、道中奉行掛ニ而、田畑取上、所拂申渡有之節、右宿者坂戸町大久保町大鋸町と三ヶ町ニ而名主三人有之、町限支配いたし候處、右御仕置ニ成候ものは、大久保町ニ住居いたし候間、居町計ニ候哉、又者一宿不殘拂之事ニ候哉、差添宿役人より心得方相伺、取調之上村方と違ひ、宿場之儀、市中も同樣ニ而一宿拂候者不相當ニ付、居町計可拂旨申渡候之事、

但道中方取扱ニ者、道中筋を構候儀も有之、一般ニ者難差極候、

敲之上所拂

〔御定書百箇條〕（從前々之例）あばれもの御仕置之事

一あばれ候て町所をさわがし候もの

〔御仕置例類集三ノ三〕天明八申年十二月

敲之上所拂

御勘定奉行　根岸肥前守掛

鳥居丹波守殿御差圖

一能州黒島村沖船頭善兵衞船與僞不正之取計致し候一件、〇略中

同國同郡〇佐渡國加茂郡　小木町　新五郎

三甫藏

左内

右之もの共儀、善兵衞方買請候諸品運送荷物與ハ不存候得共、船主善兵衞賣物之由、同人事直次郎與名乘申聞候節、得與糺も不致、買請其上役人改請候而ハ手間取候間、隱買致與候樣善兵衞申聞候ニ付、掟を相背、内々ニ而諸品貳拾壹箇致隱買、殊ニ難船吟味有之候段承、右之趣及露顯候而ハ、身分難立候ニ付、役錢相納度旨、清左衞門江相賴、内々ニ而事濟浦目付水津番所役之もの早速承屆候迚、禮金差出候始末ハ不屆ニ付、敲之上所拂、

御差圖

入墨之上敲

右御仕置附

右前書清左衞門同樣之趣意ニ而當人に御座候處、佐州之掟を背、船荷物隱賣いたし候ものニ御座候、清左衞門ニ見合、格別品不宜陰物買候もの幷乍存又買致し候もの、入墨敲之御定も御座候間、敲之上所拂、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政二卯年御渡

御勘定奉行土屋紀伊守伺

一武州薄村寅次郎宅に而及狼藉候無宿四郎兵衞一件、

松平伊勢守知行武州秩父郡小林村　百姓林藏弟　幸七

右之もの儀、武州下鹿野村地内鎭守境内物陰におゐて、名住所不存もの共三四人手合に加り、廻り筒錢博奕いたし、其上無宿四郎兵衞博奕相催候由申聞候迚、同國薄村寅次郎宅江罷越、同人と四郎兵衞口論および立騷候節、同人江荷擔いたし候には無之候とも、寅次郎隣家之もの共駈付、一同差押懸候迚、可逃去と其場に有之候棒を取振廻し立騷ぎ、五左衞門外壹人江乍聊疵爲負候始末旁不届に付敲之上所拂〇評議書略

〔御定書百箇條〕（從前々之例）御仕置仕形之事

一門前拂

〔憲教類典五ノ十四町奉行〕享保六辛丑年五月七日

本行所門前方掃遣す

門前拂

加納遠江守殿
町奉行江
所拂　是ハ只今迄追放と申候を、向後は所拂と可申旨、
門前拂　是ハ唯今迄之通、門前拂と可申旨、
右之通向後唱可申旨被仰渡候、以上、

〔公裁秘錄〕無宿幷敲成候者之事
御當地出所無宿罷成、引取人無之、又ハ入墨歟敲かニ成候以後、渡方も無之者は、門前拂可申付候、若其以後又々惡事仕候はゞ、伺之上死罪可申付事、○中略
右之通伺之上相極候事
享保九辰年

〔御定書百箇條〕無宿かた附之事
享保九年極
一引取人無之ものは
享保九年極
一遠國もの行倒之類
從前々之例
但在所にて科有之、又ハ欠落幷村方親類舊離いたし、好身之もの於無之ハ門前拂、
門前拂
溜預病氣快氣之上
萬石以上は領主江可相渡、御料幷萬石以下は其所之親類呼出可相渡事、

〔御仕置例類集一ノ十七〕文政四巳年御渡
京都町奉行伺
一浪人小田富五郎與申立候、無宿富五郎外貳人儀、攝州藍本庄村藤右衛門外壹人江手疵爲負候一件、
江戸市ヶ谷本村町御小人金松忠兵衛勘當悴無宿浪人　金松三次郎
右之もの儀、小田富五郎、三好官次郎同道錢合力乞請徘徊いたし候途中、丹州多紀郡矢代奥村ニ

而酒給、殊之外醉、往還道端に休息、此もの儀ハ、其儘醉臥罷在、往來人藤右衛門、津右衛門同道互ニ咄合申通り候儀嘲哢いたし候事與官次郎儀追駈引留申爭、富五郎儀脇差を以、右藤右衛門、津右衛門江疵爲負候儀與も不存旨申候得共、右始末同道人之詮も無之不埒ニ付、急度叱り可申渡處、數日入牢ニ付令宥免、不及咎之沙汰段申渡、無宿ニ付門前拂、○評議書略

敲之上門前拂

〔比考錄〕島長門守御番所掛
寛保三年亥十一月五日追放帳
一敲之上門前拂
一右同斷
亥九月廿日入牢　品川無宿　長三郎
上總國千葉無宿　右同斷坊主　文七
右長三郎儀、腰錢、袂錢、度々ニ壹貫四五百文程盜取候段、不屆ニ付、土岐丹後守殿依御指圖、敲之上門前拂、
右文七儀、腰錢、袂錢、度々ニ五六百文、幷きせる抔盜取、近き頃も腰錢五百文盜取候段、不屆ニ付、右御同人依御指圖、敲キ候上門前拂、

洛中拂

〔御仕置例類集三ノ二〕寛政八辰年六月
松平伊豆守殿御差圖
町奉行坂部能登守掛
一京都四條通大黑屋武兵衛、御制禁之品賣捌候一件、○中略
東洞院魚店上ル町山城屋かん借屋　佐野屋庄兵衛
外十三人
右之もの共儀、博弈ニ携候儀者無之候得共、本商賣向不景氣に相成候迚、御法度之儀者乍辨、博弈ニ用候讀がるた、幷めくりかるた札、銘々內職ニいたし、全賣德に泥み、人之惡事に成候品を數多拵立、賣捌候始末不屆ニ付、一同洛中拂、

〔御仕置例類集一ノ一〕文政四巳年御渡

京都町奉行伺

一所拂ニ相當り候もの居宅燒失いたし右御仕置難申付儀ニ付評議、

二條西洞院東入町　茂七

右之もの儀困窮ニ付諸會所銀等口々借受返濟相滯候ニ付、夫々日切濟方申渡貸物會所之口濟方不埒ニ付手鎖之上町預申付置候處番之もの透を見合手鎖外し出奔いたし候儀共不屆之至ニ付、洛中洛外拂、

此儀手鎖を外し候もの之御定但書ニ手鎖を外し欠落いたし候もの本罪ゟ一等重く可申付與有之、吟味之趣ニ而ハ質物仲ヶ間之ものゟ著類等借受返濟相滯候ニ付取立之儀右會所ゟ願出、日限濟方申付候處不埒ニ付手鎖之上町預申付置候内手鎖を外し逃去、追而立歸候後被召捕候由ニ付右ハ過怠手鎖之趣意ニ而則本罪手鎖ニ相當候ものニ付前書御定ニ見合本罪より一等重く所拂相當之ものニ候處、欠落中居宅類燒致し當時居宅無之上ハ所拂申付候而ハ御仕置之趣意相立不申候間洛中拂、

朱書　評議之通濟

朱書　前書茂七御仕置段取之儀ニ付左之通伊勢守申上置、

京都御仕置之儀洛中洛外拂山城國中拂輕追放與申順を以前々より評定所一座評議仕申上來候儀ニ而江戸十里四方追放ニ相當り候ものを洛中洛外拂江戸拂ニ當り候ものを洛中拂與先年評議之例有之候得共山城國中拂洛中洛外拂洛中拂與三段有之都而入墨之ものハ洛中を拂候事ニ付江戸拂を洛中拂ニ引當候而は相當不申候間寛政四子年一座評議之上江戸拂ニ當り候ものハ洛中洛外拂江戸十里四方追放ニ當り候ものハ山城國中拂與評決仕候趣書留有之且

洛中洛外拂

去ル卯年一座江評議ニ御下被成候佐野肥後守京都町奉行之節相伺候大坂堂島米相場高下相圖を以移取候一件之内當時無宿次兵衛洛中拂與相伺候ニ付右ハ所拂相當之見込ニ候哉又ハ本罪所拂之ものニ候得ども無宿之故を以洛中拂與相伺候處次兵衛儀所拂與可相伺ものニ候得共無宿之儀ニ付洛中拂與相伺候儀ニ而所拂與見込候無宿ハ洛中拂與相伺候先例之段申聞江戸表ニ而ハ所拂ニ當り候無宿もの之儀江戸拂ニ申付候外無之候ニ付右之通申付候得共洛中洛外拂ゟ以下ニ洛中拂與申廉有之候上ハ所拂ニ當り候ものを洛中洛外拂ニ可申付筋も無之候間次兵衛儀伺之通洛中拂與申上此度之茂七儀も右同樣申上候儀ニ有之併京都御仕置ニ而も段取ニおいては江戸表段取之通所拂ゟ直ニ洛中洛外拂與申上來候儀ニ御座候、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月廿八日九條前關白久我前內大臣等答ヲ被ル各輕重アリ、

洛中住居停止申渡

九條入道前關白
久我入道前內大臣
千種入道前中將
岩倉入道前少將
藤　式　部

〔張紙留〕京都御仕置御當地ニ而江戸拂ニ當り候ものハ洛中洛外拂但右同斷、

上ニ候ハヾ江戸を構洛中洛外拂、

江戸十里四方追放ニ當り候ものハ山城一國拂但右同斷、

本文山城一國拂與有之候得共山城國中拂與可認事享和元酉十二月京都町奉行伺奈良京修地方西側倭屋與三郎初筆一件之內評議書ニも山城國中拂與認候事、

右寛政四子年五月十三日、一座評議之上極ル、

但江戸十里四方追放ニ相當候ものを、洛中洛外拂江戸拂ニ當り候ものを、洛中拂 與 申、先達而評議之例有之候得共、京都ニハ山城一國、洛中洛外拂 與 三段有之、都而入墨之ものは、洛中を拂候事ニ付、江戸拂を洛中拂ニ引當候而ハ、相當不申候間、前書之通評議極、

〔天保集成絲綸錄百一〕寛政八辰年四月

一博奕いたし候もの敲之事

禁裏御座所之儀故、敲入墨敲之ものハ前々より洛中洛外拂申付候仕來候處、其儘差置候而ハ、仕來ニふれ候付、仕來之通、洛中洛外拂たるべく候得ども、左候而ハ博奕之御仕置、殊之外重く成候間、一同不及敲、定例之通リ過料申付候事、

〔御仕置例類集三ノ八〕寛政九巳年六月

松平伊豆守殿御差圖

一武州南秋津村醫師運朝醫業之儀ニ付、二條殿家來 與 申立、不埒之致取計候一件、〇略 申

評定所一座掛

二條殿家來　津幡伊豫

右之もの儀、私欲ハ不致共、運朝願之趣公邊相濟、二條殿ニ而被引受候得共、勝手向足合ニ可相成 與 存候得共、醫業之儀ハ不被賴筋ニ付容易ニ聞濟有之間敷 與 相察、一ト通立入候儀而已二條殿江申立置、同役隱岐下總守 與 申合、夫々願之趣聞濟有之候姿ニ致成得 與 身元不相糺運朝泰夫を呼出、關東江差下、禮錄金等も追々取立候故、右之もの共彼是不束之致取計候及始末候段不埒之至、其上中庄村忠右衞門儀、奈良奉行江訴出候古銀札引替之儀ハ、同役下總守取扱得 與 子細ハ不存由申候得共、下役森甚左衞門相果、取上置候由之銀札何方ニ有之候哉不相知候ハヽ有體可申立を、右銀札無之而ハ如何 與 存、外ゟ買入之儀下總守正書一同談合候始末旁不屆ニ付、洛中洛外

拂江戸徘徊差止、〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ二十三〕文政五午年御渡

京都町奉行伺

一江州八幡元玉屋町與吉其外之ものども、無宿勇幸を打擲および同人相果候一件、

朽木主膳知行江州蒲生郡八幡元玉屋町町中持借屋虛無僧無外事 醫師 宮垣泰助

越後國高田浪人藤田林右衞門悴虛無僧聲峯事 無宿 八五郎

右之もの儀、當正月十六日夜、八幡社内ニ而口論および打擲ニ逢疵受相果候勇幸ハ懲玄より月限之斷書を貰、吹笛往通いたし、本則ハ無之ものニ候處、其儀ハ乍存變死を隱ニ事濟之儀、與吉摠七より相賴候迚、懲玄ゟ本則申立中之ものニ泥ミ、本寺屆不相濟候而ハ、取計方了簡ニも難及抔 與 申、懲玄俱々出京いたし、屆一ト通ニ而濟候儀を、取計を以品能相濟候趣申成し與吉摠七より禮金貰請候始末、全事を含候取計方不屆ニ付、兩人とも江州八幡を構洛中洛外拂、〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ二十七〕文政五午年御渡

京都町奉行伺

一澤家家來塚本衞守不屆之致取計候一件

御影堂境内平井村新吾借屋

直次郎方ニ居候同人父澤家家來　塚本衞守

右之もの儀澤家家來之身分ニ而病氣 與 は乍申無斷も町住之悴直次郎方ニ數日止宿罷在、隣家伊兵衞吟味筋ニ而被召捕家財改ニ可相成間、箪笥壹棹火鉢壹ツハ、未代銀不相拂品ニ而欠所ニ成候而ハ難澁之旨、同人之妻つる相賴候迚預置、改之節押隱不差出、其上帶候儀ハ無之、其上手所持罷在候儀者不屆ニ付、十手取上洛中洛外拂、〇評議書略

五畿內構追放

〔科條類典下七〕元文五申年十月京都町奉行伺之內〇略中

同國同郡同鄉同村〇山城國綴喜郡宇治田原鄉長山村　年寄　彌平次

此もの儀同所字粽谷上泉鍛三ヶ所地所除キ置三ヶ所之竹松杉賣拂候段年寄役も乍ニ相勤別而不屆之仕形御座候得共庄屋太右衞門得心申聞候儀に候得ば一等輕く家財田畑山林取上五畿內近江丹波武藏下總長崎東海道筋木曾路筋日光日光海道駿州甲州尾州紀州常陸追放可ニ申付旨相伺候處御下知五畿內構追放

山城國中拂

〔御仕置例類集二ノ十〕文化元子年御渡

京都町奉行伺

一當時無宿浪人津田郁治儀兄江對し及不法候一件

大坂難波新地壹丁目鹽屋藤七支配かし屋大和屋政吉代判　灘屋源兵衞

右之もの儀津田十藏不行跡ニ付國許備前表江連歸候積親類共より郁治江相賴同人十藏江引合置候始末も有之且者郁治兄弟之儀直ニ引合も難致候間此もの罷登穩ニ連出呉候樣郁次申聞及斷候處達而賴候故承知いたし罷登穩ニ連出可ニ申ト藤七江引合候得共斷候ニ付其段郁次江申聞候處然ル上者權威を以如何樣ニもいたし連出呉候樣同人相賴候迚承引いたし八田四兵衞安兵衞其外之もの同道此もの十手を差其方江罷越十藏ニ出會大坂表上意之趣申成同人儀尋之筋有之近邊宿屋ニ同心扣居候間同道可致旨申聞候處然ル上者權威を以如何樣ニもいたし連出呉候樣同人相賴候迚承引いたし八田四者乍申右始末不屆之至ニ付十手取上大坂を構山城國中拂〇評議書略

〔御仕置例類集二ノ十〕文化六巳年御渡

京都町奉行伺

一丹波國下竹田村總兵衞初筆巧事いたし候一件

伏見拂

內藤播磨守領分丹州氷上郡下竹田村　馬持總兵衞

右之もの儀駄賃定直段相極候儀馬肝煎彌三右衞門ト馬持共應對難調候ニ付彌三右衞門不致ニ屋馬牛計ニ而荷物付出し渡世薄く相成難澁ニ差迫候迚牛追之もの爲困候ハヽ自然と致ニ屋馬候樣可ニ相成と存付次八其外之もの共申談此ものより利平次相賴候ニ付同人儀牛ニ被突候體ニ取拵候始末重モ立取計候儀共不屆之至ニ付居村を構山城國中拂〇評議書略

〔御仕置例類集一ノ五〕文政二卯年御渡

伏見奉行伺

一京町五丁目友次郎女房くま捨子致し候一件

京町五丁目宗吉方同居くま夫　友次郎

右之もの儀くま申合彌兵衞世話を以養育料相添貰請候小兒くま捨子ニ致し其後同人ゟ彌兵衞ニ養育料差戻候儀外方江預有之與而已存日々働ニ罷出右樣子一切不存旨申候得共右始末不屆ニ付伏見拂〇評議書略

大和國中拂

〔御仕置例類集一ノ五〕文政二卯年御渡

奈良奉行伺

一和州西谷村又兵衞其外もの共徒黨致し候一件〇略中

右西谷村之內細峠　彌兵衞

外四人

右之もの共儀源八又兵衞企之段には不加地頭家來濱島清可爲致歸府威迄と心得其上斷候而は源八又兵衞憤可申と存候迚右兩人任賴不輕人寄之張札に村々騷立多人數罷出地頭陣屋幷同家來乾清左衞門宅徒黨及狼藉清相果供三彌又助疵負候始末に至り候段不屆に付五人共大

和國中拂、

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政八酉年御渡

大坂町奉行伺

一難船見分之節御代官手附其外之もの共不届之取計いたし候一件、

大岡源右衛門御代官所石州邇摩郡温泉津村　年寄　庄藏

右之もの儀唐物抜荷賣買御嚴禁之儀乍辨出所不正之品々可有之與乍心付利右衛門儀破船浦方江之打一諸拂路用ニ差支其上右藥種不引請候はゞ船宿之詮無之ニ付以來薩州船ハ參リ候儀差留候旨申ニ泥ミ渡世之差支而已ニ拘り利右衛門ゟ出所不正之唐藥種買受賣拂德用ニ取、殊ニ一旦源右衛門方ニ而糺之節和藥之旨相違之申立いたし候段旁不届ニ付不正之藥種取上、石州を構攝河兩國拂、〇評議書略

攝河兩國拂

大坂三郷拂

〔評議書〕寛政元年十月十九日

和泉守殿江紀伊守殿内藤豊後守殿立會下り物相添上ル

去月廿日御渡被成候大坂町奉行相伺候玉造稻荷社地上ゲ砂持ニ付祭禮同樣之賑を催異說等申觸候一件御仕置之評議仕候趣左之通ニ御座候、

藤森町鍛冶彌兵衛借家大屋藤兵衛同家悴　善兵衛

右之者儀酒狂之よしは難取用往來之女江徒致態與神罰請手足すくみ候體ニ相成人氣を迷せ、親藤兵衛幷同借屋喜右衛門江も酒狂ニ而不相覺候儀之旨申僞右之次第稻荷社ニ而高聲ニ酒相止候儀立願いたし候儀ニ仕成し候始末奇怪申觸候同前之儀不埒ニ付所拂可申付哉之段相伺申候、

此儀御定書ニ奇怪異說申觸し人集致候ニおいては人集致候宿江戸拂發起致申觸候頭取右同斷同致世話候もの所拂與有之候間右發起之ものニ見合大坂三郷拂可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

順慶町四町目大和屋幸七支配借屋橘屋　市郎兵衛

右之もの儀本屋仲ケ間ニ加リ商賣致候上は猶更心得も可有之處稻荷社砂持賑ニ乘ジ奇怪成雜說之趣等右板行致增補最初ニ右草雙紙賣出德用取既ニ追々同樣之異說相綴候草雙紙賣出候ものも致仕來候樣ニ成行候段異說申觸候同樣ニ而不埒ニ付賣殘草雙紙板行取上所拂可申付候哉之段相伺申候、

此儀前書之御定ニ見合今井屋丈助等申觸候より事起り草雙紙取綴候ものニ而發頭ニハ無御座候得ごも申觸候ニハ形チも無之儀草雙紙を拵商賣致候は其品殘り趣意ハ同樣ニ御座候間賣殘り草雙紙板行取上大坂三郷拂可申付旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

〔張紙留〕大坂三郷

北　南　天滿

當時北組南組天滿組與唱候由、

堺兩郷拂

〔御仕置例類集二ノ八〕文化十酉年御渡

堺奉行伺

一無宿次兵衛僞之往來手形を以村送り相成候一件、

無宿　勘太郎

右のもの儀兼而知る人無宿次兵衛盲目相成袖乞ニも難罷出日々之賄ニも差詰西國四國巡拜出度旨相噺往來手形所持いたし候はゞ病氣差發行倒候節施略致間敷村送り等も不差滯旨申聞候處勘辨を以右手形拵呉候樣被相賴次兵衛儀盲目之身分旅籠拂も難成上者野宿いたし及飢命候より外ニ仕方無之段氣之毒ニ存候迚宇兵衛江相賴僞之往來手形認貰印形無之候而者、

先々ニ而不慥ニ可存と寺號江者、自分所持之印形を押、次兵衞江相渡候故、右手形所持いたし罷出、肥後國ニ而行倒、長承寺村迄村送ニ成、罷越候仕儀ニ相成候段、不届ニ付、堺兩郷拂、○評議書略

〔御仕置例類集二ノ十享和二戌年御渡〕

駿府拂

駿府町奉行伺

一駿州江尻入江町太兵衞宅ニ而、致博奕候一件、○略中

右之もの儀、十四年以前國元出奔いたし、江戸表江罷出、番具商賣いたし、東海道筋所々立廻り、去酉十二月中、彌助方江參り居同人申合、祖般召連博奕取引之金、孫兵衞繁藏方催促いたし、手取候はゞ相應之禮錢可申請心組ニ而、不正之儀ト爲○爲恐作誤存三人一同江尻宿江罷越候始末、不埒ニ付五十日手鎖可申付處、數日入牢ニ付不及咎、門前拂、

此儀前書彌助同樣之ものに候得共、無宿之儀ニ付、駿府拂、

朱書評議之通濟

佐渡國中拂

〔御仕置例類集二ノ十文化六巳年御渡〕

佐渡奉行伺

一佐州水替人足鐵之助初筆申懸いたし候一件、　佐州雜太郡相川貳丁目　定助

右之もの儀、道中帶刀いたし候義者無之候得共、町人之身分ニ而、於出雲崎無宿水替人足鐵之助外六人之もの共、逃去、騷動いたし候場所江、帶刀人ト見江候樣、いたし成罷越候儀、道中ニおゐて、帶刀之儀者勿論苗字等相名乘申間敷旨、兼而相觸置候之處、出雲崎ニおゐて、帶刀人之趣ニいたし成候段、不届ニ付、所持仕候脇差取上輕追放、

此儀吟味書之趣ニ而者、於出雲崎無宿水替人足鐵之助外六人之もの共逃去、右騷動之場所江罷出候節、脇差斗ニ而者人々取用も不宜存候間、所持之脇差ニ新井宿ニ而相調候脇差を差添、

帶刀人と見江候樣いたし罷越候者有之、全帶刀いたし候ものニ者無之、脇差を以帶刀人之體にいたし成候儀に付、自分と帶刀いたし罷在候、百姓町人刀脇差ともに取上輕追放之御定より輕く、脇差取上越後國出雲崎を構佐州一國拂

朱書評議之通濟

長崎拂

〔御仕置例類集一ノ十九文政五午年御渡〕

佐渡奉行伺

一越後無宿要藏盜いたし候一件　佐州雜太郡相川八百屋町善兵衞店借　熊平

右之もの儀要藏を盜賊與ハ不存候とも、身元も不相知ものを同船いたし來り、國法をも乍存番所改をも不請、數日船中ニ差置、旅人之金銀借受返濟遲滯および候段、旁不届ニ付、廻船取上一國拂、○評議書略

○按ズルニ、是ハ佐渡奉行ノ處刑セシモノニテ、一國トハ卽チ佐渡一國ヲ云フナリ、

〔憲教類典四ノ六評定〕寶曆五乙亥年七月八日

小出信濃守殿御渡

長崎近國ニ而追拂成候者、又ハ致欠落候者共、長崎江入込惡事等いたし候者有之候、依之近國にて仕置申付候節、長崎を相構追拂可被申付候、欠落者、追拂者、長崎ニ罷在候者召捕候而、其領主領主江長崎奉行より可相渡候間、請取候樣可被致候、

右之趣、筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、周防、長門、國々領地有之、万石以上之面々江可被相達候、

七月

〔御仕置例類集一ノ五文政八酉年御渡〕

長崎奉行伺

一肥前國椛嶋村庄藏儀同國爲名津常十と口論および、多人數打合死失之ものも有之候一件、〇中略

右之もの儀徒黨ヶ間敷儀は致間敷旨御觸も有之候處、兼而申合候儀には無之候共、漁場に而椛嶋村庄藏、爲名津要八漁事之儀申爭候上、同所常十船江庄藏幷椛嶋村榮次郎淺右衞門漕付候節爲取支、外漁船之もの共一同乘付、榮次郎淺右衞門儀、常十を海江被投込、庄藏は爲名津和助と組合、毎江落込游上り候上同所要吉船之船具取之取合および候を、外漁船之もの共一同取支候後、常十を椛嶋村之もの共連越、同人身分無心元候間、連歸吳候樣爲名津定七を相賴候はゞ、取計方可有之處、此者頭取同所形右衞門方之助儀、利平江申談多人數庄藏方江罷越、雙方石槇等投懸打合、庄藏宅打荒候始末に至候段不屆に付、居村を構ひ長崎拂〇評議書略

箱館市中拂

〔御仕置例類集ニノ〕文化三寅年御渡

箱館奉行伺

一箱館表御仕置刑名之儀ニ付評議

書面申上候通箱館奉行江被仰渡候旨被仰聞、承知仕候、

寅十月六日　評定所一座

箱館表御仕置筋之儀、外遠國並之通、遠島以下御仕置、入組不申分ハ伺之通向後手限ニ而取計候樣、尤遠國奉行之內江申談、爲見合先例借受可申旨被仰渡、奉承知候、然處外遠國御役所ニおいて申付候御仕置ニ、其御役所之場所近邊等、構候刑有之候、長崎ニ而ハ、長崎市中拂幷市中郷中拂、佐渡ニ而ハ、相川拂抔有之候間、箱館ニ而も箱館市中拂幷市中郷中拂、奥二刑刑名を附置、外遠國奉行ニ而其所を構候例ニ相當候分ハ、右を見合、箱館市中拂幷市中郷中拂等之御仕置申付度奉存候、新刑名之儀ニ御座候間、此段奉伺候、

下ヶ札

本文箱館市中拂ハ、江戸拂御仕置ニ准じ、市中郷中拂ハ、江戸十里四方追放御仕置ニ准じ候積ニ御座候、

此儀評議仕候處、箱館市中拂ハ、江戸拂市中郷中拂ハ、江戸十里四方追放ニ准御仕置申付候儀、外遠國奉行類例も有之、構場所不相當之儀も相聞不申候間伺之通極置候樣被仰渡可然哉ニ奉存候

寅九月

松前市中拂

〔御仕置例類集ニノ〕文化七午年御渡

松前奉行伺

一松前ニ而申渡候追放もの御構場所之儀ニ付評議

鯖　書面評議仕申上候通、松前奉行江被仰渡候旨被仰聞承知仕候、

附　未二月十九日　評定所一座

書面伺之通可仕旨被仰渡奉承知候、

未二月十八日　荒尾但馬守

去ル亥年、戸川筑前守、羽太安藝守、箱館奉行勤役中、箱館御仕置筋之儀相伺候、書面之內、追放もの御構場所之儀ニ付被仰渡候御書付之趣を以、評定所一座江問合仕候處、陸奥其外他國之もの、箱館松前之內ニ而惡事いたし候節ハ、其住居之國、幷箱館松前をも相構、又ハ箱館松前之內ニ而仕成候惡事ニ無之候とも他國之もの共於箱館吟味之上他國ニおいて惡事いたし候段相顯候右之科を以追放申付候節ハ、其住居之國其外箱館幷同所附村々を構、松前ハ相除候積取計候樣伺之

上挨拶有之候、然ル處松前上地後、同所奉行所ニ相成江差之儀ハ、唯今ニ而ハ出張御役所も有之候儀ニ付、以來箱館同樣御構之箇所相加、前書評定所一座挨拶之趣を以、他國之もの松前箱館江差之内ニ而惡事いたし候節ハ、其住居之國幷松前箱館江差同所附村々をも相構、又ハ松前箱館、江差之内ニ而仕成候惡事ニ無之候とも、松前ニおいて吟味之上於他國惡事いたし候段相顯右之科を以追放申付候節ハ、其住居之國之外松前幷同所附村々迄構箱館江差ハ相除候之積取計候樣可仕候、右之趣猶又評定所一座江問合之上此段奉伺候、

此儀松前表上地ニ不相成以前箱館奉行より追放もの御構場所之儀ニ付問合候節伺之上及挨拶候趣ニ准じ伺之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

午十二月

〔御仕置例類集一ノ一〕文政三辰年御渡

松前奉行伺

一松前表刑名之儀評議

鯖書面申上候通、松前奉行江被仰渡候旨、被仰聞承知仕候、

評定所一座

附

辰八月廿四日

文化三寅年、戸田筑前守、羽太安藝守箱館奉行勤役之節箱館市中拂ハ、江戸十里四方追放ニ准じ、御仕置申付度旨奉伺候處伺之通被仰渡候然ル處松前上地以後同所奉行所ニ相成去ル午年荒尾但馬守松前奉行之節同所ニ而申渡候追放もの御構場所之儀奉伺候處伺之通被仰渡候右伺書之内、松前箱館江差之内ニ而仕成候惡事ニ無之候とも、松前ニおいて吟味之上追放申付候節ハ、其住所之國之外、松前幷同所附村々迄相構候段ハ、箱館市中鄉中拂ニ相當り、右より一段輕く、松前市中而已相構候ハ、箱館市中拂ニ相當候筋ニ付、松前市中拂ハ、江戸拂ニ准じ、松前市中鄉中拂ハ、江戸十里四方追放ニ准じ、以來右二刑刑名を極置御仕置申付度奉存候樣伺候、

此儀評議仕候處、松前市中拂ハ、箱館市中拂ニ見合、江戸拂ニ准じ、松前市中而已相構、松前市中鄉中拂ハ、箱館市中拂ニ見合、江戸十里四方追放ニ准じ、松前幷同所附村々迄相構候積極置不相當之儀も相見不申候間伺之通相心得可申旨被仰渡可然哉ニ奉存候、

辰八月

〔御仕置例類集一ノ三十五〕文政三辰年御渡

松前奉行伺

一松前在清部村忠左衞門外壹人、松前志摩守田地戻之願企候一件、

松前西館町　大工　德兵衞

右之もの儀、清部村忠左衞門松前地一圓松前志摩守領知ニいたし度旨之企、悖作右衞門與忠左衞門內々咄合候儀乍承、差留も不致、殊ニ作右衞門ハ忠左衞門江差越候書狀之子細ハ不存候とも、忠左衞門被召捕候ニ付右書狀殘置候而ハ作右衞門身分ニも可拘哉與爲燒捨幷暮し方差支候與は乍申、忠左衞門儀右企之一條ニ付所々ゟ取集候金錢之內壹兩與錢六百文貰受候段、忠左衞門同樣人氣をも動し候ニ相當り、不屆ニ付、松前市中拂〇評議書略

〔御當家令條三十五〕今度勢州外宮師職三日市帶刀配樫方祓之表ニ、兩太神宮と依書出候、內宮師職輩新規非例之由奉行桑山丹後守江訴之委細穿鑿之上、雙方江戸召下、於評定所遂對決候處、兩之字書來證據不分明、新規無紛就中外宮師職之內中西丹波儀、兩之字書加候一帳稱證文雖出之、墨色新敷、不慥成儀申之、掠奉行之條、不屆至極也、右之趣達上聞、丹波儀は神領中追放帶刀幷一伊勢神領拂

味之輩閉門被仰付之訖、自今以後如此之新規於申出は速可被處嚴科、仍爲後鑑遣下知可相守於

雙方者也、

寛文十一年辛亥十一月廿二日　丹後桑山〇以下七名略

両宮師職中

〔御仕置例類集ニノ二十三〕文化二丑年御渡

山田奉行伺

一勢州竹川村乙松盗いたし候一件　勢州多氣郡宮川外神領竹川町　百姓乙松女房きし

右之もの儀、乙松盗いたし候儀不存候得共、同人ゟ品物貰請、右品正次方ニ而被盗取候品ニは無之哉與心付候はゞ、早速可訴出處無其儀、同人構杉垣之内江差入置候段、旁不届ニ付神領拂、

〔御仕置例類集ニノ五〕文化八未年御渡

日光奉行伺

日光御領拂

一日光御山内に而鹿打殺候一件　日光御領野州都賀郡上草久村　百姓主水忰　新吾

百姓　民藏

右之もの共儀、日光御山内に用事有之罷越、歸候途中中山道町表において鹿に行合、殺生禁斷之儀は兼而乍相辨周章候に付忘却いたし候迚、御幸町林平倶々追廻し、御殿地表門江追詰、林平打倒候を、新吾帶居候腰物に而鹿之首を打落、民藏は跡ゟ駈付候とは乍申倶々追廻し、其上御場所柄之儀存出し其儘難差置迚、折節人不居合を伺、杉之葉を覆隱し置、内證に而取計候積、跡元片付之儀林平江相頼候始末、一同不届に付、新吾儀は江戸を構、日光御料拂、民藏儀は百日手鎖、

追放異域

一野州文挾宿傳四郎外六人致博奕候一件　日光御領野州都賀郡板橋宿　百姓浪右衛門弟　忠兵衛

右之もの儀、日光中禪寺、野州久我村地内、石裂山林笹原等において、文挾宿傳四郎筒取ニ而籌致博奕候、度々宿内粂七、無宿勇七、其外名住所不存者共手合ニ加リ、廻筒籌博奕をも致、其外傳四郎ニ被頼、野州加園村、外壹ヶ村地内河原において、名住所不存もの共打子ニ致、籌博奕致候節、傳四郎代ニ相成、筒取致、てら錢取候始末不届ニ付江戸ヲ構、日光御領拂、〇評議書略

〔耶蘇天誅記中〕慶長十六辛亥年、京都ノ所司代板倉伊賀守勝重嚴命ヲ蒙リテ、五畿内ノ吉利支丹宗門伴天連、以留滿ノ族ヲ搜シ求メ、悉ク召捕テ、異國へ追ヒ放タル、其時勝重彼宗賊等ニ告テ云ク、此般ハ寛宥ノ儀ヲ以テ、一命ヲ助ケテ本國へ歸シ遣スナリ、向來儻又此國ニ來ルニ於テハ、忽ニ死刑ニ行フベキ旨、屹度申渡シ、扨又洛中洛外ヲ始メ、大坂、奈良、堺、伏見等、其外近國近邊ヲ相改メ、彼宗門ノ類屬ヲ召囚リ、坊舍ヲ破却シ、堅ク禁斷セラル、猶彼宗ニ拘泥シテ本宗ニ復セゼル徒ヲバ、各苞ニ捲キテ、四條五條ノ河原ニ積ミ置キ、鐵杖ヲ以テ、故魯邊々々ト聲ヲ掛テ責メ殿キタル、然レドモ執著深クシテ宗門ヲ改轉セザル奴曹アリシガ、此般ハ助命セラレテ、伴天連ト倶ニ、長崎ノ湊ヨリ船ニ乘セ、南蠻國へ追放セラル、

〔耶蘇天誅記中〕慶長十九甲寅年八月廿四日、南蠻國ノ商船長崎ノ湊へ入津ニ付テ、彼蠻人共ニ吉利支丹ノ輩追放ノ地、何ノ國然ルベキ哉ノ趣キ、公儀ヨリ御尋アリシニ、亞媽港へ追放仰付ラレ、然ルベキカノ由申上ルト也、

〔慶長日記下〕慶長十九年三月七日加賀家中高山南ノ坊と申者、吉利支丹之伴天連ニ成、宗旨を改可申之よし上意ノ間、加賀殿被申付候へ共、改申まじきと申切、此者元來荒木亂の時信長へ忠節ノ者也、其時ハ右近と申也、近年加賀に罷在知行二萬石取申候、命ハ御助被成南蠻へ御拂被成候、